宮城県多賀城跡調査研究所年報1977

多賀城跡

一 昭和52年度発掘調査概報 一



序 文

多賀城跡調査研究第2次5か年計画の第4年次にあたる本年度は、多賀城跡西南部五万崎地区を対象とした第30次調査と、政庁の北側に接する大畑地区を対象とした第31次調査とを実施した。この内前者は、昨年度の第28・29両次の調査を引き継いだものであり、また後者は多賀城中軸線上の部分を明らかにする調査の一環をなすもので、政庁地区と六月坂地区の中間をつなぐ意味あいをもつものである。

この結果第 30 次調査では外郭西門跡の発見という大きな成果を挙げることができた。 西門およびそれに通ずる道路の検出によって、五万崎地区が大きく南北に二分されること をはじめて明らかにすることができた。そして南半では、10 世紀後半から 11 世紀に降る 官衙が存在するのに対し、北半ではそれをややさかのぼる建物群があり、両者はやや様相 を異にすることをも把握することができた。一方 31 次調査では政庁の北側に接する地の 使われ方及びその時期等をとらえたが、この地区と政庁北方の六月坂地区との間には浅い 谷が入りこみ、したがって両地区は一体となって利用されていたものではないことが明確 になった。

本調査概報にはそれらの成果をやや詳細に盛り込むことができた。本書が東北古代史解明の一資料として活用されるならば幸である。

刊行にあたって日頃種々御指導いただいている指導委員会の諸先生をはじめ、文化庁、 多賀城市の関係各位及び地元の諸氏並に作業員の方々に深謝の意を表したい。 昭和53年3月20日

宮城県多賀城跡調査研究所長 氏 家 和 典

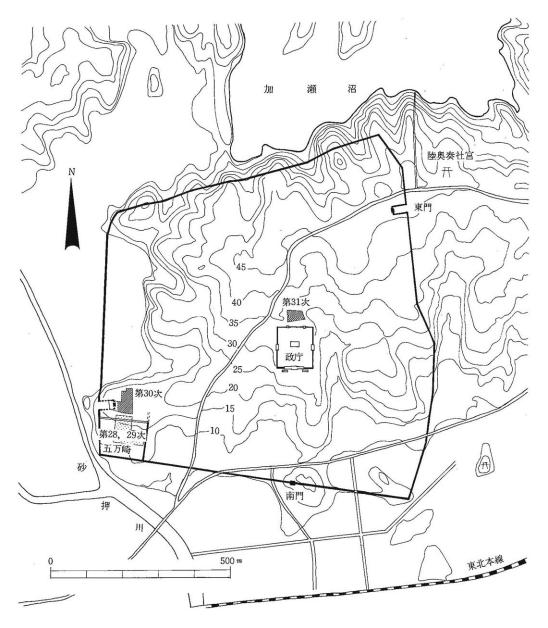
目 次

I	調	査計画	…]
П	第	30 次発掘調査	5
	1	調査経過	5
	2	発見遺構	6
	3	出土遺物	18
	4	考察	36
Ш	第	31 次発掘調査	41
	1	調査経過	41
	2	層序	45
	3	発見遺構	45
	4	出土遺物	54
	5	考察	76
IV	付	章	81
	1	調査成果の普及と関連研究活動	81
	2	研究成果刊行物	85
		例	

- 1. 測量原点は、政庁正殿跡の南入側柱列の中央に埋設したコンクリート柱である。この 原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線と定めた。この基準線は磁北に対し 9° 34'40"東に偏している。
- 2. 建物跡の方向についての記載は、南北棟の場合、南北基準線に対し北での測定角度で 表わし、東西棟は基準線に対し東での測定値で表わす。
- 3. 須恵器・土師器杯で、「ヘラ切り」・「糸切り」とだけ記載したものは、ヘラ切りの後へ ラケズリ調整を加えないもの・回転糸切り後ケズリ調整を加えないものを表わす。
- 4. この年報の執筆、編集には、当研究所の氏家和典、桑原滋郎、進藤秋輝、白鳥良一、 鎌田俊昭、高野芳宏、古川雅清、平川南があたった。なお、東北歴史資料館の藤沼邦彦 氏には出土遺物について多大の御教示をいただいた。

I 調 査 計 画

昭和 52 年度の発掘調査は、多賀城跡調査第 2 次 5 ヶ年計画の第 4 年次にあたる。 さいわい発掘事業費については、国庫補助金の内示(総経費 2,200 万円のうち、国庫補助金 1,100 万円)を得たので、次のように実施計画を立案した(表 1)。



第1図 昭和52年度発掘調査地区

表 1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査面積	期間
第 30 次	外郭西地域南部(字五万崎)	1,980 m² (600 坪)	4月~7月(埋め戻しを含む)
第 31 次	政庁北方地域(字大畑)	1,980 m² (600 坪)	8月~10月(埋め戻しを含む)

このうち、第 30 次発掘調査は、多賀城外郭西南隅の五万崎地区北西地域にあたり・昨年度の第 28・29 次発掘調査で、主に 10 世紀後半以降の建物群を発見した地区の北に隣接している。そこで、第 30 次調査では、第 28・29 次の建物群がさらに北にのびるかといりことと、この地区の使われ方を解明することに目的を置いた。その結果、外郭西門跡や第Ⅲ、IV期の建物跡が検出された。一方、第 31 次発掘調査は、政庁の北に隣接した地域を対象とした。ここには建物跡の存在が予想されたので、政庁北方地域での遺構のあり方、時期、およびその性格を究明することを目的とした。その結果、平安時代に属する建物跡などを検出した。しかも柱列を境に北と南ではその性格が異なることが判明した。ここでは古代から近世までの自然堆積層と古代の盛土整地層が複雑に重なり、調査に手間どったため、調査範囲を縮小せざるをえなかった。

昭和52年度の発掘調査の実施状況はつぎの通りである(表2)。

表 2 発掘調査実施状況表

	調査次数	調査地区	調査面積	期間
	第 30 次	外郭西地域南部(字五万崎)	2,500 m² (760 坪)	4月4日~8月6日
	第 31 次	政庁北方地域(字大畑)	1,200 m² (370 坪)	8月2日~11月10日

その他、年間を通じて、出土遺物の整理を行った。

なお、発掘調査事業と並行して、多賀城跡の外郭南辺築地(鴻ノ池地区)の環境整備と外郭東南隅環境整備の補足工事(総経費 1,600 万円、うち国庫補助額 800 万円)を行った。

Ⅱ 第30次発掘調査

1 調査経過

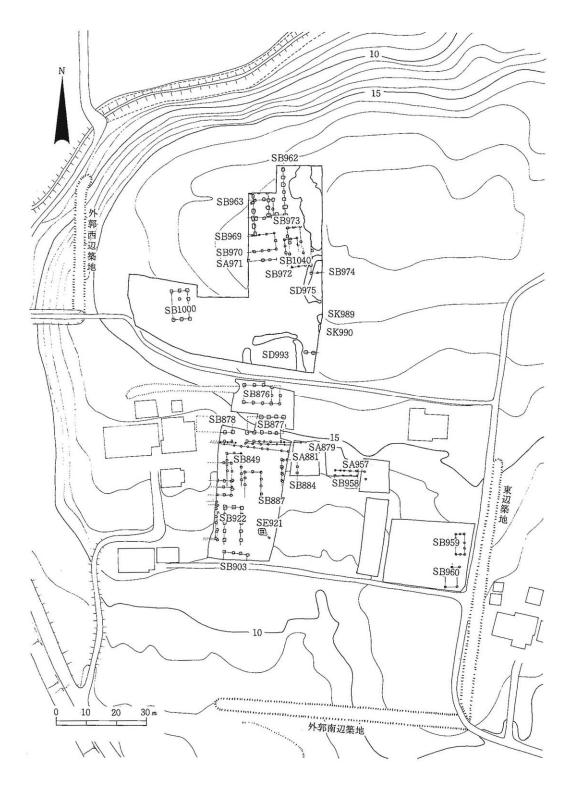
第30次調査は多賀城市市川字五万崎の北西地区のうち、約2,500 m²(760 坪)を対象として実施した。

五万崎地区は多賀城跡の南西隅にあたり、広く平坦な地域で、外郭南辺築地と外郭西辺 築地がその南と西を画している。さらに、東辺にも築地状の高まりが認められる(第 1・2 図)。この五万崎地区の最初の調査は昨年度の第 28、29 次調査として、南半を対象に実施 した。その結果、10 世紀後半以降の須恵系土器を伴なう建物群や柱列が検出され、また竪 穴住居跡、工房跡、井戸跡なども発見された。しかし、南半の北を限ると見られていた築 地状の高まりは現代の土盛りであったためこれらの建物群はより北へのびることが想定さ れた(註 1)。そこで、昨年度の調査の結果を踏まえ、今回の調査目的を次のように設定した。

- (1)この五万崎地区の北を画する施設があるとすれば、それを検出すること。
- (2)8世紀に遡る遺物が多量に発見されていたことから、これに伴う遺構を検出すること。
- (3) 五万崎地区の使われ方を把握すること。

これらの目的から、4月8日に五万崎地区北西地域に南北33m、東西24mのA発掘区を設定した。ついで、8日~12日にはA区の北から表土除去に入った。表土は全体に浅く、すぐに遺構が検出された。その結果、A区南側では近世以降の溝や柱穴が発見されたものの、古代の建物跡は検出されなかった。一方、北半部ではSB962・963・964・969・970・972・973・974・1040掘立柱建物跡やSA970掘立柱列が一部重複して検出された。また、発掘区の北西隅ではSX965盛土整地層、SD968溝、そしてSK966・967土壙なども発見された。この他、北東部では土壙群SK978・979・980・981・983・984・985、そしてSE982井戸跡などを検出した。これらの内SK983・984・SK985・SE982はSK981を切っている。また、SK984とSE982の埋土に須恵系土器を含んでいることから時期の降ることがわかった。しかし、他の土壙群の切り合いは明瞭ではなく、一応個々に区別したが、同一土壙の可能性も考えられる。これらの土壙群から多数の瓦や土器の他に小金板や布、編物、紙などの有機質の遺物も検出された(4月14日~5月14日)。

また、SB962 建物跡が北にのびるとみられたので、A 区の北に、南北 15m、東西 9m の拡張区を設けた。その結果、SB962 建物跡の柱穴の他に、 $SK987 \cdot 988$ などが検出された。

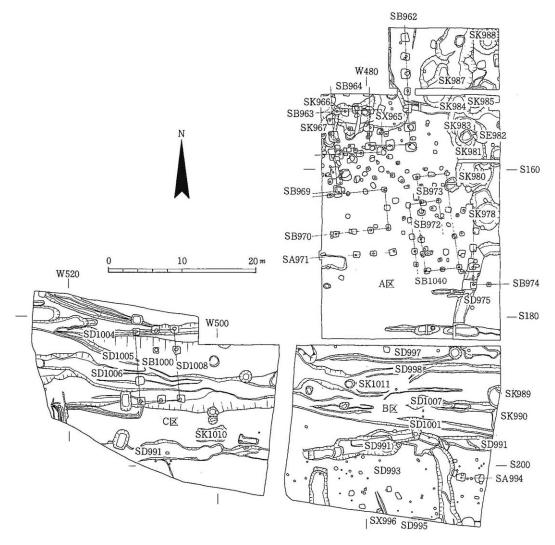


第2図 五万崎地区全体図

A発掘区と北拡張区の遺構検出のあと、5月18日から6月3日にかけて写真撮影を行い、 造り方を設定して平面図と断面図を作成した。その後、7月5日までA区の補足調査を実 施した。

一方、第 28 次調査の所見から A 区の南にも建物群の存在が予想されたので、5 月 4 日には東西に走る農道に接して約 24m 四方の B 区を設定した。5 月 4 日から 10 日にかけて表土を除去し、ついで、11 日以降 6 月 2 日まで精査を行った。その結果、縄文時代の SK989・980 土壙や古墳時代の SD993 方形周溝墓の他に、いくつかの東西溝が発見された。しかし、当初、考えていた古代の遺構は SA994 があるものの、建物跡は検出されなかった。3 日から 13 日まで遣り方を設定して、B 区の実測を行った。

続いて、農道に沿って B 区の西に C 区を設け、1 日から 3 日まで表土を除去し、東から



第3回 第30次調查発見遺構図

精査を行った結果、北半に幅 9m 前後の東西に走る大きな SD1008 溝を検出した。溝の最下層である多量の礫を含む灰茶褐色砂質土を除去すると、2 間・3 間の SB1000 建物跡の柱穴が発見された。この柱穴のいくつかはすでに削平されていたが、中の間が広いことから、八脚門であることが判明した。この門は外郭西辺築地より約 35m 東にあり、外郭東門との類似性などから、外郭西門跡と考えた(6月 13 日~7 月 4 日)。

ついで、6月 $22 \cdot 23$ 日、 $A \cdot B \cdot C$ 区の全体の写真撮影を行ったのち、27 日から 7月 6日にかけて C 区に遣り方を設定して、平面図と断面図を作成した。その後、柱穴の断ち割りなどの補足調査を行い、それと併行して A 区から埋めもどしを開始し、8月 6 日に調査を終了した。

なお、6月23日には、報道関係者に調査成果の発表を行い、25日には雨天のため東北歴史資料館講堂で市民を対象とした現地説明会を実施した。

2 発見遺構

第 30 次発掘調査で検出した古代の遺構には、掘立柱建物跡 12 棟、掘立柱列跡 2、盛土整地層 1、土壙跡 23、溝跡 4、時期不明溝多数、井戸跡 1 があり、他に、縄文時代の土壙 2、古墳時代の方形周溝墓 1 がある(第 3 図)。

以下順を追って記述する。

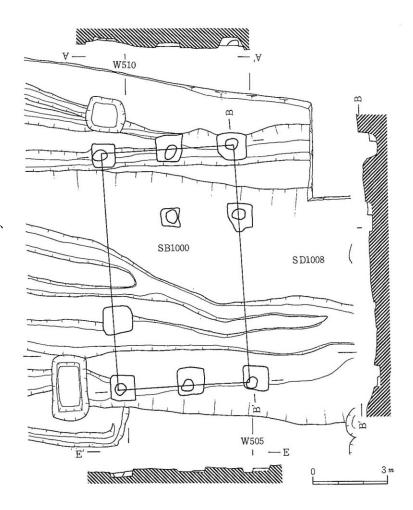
A 古代の遺構

(1) SB1000 門跡、SD1008 溝跡(第 4・5・6 図)

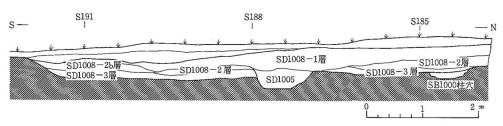
SB1000 門跡は C 区のほぼ中央、つまり今回の調査区域の西側で検出された、南北棟 2間 3 間の掘立柱建物跡である。柱穴は西側中央間の北のもの、東側中央間の南のもの、そして、棟通り中央間の北のものが SD1008 溝跡によって削平されている。東側柱列の柱抜穴で計測した建物の方向は、北で約 4 度ほど西に偏している。柱間寸法は、抜穴などでとると桁行が、北端の間約 2.7m、中央間約 4m、南端の間約 2.7m で、全長約 9.4m となる。梁行は約 2.7m 等間と考えられる。柱穴はおおむね 1.1m・1.2m の正方形に近いが、棟通り中央間の北の柱穴だけが 0.75m 四方と小さい。柱穴は、下部だけが残っており、判然としないが、壁はやや傾斜がある。柱穴の最も良く保存されているのは北妻で、特に東の柱穴が深さ 50 cmほど残っている。埋土は厚さ 10 cm前後の地山ブロックを含む固い茶褐色粘質土を互層に埋めている(第 6 図)。ほとんどの柱穴に抜穴がみられる。柱抜穴からは第Ⅲ期の平瓦(第 35 図)が出土している。

SD1008 溝跡は、C 区の北半に、9m 幅の 東西に走る大溝で、 SB1000 門跡の柱穴の いくつかを削平してい る。埋まり土は、4層 よりなる自然堆積層で ある。第1層は遺物砕 片を混入した暗褐色土、 第2層は第1層よりや や明るい暗褐色土、第 3 層は地山の小粒子の 入った灰黄褐色砂質土 で、第4層は部分的に みられるもので、多量 の礫を含む灰色土であ る。

(2) SB962·963 建物 跡、SX965 盛土整地層、 SD968 溝跡(第7図)



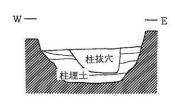
第4図 SB1000 西門跡、SD1008 平面図・断面図



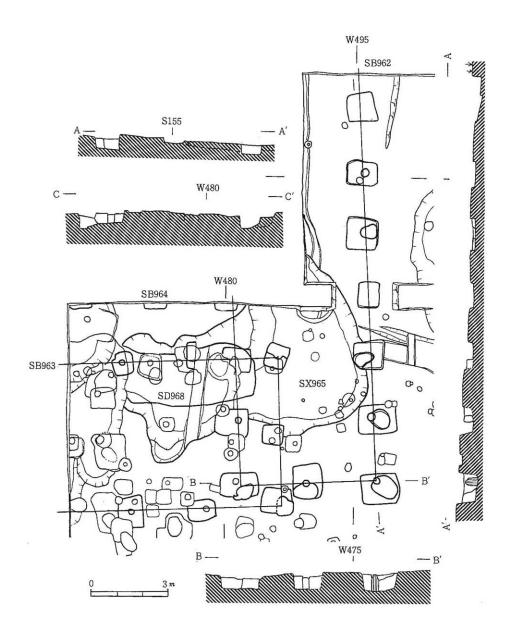
第5図 SB1000 西門跡柱穴と SD1008 溝断面図

A 区北西隅で検出されている。SB962・963 建物跡と SD968 溝跡は SX965 盛土整地層を掘り込んでいる。また、SD968 は SB963 の柱穴を切っている。

SB962 建物跡は、東西 2 間、南北 7 間以上の南北棟の建物であるが、北側が杉林であるため追及できなかった。建物方

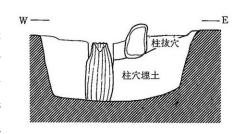


第6図 SB1000 柱穴



第7図 SB962·963·964·969、SX965、SD968

向は、東側柱列では、北が 2 度 39 分西に偏している。 柱穴には抜穴があるが、底までいたらず、下端に柱根 を残すものもある(第 8 図)。柱間寸法は、東側柱列で 南から 2.39m、2.38m、2.50m、4.61m(2 間分)……で あり、南妻は東は 2.69m、西は 2.7m 前後である。桁 行の柱間寸法はやや不統一だが、約 2.4m 前後で、梁

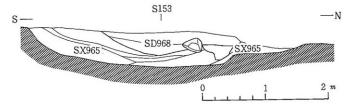


第8図 SB962 柱穴

行は約 2.7m 等間とみられる。柱穴は、1 辺 85~150 cmとばらつきがみられるが、概して 1 辺 120 cmぐらいのものが多い。壁はほぼ垂直に掘られ、底部にいたっている。埋土は、 地山の土で粗く互層に埋めている。最も保存の良い柱穴は、70 cmほどの深さで残っているが、すべての柱穴の底面レベルはほぼ同じである。柱は遺存している柱根から径約 30 cm ほどの丸柱であることがわかる。

SB963 建物跡は、南北 2 間、東西 3 間以上の東西棟の掘立柱建物である。建物方向は東 妻列では西に 2 度 54 分偏し、南側柱列では、北に約 3 度ほど偏している。柱間寸法は、 東妻が約 5.50m(2 間分)で、南側柱列が東から約 3.0m、2.89m である。埋土は黄暗褐色土

を用い、 $15\sim20$ cmの厚さで互層に埋めている。最も残りの良い柱穴は、深さ 50 cmほどであるが、底はほぼ同じレベルである。柱の径は 24 cmほどの丸柱であり、柱穴には抜取穴のあるものと、ないものとがある。



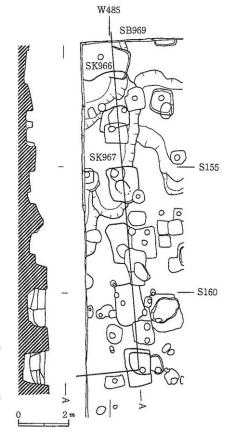
第9図 SX965盛土整地層とSD968溝の断面図

SX965 盛土整地層は A 区北西の北むきの小さな谷を埋めたもので、東西約 9.5m、南北約 6.5m 以上の不整形状に整地してあり、最も厚いところで約 65 cmある。下からそれぞれ厚さ 15~20cm ほどの、地山の土に若干の黒色土を含む固い赤褐色土、地山ブロックの多い暗赤褐色土、やや固い暗褐色粘質土を粗く互層に積んでいる。

SD968 は、巾 2.3m、長さ 5m の東西溝で、SD963 建物跡の北側柱列の一部を切っている(第 9 図)。埋まり土は大きく 2 層に分かれる自然堆積層である。すなわち、第 1 層はやや柔かい暗茶褐色土、第 2 層はやや固い茶褐色土である。なお、この溝は SK967 土壙によって切られている。

(3) SB969·964 建物跡、SK966·967 土壙(第 10~15 図)

A 区北西隅の西端にある。SK966・967 土壙は SB969 建物跡を切っており、SB964 建物跡は SK966 土壙を掘 り込んでいる。SK967 は SK966 を、SB963 は SB969 を切っている(第 10 図)。



第 10 図 SB969 建物跡、SK966、967 土壙

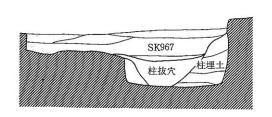
SB969 建物は、東側柱列だけを検出したが、掘立柱建物南北 5 間以上の南北棟と推定される。建物の方向は、西にやや偏している。柱間寸法は抜穴より約 2.4m 前後であろう。柱穴はおおむね 1 辺 110 cmぐらいであるが、1 辺 170 cmのものもあり、長方形を呈する。

壁は垂直に掘られて底にいたっている。埋土は厚さ $20\sim30$ cmの互層で割合ていねいに埋めている。最も保存のよい南妻の東柱穴は、深さ 1.0m である。柱穴埋土と抜穴埋土とは成分、色調ともに類似している(第 $11\sim13$ 図)。

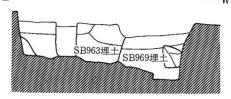
SB964 建物跡は、A 区北西隅の北端でわずかに検出されたが、建物の規模、建物方向、柱間寸法などについてはわからない。どの柱穴にも抜穴がある(第14図)。

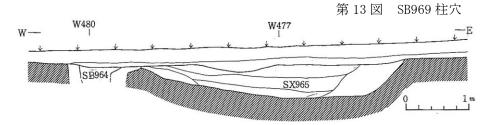
SK966 土壙は、南北 3.5m 以上、東西 2m 以上で、最も深い所で約 60 cmである。東側の壁は緩やかな傾斜をもっている。埋土は 4 層に分かれる人為的なものである(第 15 図)。

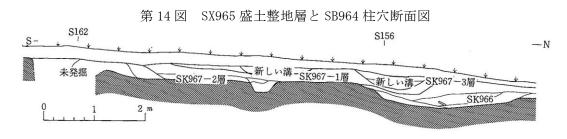
SK967 土壙は、南北 5.8m、東西 2.3m 以上で、最も深い所では約 35 cmである。東壁の傾斜は緩やかである。堆積状況からみて自然に埋まったものらしく、3 層に分けられる。埋土には須恵系土器が少量含まれる(第 15 図)。



第11図 SB969 柱穴と SK967 土壙





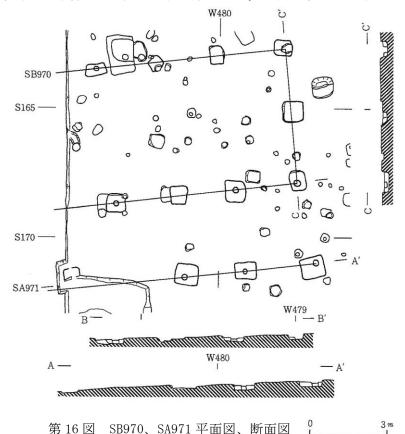


(4) SB970 建物跡、SA971 柱列(第 16 図)

SB970 建物跡は南北 2 間、東西 4 間以上の掘立柱東西棟である。方向は、北に 6 度 29

分偏している。柱間寸法は 南側柱列では、東から 2.39m、4.68m(2 間分)で、 東妻では南から 2.71m、 2.54mである。南側柱列の 柱間寸法はほぼそろってい るが、東妻はふぞろいであ る。最も保存の良いところ ですら、柱穴の深さが 25 cmであった。柱穴の大きさ は、1 辺 70~80 cmの正方 形のものが多く、柱は約 20cm の丸柱で、他の建物 に比べて細い。

SA971 は、SB970 建物跡 の南約 3.2m にあり、東西 方向の掘立柱列である。方 向は、SB970 建物跡の方向



と一致する。柱間寸法は、東より 2.76m、2.36m と統一でない。柱穴は、

SB970 のそれとほぼ同規模で、柱も径 20~cmほどである。SB970 と同様に削平が著しく柱穴の掘り方や埋土の状況は不明である。この SA971 柱列は、SB970 建物に伴うものと考えられる。

(5) SB974 建物跡、SD975 溝跡(第 17~19 図)

A 区南東隅で検出され、SB974 建物跡が SD975 溝を切っている。

SB974 は、東西 2 間以上、南北 4 間以上の南北棟の建物である。方向は、わずかに 9 分東へ偏しており、基準線にほぼ一致している。柱間寸法は、南妻で、西から 2.08m、不明であり、西側柱列では、北から 2.37m、2.31m、2.30m と、やや統一性がみられる。柱穴はおおむね 1 辺 1m ほどの方形であるが、1 辺 60 cmぐらいの小さなものもある。また、柱の位置は柱穴に対して規則性がない。壁はほぼ垂直に掘られ、最も残りの良い柱穴では深さ約 60 cmを計る。埋土は $4\sim10$ cm厚さの暗褐色土と地山の土を互層に埋めている。な

お、西側柱列の北端の柱穴は SK978 土壙の埋まり土におおわれていた。

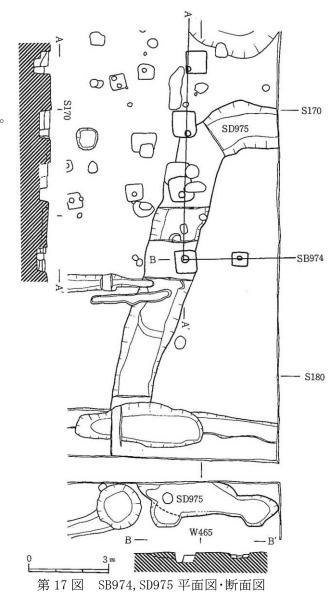
SD975 は、巾約 2.0 m の溝で、西辺約 15 m、南辺、北辺ともに 6 m 以上にわたってコの字形に巡っている。東辺は発掘区の外になる。埋まり土からは須恵器、土師器のほかに第 II 期の瓦が出土している。

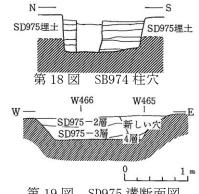
(6) **SB972・973・1040 建物跡**(第 20~22 図)

SB972 は、東西 2 間、南北 4 間以上の掘立柱南北棟である。方向は、西側柱列の南側 3 つの柱穴の柱痕から、西に 5 度 15 分偏している。柱間寸法は、西側柱列で南から 1.75m、約 2.0m、……である。柱穴は、おおむね 1 辺約 70 cm前後の正方形であるが、その掘り方や埋土の状況はわからない。柱は柱痕跡から約 20 cmの丸柱である。

SB973 と **SB1040** は、いずれも削 平が著しいが、SB1040 建物跡の柱 穴には柱痕が残っている。方向は、 2 度 28 分西に偏している。また、

柱間寸法は、南妻で東から 2.46m、2.23m、西側柱列で南から 2.21m、2.19m……、東側柱列で 4.39m(2間分)となっている。柱穴は、SB973 の方が大きく、1m・0.6m ほどであるが、SB1040 の柱穴は 1m を越えない。両者とも柱穴は深さ $20\sim40$ cmほどしか残っていない。柱痕跡は底にいたっていない。埋土は、 $4\sim10$ cm厚さの暗褐色土と地山の土で互層に埋めている(第 $21\cdot22$ 図)。





第 19 図 SD975 溝断面図

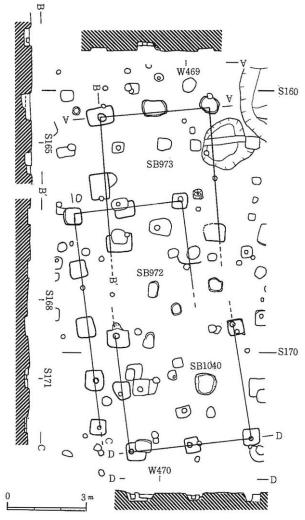
(7) SA994 柱列(第 23・24 図)。

これは B 区南西隅にある SD933 方形周溝墓の東辺に近接している。柱間寸法についてはわからないが柱列の方向は柱穴や抜穴からみてほぼ発掘基準線に一致する。柱穴はほぼ垂直に掘られ、 $1.3m\cdot 1.1m$ と同じ大きさである。埋土は、 $10\sim 20$ cm厚さの地山小粒子混りの茶褐色土と地山の土とを互層に埋めている。両者とも $70\sim 90$ cmの深さで残っている。

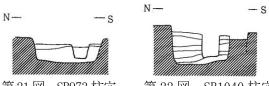
(8) SK978・979・980・981・983・ 984・985・987・988 土壙、SE982 井 戸跡(第 25 図)

これらは、A 区の北東隅で検出されたが、ほぼ全体的に暗褐色の堆積土(第2層)によっておおわれていた。但し、SE982及び SK983は、この第2層を切っているよりにも見うけられたが、両者の新旧関係を明確にとらえることは出来なかった。

SK978土壙は、南北5.5m、東西4.0m で、底は凹凸があり、壁は傾斜をもっ ている。西壁にはこの土壙で切られた SB974 建物跡の柱穴が痕跡的に残っ ていた(第27図)。SK979土壙は、南 北6m、東西2m以上の不整形で、発

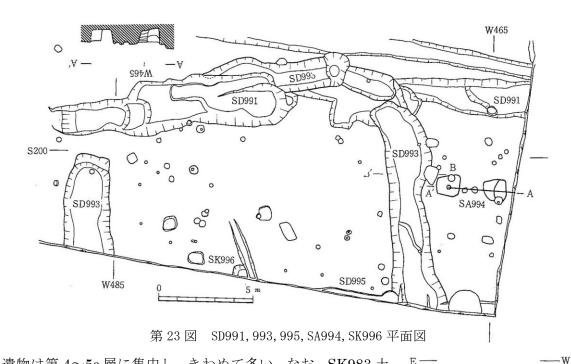


第20図 SB972, 973, 1040 平面図・断面図



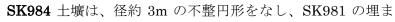
第 21 図 SB973 柱穴 第 22 図 SB1040 柱

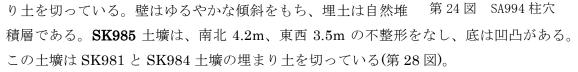
掘区の東外側にのびる。底は凹凸がある(第 27 図)。**SK980** 土壙は、東西 3.9m 以上、南北 2.5m 以上の不整形である。**SK981** 土壙は・南北 9m、東西 7m 以上の不整形を呈し、最も 深い所で約 90cm である。堀り方は雑で、地山の固い部分に沿つて掘つて別、凹凸が著しいが、西壁はかなり急傾斜である。埋まり土は第 3 層灰白色土、第 4 層黒褐色土、第 5a、b 層暗褐色土、5c 層黒黄褐色砂質土、第 6 層地山ブロックを多量に含む暗褐色土である。



遺物は第 $4\sim5$ c 層に集中し、きわめて多い。なお、SK983 土 壙と SE982 井戸跡が SK981 の埋まり土を切っている(第 29 図)。

SK983 土壙は、南北 3.2m、東西 4.3m の隅丸方形に近い 形である。埋土は自然堆積層で、須恵系土器を含んでいる。





柱抜穴

柱穴埋土

SK987 土壙は、南北 11m 以上、東西 7m で、最も深い所では 60~cmに及ぶ。埋まり土は $1\sim3~$ 層に分けられ、第 1~ 層は灰褐色土層、第 2~ 層は黒褐色粘質土層、第 3~ 層は暗褐色砂質土層である。この内、第 $1\cdot2~$ 層には多量の土器や瓦を含むが、第 3~ 層は少量の土器を含むにすぎない。この土壙出土の土器は A~ 区の土壙群出土のものと接合するものもある。なお、この土壙は SK984~ 土壙により切られている。SK988~ 土壙は、南北、東西ともに 3.5m 以上の楕円形である。壁はゆるやかな傾斜をもち、深さは約 50~ cm である。埋土は人為的で一手に埋めている。

SE982 井戸跡は、長径約3mの円形で、上部は斜めに、下部は垂直に掘り込まれた素掘りの井戸である。深さはSK981の底面から約60cmで、底は平らである。埋土の第1~3層は自然堆積層であるが、第4層は一手に埋められた黒褐色土層である。この層で須恵系土器が出土している。なお、この井戸はSK983土壙とSK981土壙の埋まり土を切っている(第29図)。

以上、土壙群及び井戸跡に ついて述べた。これらの新旧 関係を模式的に示すと下記の とおりである。

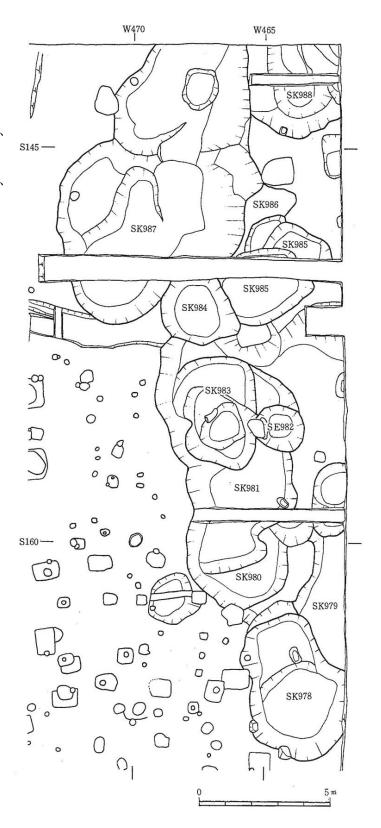
SK981 \sim SK983 \rightarrow SE982 SK985 \rightarrow SK984

なお SK978・979・980・ 987 などは SK981 と明確な 切り合い関係をとらえること ができなかった。

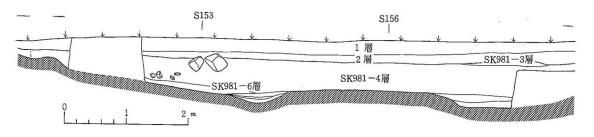
B その他の遺構

(1) **SK989・990 土壙**(第 30・31 図)

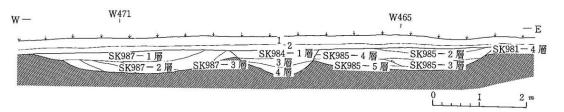
これらはB区の東端で、わずかにその一部が検出されたにすぎず、構造や規模については詳細を知りえない。



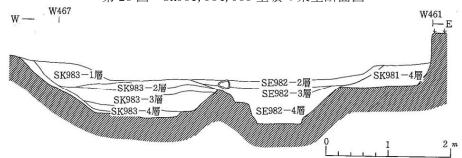
第 25 図 SK978~981、983~988、SE982 平面図



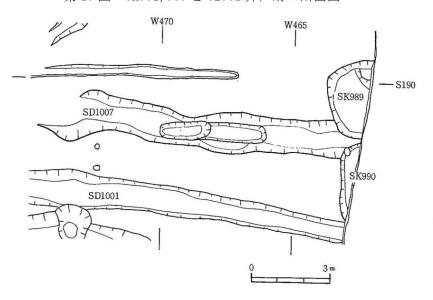
第 26 図 SK981 東壁断面図



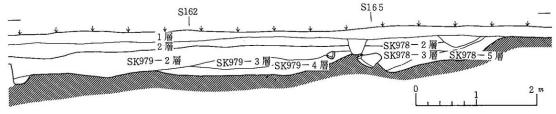
第 28 図 SK981, 984, 985 土壙の東壁断面図



第29図 SK981,983とSE982井戸跡の断面図



第30図 SK989, 990, SD1001, 1007 平面図



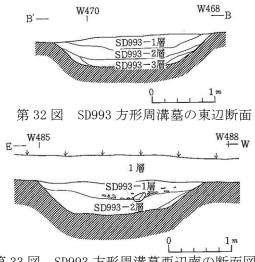
第 27 図 SK978,979 東壁断面図

また両者の間を SD1007 溝が切って通っているために切り合い関係はわからない。どちら も壁は斜めで,細い凹凸があり,最も深い所で約40cmほど残っている。埋土は自然堆積層で、 SK989 では、第 1 層暗褐色土、第 2 層黒色粘質土、第 3 層茶褐色砂質土、第 4 層地山ブ ロックを含む黄褐色土である。一方 SK990 では、第1層暗褐色土、第2層黒色粘質土、 第3層暗茶褐色砂質土に分けられる。どちらも第1層には瓦や須恵器を含むが、第2層に は弥生、縄文土器が多い。第3層からは縄文中期の大木8b式土器だけが出土している。

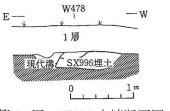


(2) **SD993 方形周溝墓**(第 23 · 32 · 33 図)

これは B 区中央部の南端で検出され、発掘区内 ではコの字形を呈し、南半は農道の下に入る。規 模は北辺が 19.5m である。検出された東辺、西辺 はそれぞれ 13m、5m である。ところで第 28 次 発掘区の北端は、こういった溝を検出して E いな いので、南北は 17m を越すものではないとみられ る。溝の幅は 2~2.5m、最も深い所で約 80 cmで ある。 溝の断面は U 字形であり、 北西隅と北東隅 が浅い。埋土は、自然堆積層で、第1層は黒褐色 土である。第2層は灰褐色土、第3層は地山崩れ の黄褐色粘質土である。第1層では須恵器や瓦を 出土しているものの、第2層より下層からは、塩 釜式の土師器だけ出土している。なお、B 区中央



第 33 図 SD993 方形周溝墓西辺南の断面図



第 34 図 SX996 土壙断面図

部の南端に小さな土壙 **SX996** が検出されているが、その埋土はこの方形周溝墓の埋土と類似している(第34図)。

この方形周溝墓は、塩釜式の時期で名取市今熊野遺跡(註 2)、仙台市安久東遺跡(註 3)、 栗原郡高清水町東館遺跡(註 4)の方形周溝墓の年代と同時期である。また、溝の隅が浅くなっているのは、今熊野 1 号墓などとも共通している。なお、SX996 土壙は、SD993 の土壙墓かと推察したが確証はなかった。

(3) SD991・997・998・1007・1001・1004・1005・1006 溝跡、SK1002・1003・1009・1010・1011 土壙など(第3図)

これらは B、C 区を東西に走る溝と土壙である。これらの中で、SD991 と 1007 溝跡が 古代にさかのぼりえても、他のものについては時期を決めることはできない。

3 出土遺物

第30次発掘調査地域から出土した遺物には、須恵器、土師器、須恵系土器、施釉陶器、中世陶器、硯、瓦、石帯、砥石、鉄製品、鉄滓、小さな薄い金の板、うるしの付いた紙、桜樺の編物、布などがある。この他に、古墳時代の土師器、石製模造品、弥生土器、縄文土器、石器などが発見された。以下、遺構ごとに記述していく。

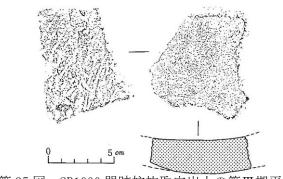
(1) 掘立柱延物などの出土遺物

A SB1000 西門跡

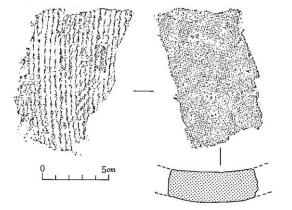
柱穴埋土から、須恵器甕の小破片が1点出 土している。抜穴には第Ⅱ期の瓦が多いが、 第Ⅲ期の平瓦(第35図)も2点発見されている。

B SX965 整地層、SB962・963 建物跡 SX965 整地層からは、須恵器、土師器、瓦が出土している。須恵器には杯、甕、蓋がある。杯では、底部全面を手持ちへラ削り調整のものと、ヘラ切りで調整のあるものと、ヘラ切りのものが見られる。土師器には杯、甕、蓋がある。瓦は第Ⅱ期のものが多いが第Ⅲ期の平瓦(第36図)も少量ある。

SB962 建物跡の柱穴埋土からは、須恵器、 土師器、瓦が出土している。須恵器には杯、 高台杯、甕、蓋がある。杯では、第 37 図の

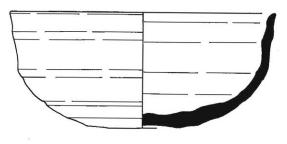


第35図 SB1000 門跡柱抜取穴出土の第Ⅲ期平瓦



第 36 図 SX965 出土の第Ⅲ期平瓦

ように、口縁部が直立し、体部下半に稜をもつ丸底の椀形に近いものがある。ヘラ切りののち一部を回転ヘラ削り調整している。さらに底部と体部の境目にはナデによる凹みがある。口径14.2 cm、器高6.1 cmである。他にヘラ切りのものもある。土師器には杯、甕があり、杯では内外面黒色処理した国分



第 37 図 SB962 柱穴埋土 ₀ 出土の須恵器杯 しュ

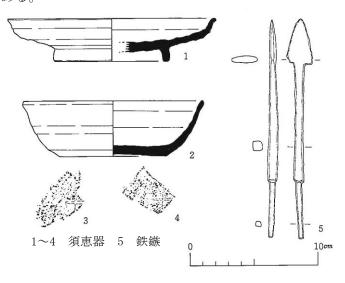
寺下層式と思われるものがある。瓦は第 Π 期のものが多く出土している。**抜穴**からは須恵器、土師器、瓦が出土している。須恵器には杯、高台杯、甕、蓋がある。杯では、底部へラ切りがある。土師器には、杯、甕がある。杯は、糸切りが1点のみ出土している。瓦は第 Π 期のものが多い。

SB963 建物跡の柱穴埋土からは、須恵器、土師器、瓦が出土している。須恵器には、杯、高台杯、蓋がある。杯では、底部手持ちヘラ削りのもの、ヘラ切りのもの、糸切りのもののが見られる。瓦は第 Π 期のものが多く、第 Π 期の瓦もわずかにある。抜穴からは、須恵器杯、稜椀、甕、蓋、土師器甕の破片と瓦などが出土している。瓦は第 Π 期のものが多いが、 Π 点だけ第 Π 期と思われる平瓦がある。

C SB969 建物跡、SK966・967 土壙

SB969 建物跡の柱穴埋土からは 須恵器、土師器、瓦が出土している。 須恵器には、杯、甕、蓋がある。杯 ではヘラ切りがわずかに見られる。 土師器には杯、甕があるが、いずれ も破片である。瓦には、第Ⅲ期の焼 瓦がある。柱抜穴には須恵器杯、甕、 土師器甕などがある。

SK966 土壙の埋土には、須恵器杯、 高台杯、甕、土師器杯、甕、瓦など がある。須恵器杯では、手持ちヘラ



第 38 図 SK967 土壙出土の遺物

削り調整のものと、糸切りしたのち回転ヘラ削り調整したものが見られる。瓦は、第Ⅱ期のものが多く、伊、矢Aの刻印瓦も出土している。

SK967 土壙の埋土からは、須恵器、土師器、瓦、フイゴの羽口、鉄製品が出土している。

第 38 図 5 は、全長 17 cmの鉄鏃で、埋土上層から出土している。1~4 は埋土下層出土のものである。1 は、須恵器高台付盤で、底部周辺は回転へラ削り調整されている。2 は須恵器杯で、糸切りのの,ち、底部の周辺から体部下端にかけて回転へラ削り調整してある。3、4 は「木」のヘラ書きがある須恵器杯の底部である。いずれも手持ちヘラ削り調整が見られる。表土中の資料だが、第 44 図 6 の「林」とヘラ書きされたものに筆跡が似ており、本来は「林」かもしれない。須恵器杯には、他にヘラ切り、糸切りがある。

D SB970 建物跡、SA971 柱列跡

柱穴埋土からは、須恵器鉢の底部 1 点のみ出土している。SA971 柱列跡の柱穴埋土からは須恵器甕、土師器甕、第Ⅱ期の瓦が出土している。

E SB974 建物跡、SD975 溝跡

SB974の柱穴埋土には、須恵器杯、瓶、甕、蓋、土師器杯、甕、瓦などがある。須恵器杯では、静止糸切りで調整のないものが1点のみ出土している。土師器杯では、糸切りのものがある。瓦は、第 Π 期のものが出土している。

SD975 溝跡の埋まり土には、須恵器杯、甕、土師器杯、甕、第 11 期の瓦、土錘などがある。

F SA994 柱列跡

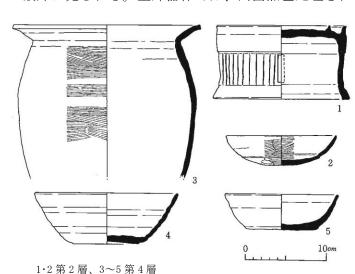
この柱穴埋土からは、国分寺下層式の土師器杯だけが出土している。 なお、SB972・973・1040 建物跡の柱穴からは、ほとんど遺物が出土していない。

(2) SK978~981、983~988 土壙、SE982 井戸跡

A SK978·979·981 土壙

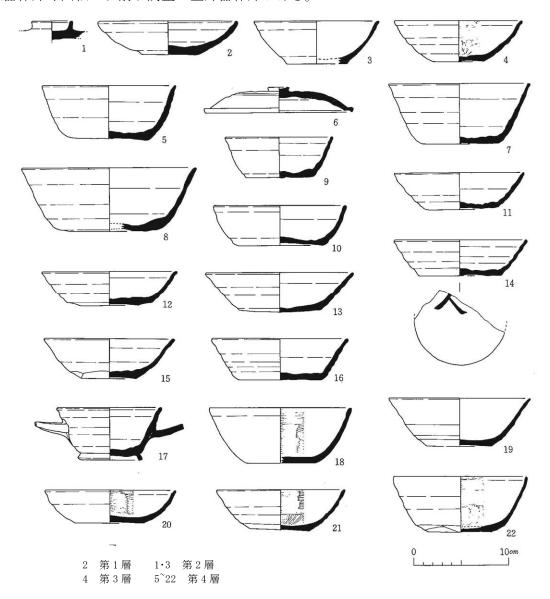
SK978 土壙の埋土第2層からは須恵器、土師器、瓦、硯などが出土している。須恵器には杯、甕がある。杯では、ヘラ切りの破片が見られる。土師器杯では、内面黒色処理され

た丸底のものがある(第 39 図 2)。 底部はヘラ削り調整のあとにヘラミガキされ、底部と体部の境目には回転ヘラ削りによる段がついている。他に、回転ヘラ削り調整のもの、糸切りの土師器杯がある。 硯には第 39 図 1 の円面硯がある。 上面の復原径 16 cm、脚部下端の径 16.8 cm、高さ 9.0 cm、縁の巾3.2 cmで、全体にややゆがんでい



1 円面硯、2 土師器杯、3 須恵器、4·5 須恵器杯 第 39 図 SK978 土壙出土遺物

る。脚部は全体的には直立するが、下端部では稜をもって外反する。そして、約1cm間隔に縦方向の沈線がへラ書きされており、長さ3.5cmほどの2個の透しが穿たれている。上面には縁より2cm程内側に径12cm、高さ0.6cmの円堤が作られ、その内側が平担な陸になっている。陸は磨滅し、墨が付着している。埋土3層には、須恵器杯、甕、瓶、蓋、土師器杯、甕、瓦などがある。須恵器杯では、ヘラ切りの破片、土師器杯では、回転ヘラ削り調整の破片が見られる。埋土4層からは、須恵器杯、甕、瓶、蓋、土師器杯、甕、瓦などが出土している。第39図3は土師器の長胴甕で、胴部にはカキ目があり、口縁部にはロクロナデがみられる。4は、ヘラ切りの大形須恵器杯である。他に、回転削り調整の須恵器杯片や回転ヘラ削り調整の土師器杯片がある。



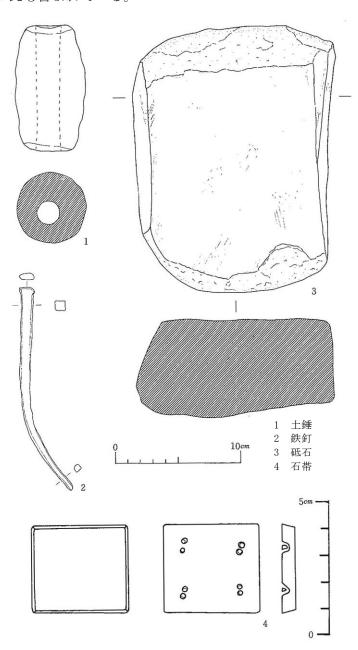
第 40 図 SK981 土壙第 1 ~ 4 層出土の土器

SK979 土壙の埋土には、須恵器杯、繁、瓶、土帥器杯、甕、瓦などかある。土帥器杯では、底部千持ちヘラ削り調幣の破片が見られる。

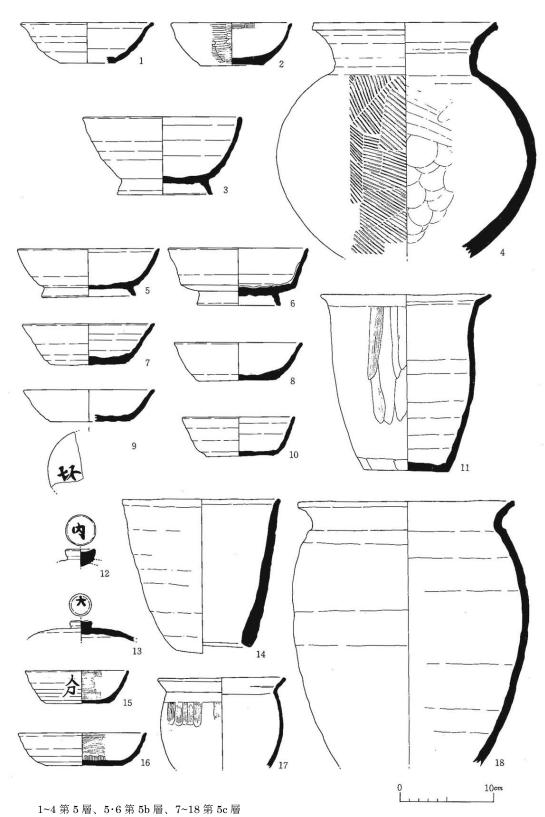
SK981 土壙の埋土には多量の遺物があり、層位ごとに記述する。しかし、上層については、新しい遺構との切り合いもあり、遺物も明確には分離しえなかった。

埋土上層には、須恵系土器杯(第 $40 \boxtimes 2$ 、3)、糸切りの土師器杯(4)、それに土師器蓋(1)などがある。また瓦では、第IV期の瓦も含まれている。

埋土4層からは、須恵器、土師 器、緑釉陶器、須恵系土器、手づ くね土器、瓦、硯、土錘、鉄製品、 金板、石帯、紙、石器などが出土 している。須恵器には杯、高台杯、 甕、瓶、蓋がある。杯では、ヘラ 切りが圧倒的に多い(第40図5、7 ~10、13、14)。この内、13 には 底部に若干のナテがあり、また14 には「人」の墨書がある。また底 部に「×」のヘラ書きのあるもの もある。他に、12はヘラ切りのの ち回転ヘラ削り、15は手持ちヘラ 削り、16はヘラ切りののち軽い手 持ちヘラ削りのあるものである。 図示しなかったが、糸切りも多く、 糸切りののち手持ちヘラ削り調整 のものはわずかである。17 は須恵 器の双耳杯で、ヘラ切りののち高 台を付けている。6 は須恵器の蓋 である。土師器には、杯、高台杯、 高杯、甕、蓋がある。杯のほとん どかロクロで作られ、内面黒色処 理されている。12、19は、体部下 半から底部にかけて回転削り調整 をしている。20には、手持ちヘラ



第 41 図 SK981・4、5 b 層出土の遺物



第 42 図 SK981 土壙第 5, 5b、5c 層出土の土器

削り調整かあり、21 には回転へラ削り調整があるが、切り離しは不明である。22 は、糸切りののちに手持ちへラ削りしたものである。図示しなかったが、土帥器の高杯の脚部もあり、外面全体にミガキがある。緑釉陶器、須恵系土器、手づくね土器は極めて少量出土しているにすぎない。

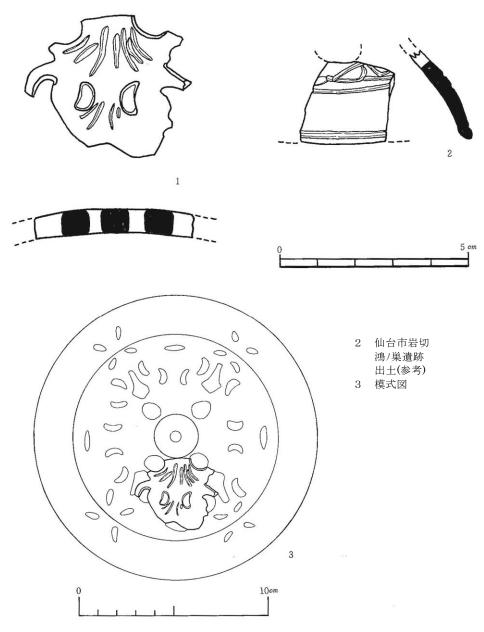
瓦は、第Ⅲ期のものが圧倒的に多いが、第Ⅲ、IV期のそれもわずかに含む。また、640・830 軒平瓦や伊、田A、丸A などの刻印瓦も見られる。硯には、円面硯の破片 2 点と須恵器高台杯の底部を使用した転用硯とがある。第 41 図 2 は鉄釘で、断面はほぼ正方形である。第 41 図 5 は蛇紋岩製の石帯の巡方で、横 3.7 cm、縦 3.3 cm、厚さ 0.5 cmのものである。表面と側面はきれいに研磨されているが、裏面四隅に、縫いつける穴か穿たれている。これらの他に、長さ 3.0 cm、巾 1.0 cmの非常に薄い金の板状のものも検出されている。紙はいずれも漆でかためられて遺存したものである。それには須恵器杯の底部に付着したもの(図版 19 の 1)と紙片そのもの(図版 19 の 2)がある。1 は、初めに須恵器杯の底部に紙を敷いてから漆を入れ、それに紙をかぶせた状態を表わしている。須恵器杯の底部に付着した面に墨痕があるが、不鮮明である。2 はいずれも片面に漆が付着しているか、文字は見当らない。

埋土 5a 層から、須恵器、土師器、灰釉陶器、土玉、瓦、古墳時代の土師器などが出土している。須恵器には杯、高台杯、瓶、甕がある。杯では、ヘラ切りが多く、ついで糸切りが多い(第 42 図 1)。他に、糸切りののち回転ヘラ削りしたもの、糸切りののち手持ちへラ削り調整のものがわずかにある。高台杯では、ヘラ切りのち高台を付けたもの(3)と、糸切りのち高台を付けたものがある、須恵器には他に胴部の張った甕(4)もある。灰紬陶器では、花蝶文透し彫りの香炉の蓋の破片がある(第 43 図 1)。大きさや透し彫りの構成は愛知県西加茂郡三好町黒笹 90 号窯出土のものに酷似している(3)(註 5)。なお、2 は、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡出土の灰釉陶器香炉の蓋で、参考資料として図示しておきたい。土師器杯では、底部の切り離しは不明だが、内外ともにヘラミガキがあり、内面黒色処理したものである(第 42 図 2)。

埋土 5b 層からは、須恵器、土師器、硯、瓦、砥石、石庖丁などが出土している。**須恵器**には、杯、高台杯、甕、瓶、蓋がある。杯では、ヘラ切りのもの、回転ヘラ削り調整したもの、糸切りのものがある。5 の高台杯は底部を糸切りしたのち高台を付けたもので、硯に転用されている。**瓦**には、220 軒丸瓦、640 軒平瓦、 \mathbf{F} A 刻印瓦など第 \mathbf{II} 期の瓦が多いが、第 \mathbf{III} 期の瓦もわずかにみられる。第 41 図 3 は大形のあら砥で、側面にも擦痕がついている。他に、弥生時代の粘板岩製石庖丁の破片(第 56 図 4)もある。

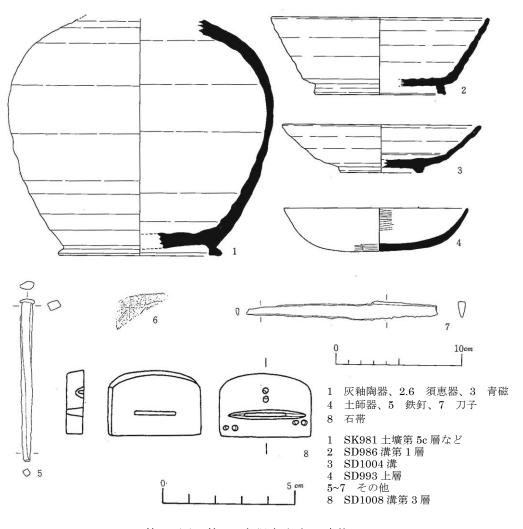
埋土5c層からは、須恵器、土師器、灰紬陶器、瓦、土錘、紙、布などが出土している。

須恵器には、杯、高台杯、甕、瓶、蓋がある。杯では、ヘラ切りが多く(第 42 図 7~9)、 糸切りのもの(10)や回転ヘラ削りのものもわずかにある。9 の底には「坏」という墨書が ある。6 はヘラ切りしたのちに高台を付けたもので、内面から外面の口縁にかけて漆の付 着した紙がついている。蓋では、12 は宝珠形のつまみが付き、そのつまみに「内」と墨書 され、13 は宝珠形に近いつまみの上に「大」と墨書されたものである。土師器杯では糸切 りののち回転ヘラ削りされたもの(15、16)があり、15 は「大刀」と墨書されている。他に、



第 43 図 SK981 土壙第 5 層出土灰釉香炉蓋

静止糸切りのち回転へラ削りのもの、糸切りのものがある。11、17、18 はロクロを使用しない土師器の甕である。11 は体部にヘラ削りが顕著で、口縁部にはヨコナデの調整があり、内面全体にナデによる調整が見られる。17 は小形で、外面の口縁部付近には粘土紐痕が観察される。口縁部のヨコナデは体部上端にまで及んでおり、また体部上半部にはカキ目痕がある。18 は大形で、口縁部外面にはヘラミガキ状のナデがある。内面は口縁部にヨコナデがあり、体部には軽いヨコナデがある。14 は甑で、外面は口縁部にヨコナデがあり、体部にタテ方向のナデとヨコナデがみられる。内面は、口縁部から体部にかけてタテ方向のナデがある。なお、外面の体部には黒斑がみられる。第 44 図 1 は、灰釉瓶で、この破片は SK981 土壙各層および SK987 土壙埋土などでも出土している。これは頸部を欠いており、体部のやや張ったものである。楢崎彰一氏の御教示によれば、黒笹 78 号窯出土のものに類似し、年代は 9 世紀の終末頃とのことである。瓦は、物、伊刻印瓦など第Ⅱ期の



第44図 第30次調査出土の遺物

瓦が多いが、第Ⅲ期の瓦もわずかにある。紙では、先にあげた須恵器高台杯に付着したものと紙片そのものがある(図版 20 の 1、2)。後者はいずれも片面に漆の付着がある。2 は現存の大きさが縦 4.2 cm、横 6.6 cmである。内容については次のとおりである。

^{行,7} 天 コ子 月徳

辛酉木開

これは具注暦(註6)の断簡と考えられる。

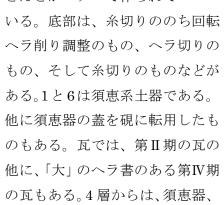
1 は墨痕が見えるが、漆が付着しているので不鮮明である。他に、須恵器杯と土師器杯の内面に付着した漆そのものもある(3,4)。

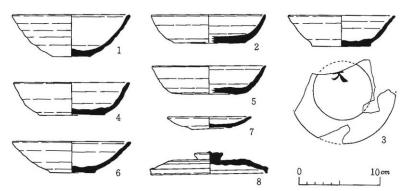
埋土 6 層には遺物が少なく、須恵器杯、甕、蓋、土師器甕などの破片がわずかにみられる。

B SE982 井戸跡、SK983 土壙

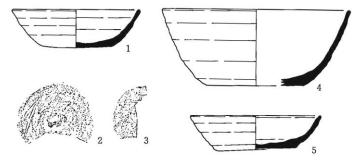
SE982 の埋土 1~3 層からは、須恵器、土師器、須恵系土器、瓦、硯などが出土してい

る。須恵器には杯、高台杯、 甕、瓶、蓋がある。杯には、 手持ちへラ削りのもの(第 45 図 5)、ヘラ切りのもの(2 ~4)、糸切りのものが見ら れる。3 には「大」の墨書 がある。土師器には杯、高 台杯、甕がある。杯は、ほ とんどがロクロで作られて





1 第 1 層、2~6 第 2 層、7 第 3 層、9 第 5 層、1.8 須恵系土器、2~7.9 須恵器 第 45 図 SE982 井戸跡出土土器



1.2 SK983 土壙、4.5 SK984 土壙 3 SK983 · 984 接合 1~5 須恵器坏

0 10om

第 46 図 SK983・984 土壙出土土器

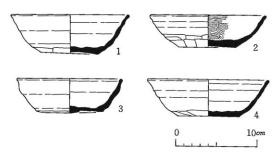
土師器、須恵系土器、瓦、硯などが出土している。須恵器には、杯、甕、瓶、蓋、ミガキのある稜椀の破片がある。杯では、底部がヘラ切りのものが多い。蓋では、8 のように宝珠形のつまみがつき、内面に墨のついたものもある。土師器には、杯、高台杯、甕、蓋がある。杯では、底部が糸切りの破片がわずかに見える。7 は須恵系土器の小形皿で、他に少量の須恵系土器片がある。

SK983 土壙の埋土 1 層からは、須恵器、土師器、瓦、古墳時代の土師器などが出土している。須恵器には、杯、甕、瓶がある。杯では、ヘラ切りのもの、糸切りののち手持ちへラ削りのものがある。土師器には、杯、甕、蓋がある。杯では、国分寺下層式、ロクロを使用し底部が回転へラ削り調整されたものが見られる。2 層以下は遺物が少なく、須恵器杯、土師器杯、瓦などが出土している。須恵器杯ではほとんどがヘラ切り(第 46 図 $1 \cdot 2$)で、2 には「×」のヘラ書きがある。土師器杯では、底部が回転ヘラ削り調整されたものが 1 点見られる。瓦では、田 B 刻印平瓦が出土している。

C SK984·985 土壙

SK984 土壙の 1~4 層は自然堆積層で、特に遺物に差はない。出土遺物は須恵器、土師器、須恵系土器、瓦、フイゴの羽口、鉄釘などである。須恵器には杯、高台杯、甕、瓶、蓋などがある。杯は、ヘラ切り(第 46 図 5)が多く、他に糸切りののち手持ちヘラ削りのもの、底部全面を回転ヘラ削りしたものが見られる。土師器には杯、甕がある。杯では内黒のものが多いが、内外両面ともに黒色処理されたものも数点ある。4 は体部にはロクロナデがあり、底部の切り離しは不明だが、手持ちヘラ削り調整した大形の杯である。須恵系土器はわずか数片出土しているにすぎない。

SK985 土壙の 1 層には須恵系土器と 431 軒丸瓦がある。しかし、2 層以下には須恵系土器を含まず、底面まで同じ遺物のあり方を示している。2 層以下の出土遺物は須恵器、土師器、瓦などである。須恵器には杯、甕、瓶、蓋がある。杯では、ヘラ切り(第 47 図 3)



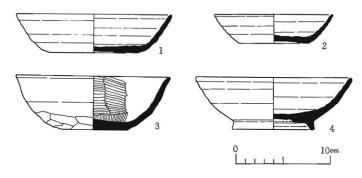
が多く、糸切りののち手持ちヘラ削りしたも 第 47 図 SK985・986・988 土壙出土の土器 の、切り離し不明で、回転ヘラ削り調整のものがわずかに出土している。土師器では杯、高台杯、甕、甑がある。杯はほとんどがロクロを用い、糸切りののち手持ちヘラ削り調整 のもの(2)などが見られる。甑は底部の小破片である。

D SK986~988 土壙

SK986 土壙には遺物が少なく、須恵器杯、甕、土師器杯、甕、瓦などが出土している。

第47図4は、糸切りで体部下端 に手持ちヘラ削り調整のある須恵 器杯である。

SK987 土壙の埋土からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には杯、高台杯、稜椀、甕、瓶がある。杯ではヘラ切り(第48図1)が最も多く、糸切り(2)も

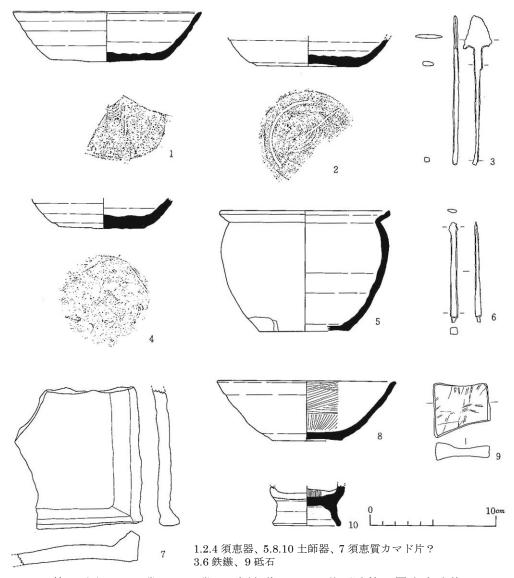


第 48 図 SK987 土壙出土土器

見られる。高台杯は、回転ヘラ削り調整のため切り離しが不明のもの(4)がほとんどである。他に高杯の脚部が 1 点出土している。土師器には杯、高台杯、甕がある。杯について、3 は手持ちヘラ削り調整のため切り離しは不明である。その他、回転ヘラ削り調整のもの、糸切りのものが数片ずつ出土している。また国分寺下層式も1点みられる。瓦は第Ⅱ期のものが大部分で、第Ⅲ期の瓦もわずかにある。

SK988 土壙からは須恵器、土師器、瓦などが出土している。須恵器には杯、高台杯、甕、蓋などがある。杯で第 47 図 1 は、糸切りで、体部下端に手持ちへラ削りのあるものである。この他に、ヘラ切りが最も多く、全面回転ヘラ削り調整のため底部切り離し不明のもの、糸りのものがわずかにある。土師器には杯、甕がある。杯では、糸切りのものと全面を回転ヘラ削りしたものが出土している。

E SK978~981、SK983~985 土壙群及び SE982 井戸跡等の第 2 層出土遺物(第 49 図) 1、2、4 は底部にへラ書のある須恵器杯である。1 は糸切りののち手持ちへラ削りしたもので、「木」のへラ書きがある。2 は糸切りののち回転へラ削り調整したもので、「×」と記されている。4 はヘラ切りで「×」のヘラ書きがみられる。5、8、10 はロクロ土師器で、5 は小形の甕、8 は杯、10 は耳皿である。5 は、糸切りで、体部下端には手持ちへラ削りがみられる。体部から内面にかけては、ロクロナデ調整が残っている。8 は糸切りで、内面には、底部に放射状、体部にやや不定方向のミガキがあり、黒色処理されている。10 は口縁部を欠いている。内面は巾の細いヘラミガキののち黒色処理している。7 は須恵器質の用途不明の破片である。体部から下端部までロクロによって調整され、下端部は甕の口縁部のように外反気味に作られている。そして右端に隆帯をはり付けたのち、ヘラ削りしている。これは、第 22 次調査(高平地区)で、包含層から発見された土師器質のカマド焚き口部の破片に類似している(註 7)。しかし火をうけた痕跡はない。他に、風字硯の破片と緑釉陶器の小破片も1点ずつ出土している。



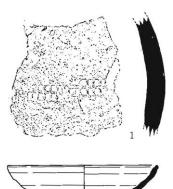
第 49 図 SK987~981, 983~985 土壙群、SE982 井戸跡第 2 層出土遺物

以上各土壙・井戸等の出土遺物について述べた。これを通観して、SE982、SK983・984を除くと、出土遺物の構成はきわめて類似しており、加えて、異なる土壙から各々出土した破片が接合した例も多い。これらのことから土壙群のうちのいくつかは、ほぼ同時期に掘りこまれ、そして、大差ない時期に埋まったものとも言えよう。

F SD1008 溝跡

この溝の第 1~4 層は自然堆積層で、各時期の遺物を出土している。第 1 層は、須恵器、 ミガキのある須恵器、土師器、須恵系土器、手づくね土器、中世陶器、近世陶器、土錘、 瓦、石製品などが出土しており、近世以降の堆積層である。須恵器には杯、高台杯、甕、

瓶があり、杯には各種のものがみられる。ミガキのある須恵 器では、蓋と高台杯の破片が1点ずつ見られる。土師器には 杯、高台杯、甕があり、杯では糸切りがある。須恵系土器で は、杯(第50図2)と高台杯が出土している。1は中世陶器の 甕の破片である。瓦には、210B、220A 軒丸瓦、640 軒平瓦、 丸A、伊、物A、矢C、占刻印瓦など第Ⅱ期の瓦が最も多い。 他に、423、427 軒丸瓦と第Ⅳ期の母刻印の上に「×」とへ ラガキされた瓦も出土している。第56図5は緑泥片岩製の 石製模造品で、表面、側縁に擦痕があるが、裏面は剥落して いる。第3層からは、須恵器、ミガキのある須恵器、土師器、 須恵系土器、手づくね土器、硯、瓦などが出土している。須 恵器には、杯、甕、瓶、蓋がある。杯について、回転ヘラ削 りのものが出土している。ミガキのある須恵器では蓋の破片 第 50 図 SD1008 溝跡出土の遺物



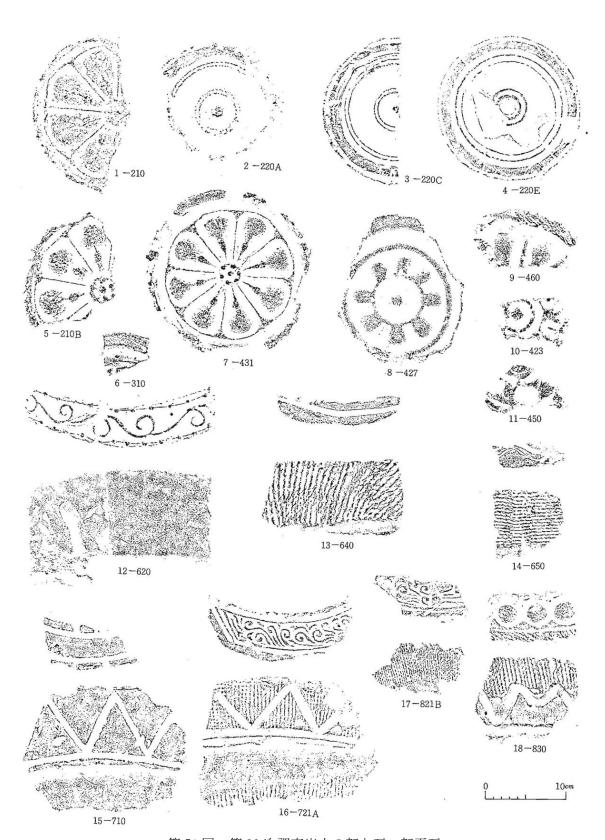


が 1 点出土している。須恵系土器では杯のほかに小形の皿(第50 図3)、大形鉢がある。 土師器には杯、甕がある。硯は、円面硯の脚部の破片が1点出土している。瓦では、第Ⅱ 期の瓦が多いが、427 軒丸瓦、721A、821B 軒平瓦と第IV期のヘラ書きした平瓦もある。 第 44 図 8 は横 3.5 cm、縦 2.4 cm、厚さ 0.6 cmの凝灰岩製石帯の丸靹である。表面には小さ な擦痕が不定方向にあり、巾 1.5 mm、長さ 1.6 cmの透しが裏面からあけられている。裏面 にも表面と同様の擦痕があり、3か所に帯に縫いつける穴がある。第4層~底面では瓦が 多いものの、須恵器杯、甕、土師器杯、甕のほかに須恵系土器が1点出土しているだけで ある。瓦は第Ⅱ期のものが多いが、821B軒平瓦もある。

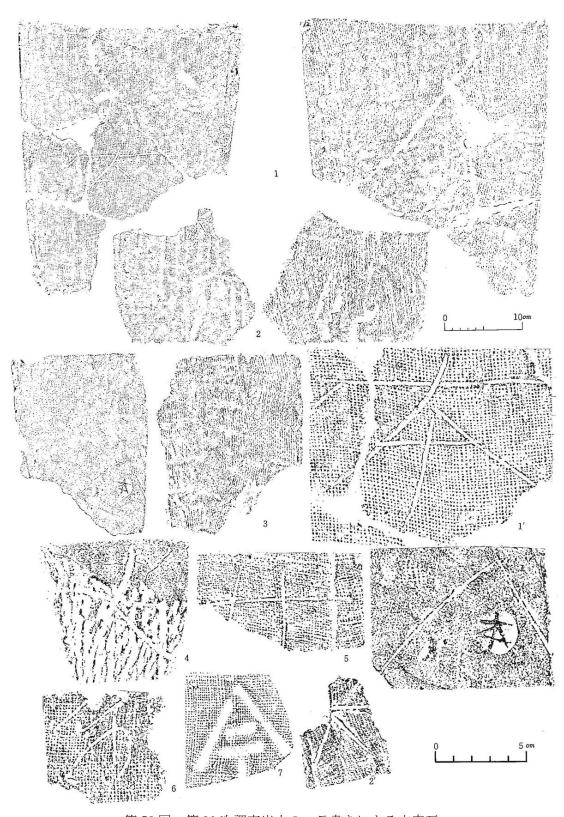
(4) 古代以前の遺構

A SK989 · 990 土壙(第 54 図、第 56 図 1 · 2)

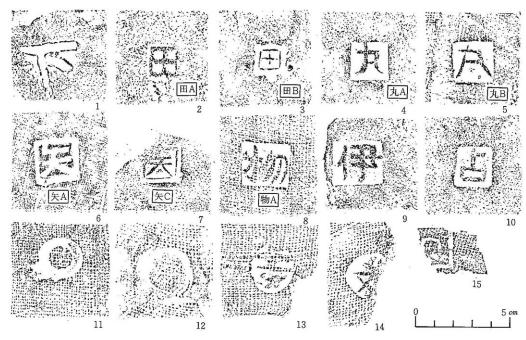
SK989・990 土壙の第 1 層は撹乱層、第 2・3 層は自然堆積層である。第 2 層からは縄 文土器と弥生土器、石器が出土している。第 54 図 1・2 はいずれも胎土に繊維を含む。1 は口縁部の破片で、Rの原体による撚糸圧痕文と、同一原体の末端を用いた刺突文がある。 口端部はやや内傾し、指による軽い押しつけが見られる。2 は体部の破片で、竹管状の工 具による刺突文がみられる。これらは縄文時代前期初頭の上川名Ⅱ式(註 8)に位置づけるこ とができる。3 は口縁部付近の破片だが、口端部を欠いている。側縁に調整のない 2 本の 隆帯が横位に貼付けられており、又、隆帯と隆帯の間に一部、竹管状の工具による刺突文 がある。これは縄文時代中期の大木 8a 式土器と思われる。4・5・7 はキャリパー形土器 の口縁部破片で、いずれも斜行縄文を地文として、匝側縁に調整のある細い隆帯をつけて



第51図 第30次調査出土の軒丸瓦・軒平瓦



第52図 第30次調査出土のヘラ書きによる文字瓦

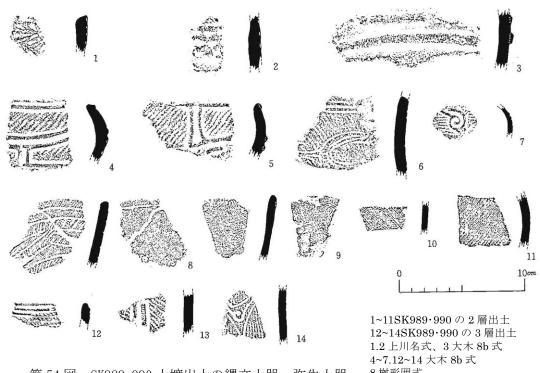


第53図 第30次調査出土文字瓦

いる。6 は、沈線によって文様がつけられている。これらは器形や文様の特徴から大木 8b式のものとみられる。8~11 は弥生土器である。8 は鉢形の土器の口縁部破片で細い斜行撒を地文とし、沈線と擦消しによって文様がつけられている。また、口縁部内面には 1本の沈線がめぐっている。桝形囲式に属するであろう。9 は表面が無紋で、裏面には 2本の細い沈線による波状文が施されている。10 は、細い 3 本の沈線が菱形に施文されている。これらの特徴は十三塚式と共通している。11 は、細い撚糸文のある破片で、型式名は不明である。石器では、第 56 図 1 のすり石破片の他に、不定型の石核、磨製石斧の破片が出土している。第 3 層からは、12~14 などが出土している。12 は小形鉢形土器の口縁部で、斜行縄文を地文とし、側縁が調整された細い隆帯が横方向に 2 本貼付されている。13 は、斜行縄文を地文とし、縦方向に 2 本の沈線によって側縁が調整された隆帯が縦方向に貼付されている。14 は、鉢形土器の体部で、斜行縄文を地文とし、沈線による渦巻文がある。これらの土器は器形、文様の特徴から大木 8b 式に位置づけられる他に、焼けた礫の小破片で、表面に磨痕がみられる。

B SD993 方形周溝墓(第 55 図)

SD993 の上層には、古代の遺物、須恵器、土師器、瓦などが少量加しかし、下層から底面にかけては古代の遺物が全くなく、塩釜式の土師器が多量に発見された。それは、ほとんどが甕と壷で、中でも甕が多い。しかし、これらには、いわゆる複合口縁の壷や、底部



第54図 SK989・990 土壙出土の縄文土器・弥生土器

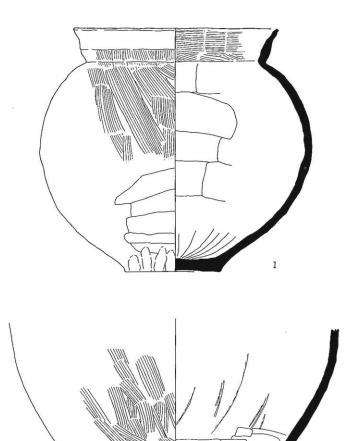
8 桝形囲式 9.10 十三塚式

穿孔のものはない。1 は口縁部がゆるやかに外反し、球状の体部と平底の底部をもつ。外 面は口縁部にはヨコナデがあり、頸部から体部上半部と底部に木口状工具によるカキトリ 痕が残っている。体部下半から底部までヨコ方向のヘラ削りがある。そして、体部下端は カキトリののち指によるおさえがある。底部にはヘラ削りの痕跡がかすかに見られる。調 整の順は、口縁部のナデ→カキトリ痕→ヘラ削りである。内面は、口縁部にヨコ方向のカ キトリ痕があり、体部から底部にかけてはヨコ方向のヘラ削りがある。そして、底部には ヘラ削りの際にヘラ状工具の角によってついた放射状の筋が見られる。調整の順は、体部 ヘラ削り→口縁部カキトリである。2 は体部上半部から口縁部を欠いている。体部に縦方 向のカキトり痕がついている。底部はリング状の貼り付けをしたのちに、指によっておさ えており、さらにヘラ削りしている。内面について、体部から底部にかけてヨコ方向のへ ラ削りが見られ、体部中央部と底部にヘラ削りの際に、ヘラ状工具の角でついた筋がある。

(5) その他の遺物(第 44 図 3~5)

3 は SD1004 溝跡出土の青磁の皿で、約 6 分の 1 の破片から復原すると、口径約 15.7 cm、底径約 6.5 cm、器高約 3.8 cmとなる。外面は、体部から口縁部にかけてゆるやかに外 反し、口縁部は丸くおさまる。体部下端にはヘラ削りが見られ、底部は短く削り出した高 台がある。体部下端に巾2mmほどの沈線が巡っている。釉は全面に施されているが、体部

の外面にはまだら状にかかって おり、また内面の沈線には紬が やや厚くかかっている。貫入は 外面で口縁部と底部に、内面で 口縁部に顕著に認められる。胎 土は灰白色を呈し、繊密である。 この青磁は、いわゆる越州窯生 産のものと似ているが、断定で きない。この他に図示しなかっ たか、輪花椀の破片が1層より 出土している。これは胎土、釉 のかかり具合、色調など3とは 異なる。4は、SD993上層出土 の土師器杯である。口縁部と体 部との境目は判然とせず、底部 は丸底風である。ロクロを使用 しておらず、外面は手持ちヘラ 削りののち不定方向にヘラミガ キが施されている。また内面に もヘラミガキがあるが、黒色処 理されていない。5 は、SB974 建物跡付近の新しい柱穴から発 見された鉄釘である。6は、手 持ちヘラ削り須恵器杯底部で、



第55図 SD993 方形周溝墓出土の土師器

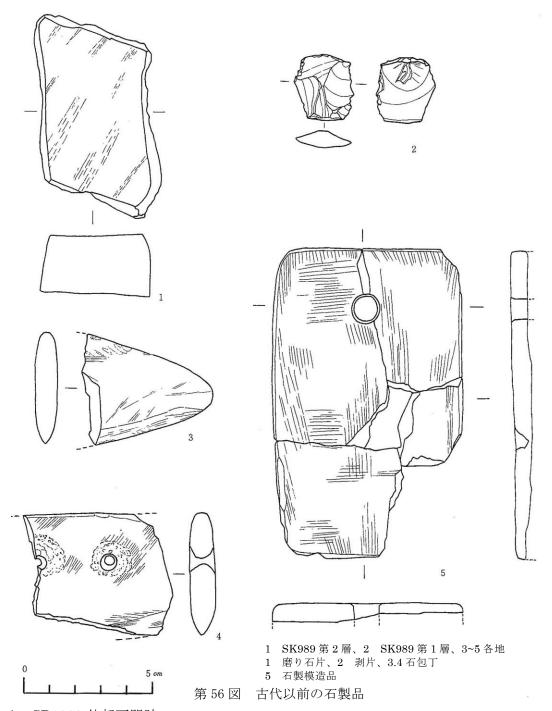
「林」というヘラ書き

がある。7は1層出土の刀子で、今回の調査では唯一の出土である。

4 考察

(1)掘立柱建物跡など

第30次調査では、掘立柱建物跡を12棟、掘立柱列を2列発見した。似下、これらの建物について若干の考察を加えたい。



A SB1000 外郭西門跡

この門跡は、西辺築地には直接とりつかず、東側 35m 程に位置している。一方この門跡の東側及び西側には、巾 40m ほどのほとんど古代遺構のない一帯が認められる。この範囲内には、縄文時代の土壙や古墳時代の方形周溝墓も良好に残っている事から、建物が全く

消失してしまう程の削平を受けたとは考えられない。ところで、外郭東門も東辺築地には 直接とりつかず、西側 45m 程に位置している。東門の西側には巾 20m 程の道路状遺構が あり、その南端には巾 1.5m 程の溝が検出されている。

さて、今回発見した門と東門とは、まったく同じ規模であって、種々の状況もきわめて 類似している。この門では東門とことなり、直接とりつく築地自体は検出できなかったが、 この門を外郭西門と見ることができるであろう(註9)。

B 主要な掘立柱建物跡

遺構、遺物の項で述べた事実を模式的にまとめると下表のようになる。

遺構の切り	合い・出土遺物	推定遺構期
SX965 (埋土第Ⅲ期瓦)	► SX962 (抜穴糸切り須恵器坏)	SB962・SB969 第Ⅲ期以降
SB969	SB963 (畑 L 答 田 坦 玉	SB963
(埋土第Ⅱ期焼瓦 抜穴第Ⅲ期瓦	(埋土第Ⅲ期瓦 糸切り須恵器坏)	第Ⅲ~Ⅳ期
糸切り土師器坏)	小 90 万 次心脏引 /	
SB974	► SK978	SB974
(埋土糸切り須恵器均	第Ⅲ~Ⅳ期	
SB970		SB970 · SA971
SA971 組み合う		第Ⅱ期以降
(埋土第Ⅱ期瓦)		

これらの建物の多くは、多賀城第Ⅲ期以降に建てられたものであり、出土遺物の点から推して須恵系土器の時期までは降らないものとみられる。また建物の方向については SB974 が発掘基準にほぼ一致するのを唯一の例外として、他はすべて西に 3~5 度ほど偏している。なおこの方向は、西門とおおよそ一致している。

以上、西門跡及び主要な掘立柱建物跡などについて述べてきた。ここで昨年度の第28・29次調査の成果をも含めて、五万崎地区の使われ方を考えてみたい。まず第1に中央やや北寄りに西門および道路が検出されたことにより、この地区を大きく南北に二分して使用していることが判明した。つぎに道路南のブロックは、おおむね10世紀後半以降に使用していたのに対し、道路の北は、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけて使用しているといった使用時期の相違が明確になった。また北のブロックでは先にも述べたとおり、建物の方向が北でやや西に偏している。これに対して南ブロックでは、いずれも基準線にほぼ一致している。こういった相違も両ブロックの時期差を反映しているのであろう。

(2) 出土遺物

今回の調査では、南のブロックで多量に出土した須恵系土器や施釉陶器は極めて少ない。 一方、車のブロックと同様に8世紀に遡る土器や第Ⅱ期の瓦が非常に多く発見されている。 このよりな遺物のあり方から、まだ調査していない士也域にこれらの遺物と関連のある遺 構も存在するのであろう。

(3) SK981 土壙出土の漆と紙片について

最後に、漆の作業に関連すると思われる遺物についてまとめておきたい。今次の調査で A 土器に漆が直接付着したもの、B 土器の中の漆に紙が付着したもの、C 漆によつて樹脂 硬化されて遺存した紙片などが出土していることは既に記した。ところで、これらの遺物 は SK981 土壙の埋土 5c 層で共伴している事実に注目したい。A は土器に漆をとりわけて 何らかの作業を行ったものであろうほた B は作業の途中で一時中断があり、漆の状態を一定に保つために紙で漆液の表面をおおったものであろう。さらに、C は B の漆液を直接おおった紙をはぎとって廃棄したものが遺存したものと理解できよう。こういったものが、1 つの土壙で共伴しているのである。以上の事実から A、B、C などは各々偶然に漆が付着したものとは思われず、漆を用した作業の過程でやや必然的に生じたことが推察れる。同じような現象は第 31 次調査でもみられる。すなわち、第W 層からは先に記した A と C とが共伴して出土しており、上記の推察を補強しえる。1973 年度に計帳断簡を発見した時にも既に指摘したところであるが(注 10)、本年の調査を通して、漆の作業にかかわる形で紙が遺存する可能性が明らかになった。

紙の遺存自体、考古学的には極めて貴重な事実であるが、計帳断簡がそうであったようにこれらの多くは文書の反古であるとしいう事実はさらに大きな意味をもってくるのである。個々の内容は先に紹介したのでくり返さないが、漆の作業にかかわつて、やや高い確率で古代の文書が遺存することが考えられるに至ったのである。今後、多賀城などと性格の似通った官衙遺跡などでも、同様な状態で文書が発見されることが十分期待される。

ところで、平城京左京八条三坊の東市周辺地域の調査で、きわめて興味深い遺物が出土している。調査概報によると、漆付着の土器が 250 点出土しており、それらは長頸壺のような漆を入れる容器・杯・皿・蓋のような漆を使用する際のパレットとして利用されたもの、鉄鉢形土器のように漆を塗ったものなどに分類されている。また内面に漆の付着した曲物や、同様の座板も出土しており、これは、漆の容器として用いたものとしている。さらに紙片や布も発見されている。紙は数枚出土しており、中には「水猪」と読める文書断片も含まれひる。これらは、反古となってすてられたか、あるいは、紙片のすべてに漆と考えられる樹脂状物質が付着しているので、漆容器の覆いなどに再利用されたもののいず

れかと推定もされている。布は麻と絹があり、麻は苧麻、絹は□とみられ、紙と同じく容器の覆いとして利用したものとみなしている。これらに加えて漆塗用の刷毛、漆撹神用の 箆が出土している。

以上の漆関係の遺物は、その大部分が SD1155 出土であり、漆器工房が市の北辺にあった可能性が強いと指摘されている(註 11)。こういった類例にてらすならば、多賀城跡の本年の出土品を、漆作業にかかわるものと推定した事も、大きな誤りをおかしてはいないと言い得よう。また平城京出土の紙片も、多賀城の出土例と比較するならば、或は、漆液の表面を直接おおって、漆液の状態を一定に保つために再利用されたと見なすことも可能ではなかろうか。

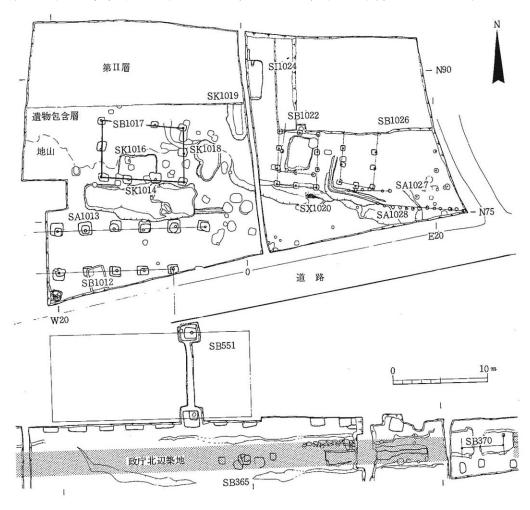
今日では木簡のもつ意義はあまねく理解されるようになったが、文書の発見は、木簡に も比すべき高い評価が与えられると言っても過言ではなかろう。

- 註1 宮城県多賀城跡調査研究所年報1976
- 註 2 宮城県教育委員会「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」宮城県文化財調査報告書 第 33 集 1973 年 3 月
- 註 3 宮城県教育委員会など「安久東遺跡現地説明会」資料 1977 年 8 月
- 註 4 宮城県教育委員会「宮城県文化財発掘調査略報(昭和 51 年度分)」宮城県文化財調 査報告書第 48 集 1977 年 3 月
- 註 5 檜崎彰一「猿投窯」陶磁全集 31 1966 年 6 月 氏によると 1000 年代前半に位置づけられている。
- 註 6 暦面を上・中・下三段に分けて、暦日の下に、日の吉凶・禍福・気節の変動など をあらかじめ漢文でつぶさに注記した暦(河出書房新社「日本歴史大辞典」1972 年 2月)
- 註 7 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973
- 註8 加藤孝「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院研究論文集 11951 年
- 註 9 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1971
- 註10 註6と同じ
- 註 11 奈良国立文化財研究所編「平城京左京八条三坊発掘調査概報東市周辺東北地域 の調査」1976 年 3 月

Ⅲ 第31次発掘調査

1 調査経過

第31次発掘調査は、多賀城市市川字大畑1の1・4の1・4の2・4の7・4の8・5番地(約1,200m2)を対象として実施した。この地域は政庁の北に隣接した場所で、東に向って下がるゆるやかな傾斜面となっている(第57・95図)。昭和48年度に実施した第19次発掘調査の際、政庁北辺築地の北側にも古代の遺構が存在することが確認された。それによると、築地のすぐ北側に東西7間、南北3間と考えられる掘立柱建物(SB551)が、政庁中軸線上に東妻が位置するように配され、その西に、東西2間、南北不明の掘立柱建物跡



第57図 第31次発掘調査

(SB553)が並んでいる。SB551 建物跡は新旧 2 時期のものが同位置で重複している。これらの建物跡は柱穴から出土した遺物によって平安時代(第Ⅲ期以降)とみられる(註 1)。

こうした前回の調査成果に加え、今回の調査対象地域には多量の瓦・須恵器・土師器等が散布していることから、政庁の北方地域にも1つの官衙ブロックが構成されているものと推定された。そこで,今回の調査は、政庁北方地域での遺構のあり方・使用時期、およびその性格を究明することを目的として実施した。

発掘調査に先だち、8月2・3日に測量基準杭を設定し、4日から中旬にかけて発掘器材の運搬および刈払いを行った。発掘区は政庁北を走る道路の北側に東西48m、南北20~30mの範囲に設定し、民有地と市有地の境界に畔を設けて東半・西半の2つに分けた。

8月12日から月末まで表土(第 I 層)の除去および立木の伐採作業を行った。その結果東区・西区とも南端部分ではすぐ地山が露出したが、北側部分には須恵系土器の細片を多量に含む黒褐色土層(Ⅱ 層)が広範囲に堆積していることがわかった。その後の調査は、東区と西区を交互に行っている。煩雑さを避けるため、東西両区に分けて経過を説明したい。

東区については 9 月 2 日から第 II 層上面の精査を行ったところ、古代・中世の遺構は全くないことが確認されたので、この層を除去した(同 6 日)。第 II 層の下は、第 58 図のようにかなり複雑な様相を示していた。南端部の地山は北約 5m 程の所で段をなして落ち込み、この段に沿って瓦と焼土が充満する第 VII b 層、炭を多く含む第 VII c 層等の堆積がみられた。その北にも瓦・須恵器等を含む層が厚く堆積し、北半部は谷状になっているものと想定された。段付近の VII 層は堆積状況から人為的に形成された遺構として把握されたこと、さらに、この層を切った小柱列跡(SA1027・1028)が検出されたことから、この段階で実測する必要が生じた(第 63 図)。

10月1日から11日にかけて、遣方の設定ついで実測・写真撮影を行った後、下層遺構の検出作業にとりかかった。その際、北半については谷部にあたり主要遺構は無いものと思われたため、層序観察を主目的とした巾6mのトレンチを入れることにした。このトレンチにおいて遺構の有無を確かめながら堆積層($\mathbb{III} \sim VI$ 層)を順次除去したところ、予想に反し第X層上面でS11024住居跡が検出された。この作業と併行して、南の段に堆積した第 \mathbb{III} 層・第 \mathbb{IX} 層を順次除去した結果、やはり第X層の上面に焼けた部分が認められた。そこで、10月 14日から 17日にかけて実測・写真撮影を行った。

10 月 18 日から第 X 層の除去作業にかかり、その下は南側で地山が露出し、北側では遺物を含まない第 X I 層が堆積していることが判明した。この面で精査したところ、段の部分に SX1020 階段状遺構が、その北側には $SB1022 \cdot 1023$ 建物跡、排水溝 SD1025 を伴う SB1026 建物跡が検出された(第 66 図)。10 月 22 日から実測・写真撮影・柱穴の断ち割り

などの補足調査を行った後、埋戻し作業にかかり31日に終了した。

西区の検出作業は9月13日から開始した。南端部の地山面ではSB1012建物跡・SA1013柱列跡・SK1014 土壙が検出された。その北側では東区と同様第Ⅱ層の広い分布がみられたが、やはり古代の遺構は認められなかった。調査日程の都合でN87ラインの南側に限って第Ⅲ層を除去したところ、その下に瓦・土器を含む堆積層がみられた。この層は東区の第X層に相当するものかと思われるが、断定はできない。なお、部分的ではあるが、この包含層の上に焼土を多く含むうすい層がのっていた。9月26日~29日にこの面で精査を行ったところ、焼土層を切るSK1016土壙・SB1017建物跡と下の包含層を切るSK1018・SK1019土壙跡等を検出した(第62図)。調査期間等の関係から、下層の調査を断念し、後日に期することにした。その後、柱穴の断ち割り等の補足調査を行い、埋戻し、器材撤収も含めて11月8日に第31次調査を完了した。

註 1 『多賀城跡一昭和 48 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所 1974

2 層 序

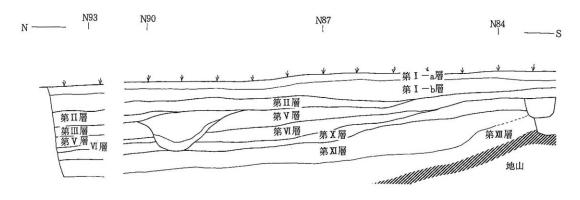
発掘区の南端および西端部分では表土直下に黄褐色の岩盤が現われ、北と東に向って傾斜する地形となっている。このため北東隅を中心として複雑な堆積層がみられる。各部分で堆積の状況が異なるが、中央の南北トレンチの壁に全体的な層序関係が良く示されている(第58図)。そこで、この図を中心として層序を説明しておきたい。なお、考察の項にこれを模式的に現わした第93図を掲げたので参照していただきたい。

(1) 第 I 層

第 I 層は土色と硬さにより、第 I -a 層と第 I -b 層に分けられるが、第 I -b 層中から明治 34 年鋳造の二銭銅貨をはじめ現代の陶磁器が出土することから、ともに現代の耕作土であることが知られる。

(2) 第Ⅱ層・第Ⅲ層

第Ⅱ層は暗褐色の固い土層で、東西約 30m、南北約 9m にわたり分布し、最も厚い所で約 30 cmを測る。この層は須恵系土器の細片を多量に含む自然堆積層である。この上面を精査した結果、古代~中世の遺構は全く検出されなかった。第Ⅲ層はやや灰色味を帯びた黒褐色であり、発掘中央トレンチの北部で部分的(南北約 4m)に認められた層である。土質および須恵系土器の入り方など第Ⅱ層に類似している。



第58図 東半区の層序図

(3) 第IV~VI層

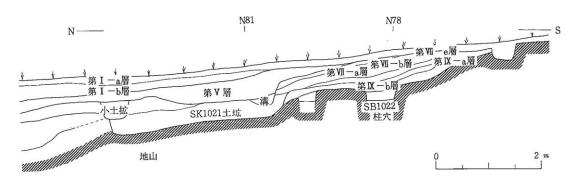
(4) 第VII層

(5) 第VIII層

第Ⅲ層は発掘区東端において第Ⅱ層の下、第Ⅸ層の上に部分的にみられた堆積層で、多量の炭片と焼土・地山小ブロックを含んでいる。焼土と瓦が充満する第Ⅶ層との関係は、東西に走る現代の溝による破壊のため、明確にとらえられない。この層からは、弘仁 14年(823)と年号の記された文書断簡と第Ⅳ期の 431 軒丸瓦が出土している。

(6) 第IX層

第IX層は第皿層の下、地山の上に堆積した層である。土色により第IX-a 層と第IX-b 層に



第58図 東半区の層序図

分けられるが、aはbが変質した可能性が強い。第IX-a層は、暗灰色の固い層で酸化鉄の層が断続的にみられる。第IX-b層は、暗い茶褐色の非常に固い層で、基盤の大きなブロックを多量に含んでいる。この状況から、第IX層は人為的に形成されたと考えられる。

(7) 第 X 層

第X層は、基盤のブロックを斑点状に含む暗い茶褐色の土層である。中に多量の瓦と木炭を含む。これらの点から、第X層は人為的に形成された整地層として理解される。この面で検出された遺構としては、S11024 住居跡と焼け面がある。

(8) 第 X I 層 · 第 X Ⅱ 層

第X層の下には、全体に均質な茶褐色層一第XI層、暗い黄褐色を呈し若干の基盤ブロックを含む第XII層が確認された。部分的に掘り下げた結果ではあるが、ともに遺物を含んでいない。

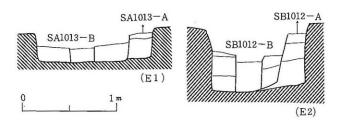
3 発見遺構

第31次発掘調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡5棟、柱列跡3条、竪穴住居跡1棟、 土壙跡5、溝2条、瓦敷きの階段状遺構1などである(第57図)。以下西区から順を追って 記述する。なお、各遺構の検出面として記載する層の名称については、第58図の層序図 とその模式図である第94・95図を参照されたい。

(1) SB1012 建物跡(第 59・60 図・図版 11)

SB1012 は発掘区南端で地山面から検出されたもので、東西に 5 個の柱穴が並ぶ。新 1 日 2 時期のものが、同位置に重複しており、新しい方を SB1012-B、古いものを SB1012-A とする。SB1012-A の柱穴は、1 辺 1.1m 前後の方形で、深さは現存 0.7m 程である。柱穴の壁はほぼ垂直に掘られており、その埋土は、20 cm位ずつの互層につき込まれている。い

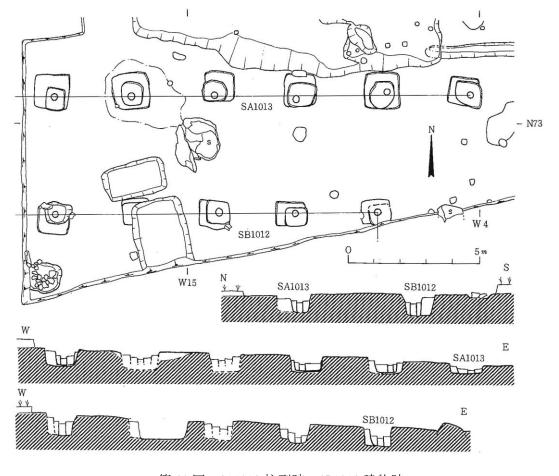
ずれの柱穴も SB1012-Bにより底面 まで破壊されており、柱位置は不明 確であるが、SB1012-A と同様発掘 基準線に直交する 10 尺(3m)等間と 考えられる。その時期については柱 穴の埋土中から第Ⅲ期の瓦が出土し



第 59 図 SB1012·AS1013

ていることから、第Ⅲ期以降の遺構であると考えられる。なお、この柱穴列を建物跡と 考えた理由については、次の SA1013 の項で述べる。

SB1012-B は、SB1012-A と同位置に建て替えられたものである。柱穴は 1 辺 $70\sim80$ cmで旧柱穴より小ぶりであり、壁は垂直もしくは上方がやや開く形に掘られている。柱穴の底は古い方の柱穴の底とおよそ一致しており、旧柱穴の抜穴をかねて掘られたものと思われる。西から 2 番目を除く他の柱穴では、柱痕跡がみられ、直径約 27 cmの丸柱が用いられたことが知られる。柱間寸法は、西から 6.17m(2 間分)+2.89m+3.09m であり、10 尺等間で計画されたものと考えられる。建物の方向は、基準線とほとんど直交する $(E-0)^{\circ}$



第 60 図 SA1013 柱列跡 · SB1012 建物跡

 $32' - N)_{\circ}$

(2) **SA1013 柱列跡**(第 59 · 60 図 · 図版 11)

SB1012 の北 4.4m の位置にこの建物跡と平行する形で、東西 5 間の柱穴を地山面から検出した。この柱列も SB1012 と同様 2 時期のものが同位置で重複している。古い方の SA1013-A の柱穴は、1 辺約 1.3m の方形で、深さは現存 $0.4\sim0.7m$ である。柱穴の壁はほぼ垂直に立ち、その埋土は 20 cm位ずつの比較的粗い互層につき込まれている。SB1012 と同様新しい柱穴により切られているため、柱位置は不明である。柱間寸法・方向は、SA1013-B とほぼ同じと考えて良いであろう。その時期は、埋土中から第Ⅲ期の瓦が出土したことから、第Ⅲ期以降の柱列として理解される。

SA1013-B は、SA1013-A と同位置に建て替えられたものである。柱穴は 1 辺 80~90 cmの方形ものが多く、古い柱穴より一まわり小さく掘られている。その壁は垂直あるいは上方が若干開き気味で、埋土は 25 cm位ずつの粗い互層となっている。柱痕跡はすべて確認されており、径 25~27cm の丸柱を用いたことが判る。柱間寸法は西から 2.94+3.10+3.08+3.39+3.10m であり、おそらく 10 尺等間の柱列として計画されたものであろう。柱列の方向は基準線とほぼ直交する(\mathbf{E} - $\mathbf{0}$ ° 15'- \mathbf{N})。

以上 SB1012 と SA1013 について述べてきたが、ここで両者の関係を整理しておきたい。 両者は南北 4.4m の距離をおいて平行し、かつ柱筋が通っている。また、ともに同位置で大きな柱穴から一まわり小さな柱穴へという重複がみられることから、両者は近密な関係を有するものと言えよう。ただし、SB1013 は燗分でとまり、SA1013 の東端柱穴に対応する位置には地山にくい込む巨石があり柱穴は存在しない。そこで・現段階では、SB1012を発掘区南側にのびる東西棟、北側の SA1013 をそれに付設された塀的な機能を有する柱列と理解した。

(3) SK1014 土壙 · SD1015 溝(第 62 図 · 図版 12 上)

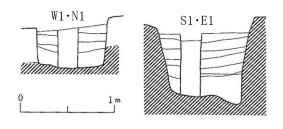
SK1014 土壙は SA1013 柱列の北に接して、地山面から検出されたものである諫西 12m、南北 4m の不整方形の土壙で、底面は凹凸が著しく最も深い所で 40cm を測る埋土には焼土瓦がぎっしり詰っており、一時期に埋められたものと思われる。焼土と瓦の入り方および瓦の様相は東区の段上に形成された第Ⅷ層と極めて似ている。

SD1015 は SK1014 の東端で検出された巾 50cm、東西 4m の溝である価面は、底近くでは垂直に立つが、上方では開く形となり、中には黄色の地山土が一手に埋められている。なお、溝の西端部は SK1014 の埋土におおわれている。

(4) SB1017 建物跡 · SK1016 土壙(第 62 図 · 図版 12 下)

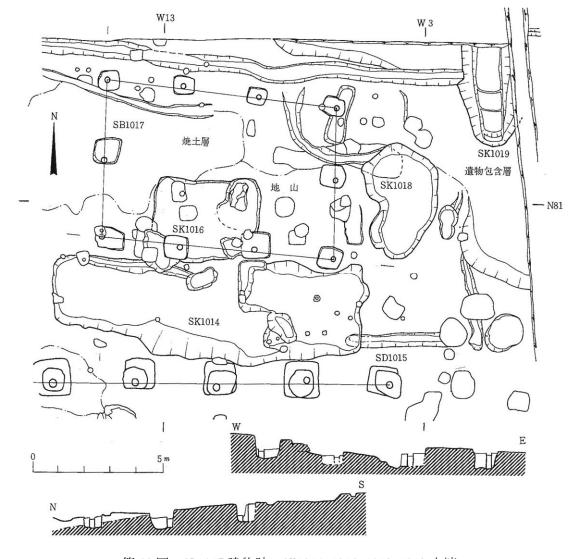
SB1017 は、SK1014 土壙の北で検出された東西 3 間・南北 2 間の掘立柱建物跡である。

北側の柱穴は焼土層およびその下の遺物包含層を切り、第II層に覆われていた。遺存状況の良い南側の柱穴をみると、1 辺 0.9m の方形で、深さは 0.9m 前後である。断面は上方が開くものが多く、その埋土は $8\sim15$ cm位ずつの比較的こまかい互層につき込まれている(第 61 図)。北



第 61 図 SB1017 柱穴

側の柱穴が削平により小さくなっている現象は、この断面形の特徴からうなづける。また、すべての柱穴に柱痕跡が確認され、径 21~cm程の丸柱が用いられたものと考えられる。柱間寸法は、北側柱で西から 2.85+2.88+2.98m、南側柱で西から 2.96+2.79+3.02m となり、西妻では南から 2.85+3.03m、東妻で 2.95+2.71m となる。この建物跡は各柱列が直交せ



第62図 SB1017建物跡、SK1014·1016·1018·1019土壙

ずに全体として平行四辺形となっているため、方向を定めにくい。東西両妻はほぼ基準線に沿っているが(東妻 N-0°06′-E、西妻 N-0°12'-E)、南北の側柱は約 $5\sim6$ 度南に偏している(南側柱 E-4°59'-S、北側柱 E-6°27'-S)。柱穴の埋土中から第III期の瓦が出土しており、第III期以降の建物跡であることが判る。なお、この付近の遺構の前後関係を整理すると、SK1016 \rightarrow SB1017 \rightarrow SK1014 \rightarrow 第III層となる。

SK1016 土壙は、SB1017 の中程に焼土層の面から検出されたもので、東西 4m・南北約 3m の長方形のごく浅い土壙である。南側は SB1017 の柱穴などにより破壊されているため、判然としない。この土壙には焼土がぎっしり詰っており、一時期にかつ人為的に埋められたものと思われる。その性格は不明である。

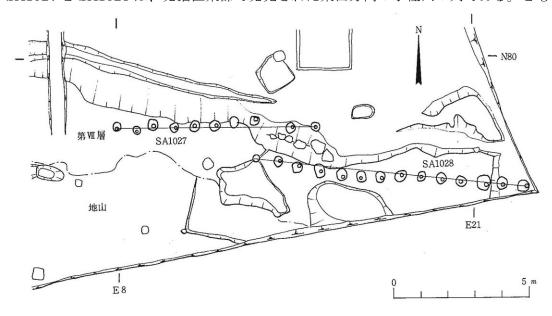
(5) SK1018 · SK1019 土壙(第 62 図)

SKI018 は、SB1017 の東側で、第II層下の包含層の上面から検出された土壙で、南北 4.3m・東西 2.9m の不整円形のものである。壁はかなり傾斜して外方に広がり、深さは 20 ~30 cmである。埋土は炭・須恵器・土師器を多量に含む上層と遺物をさほど含まない下層 に分かれる。

SK1019 土壙は、SK1018 の北東位置に検出された土壙である。東西 2.3m・南北 4m 以上の規模で、SK1018 と同様に遺物包含層を切っており、第 II 層に覆われている。横断面の形は、下半部では垂直に立ち上がっているが、上方は大きく開いている。

(6) **SA1027・1028 柱列跡**(第 63・64 図・図版 13 上)

SA1027 と SA1028 は、発掘区東部で発見された東西方向の小柱穴の列である。ともに



第 63 図 SA1027 · 1028 柱列跡

第VII層上面から検出されたもので、この地域の古代遺構の中では最も新しい遺構である。南側の SA1028 は、東西 10m の範囲で 14 ヶの柱穴が確認されている。柱穴は、40~60 cmの円形のものが多く、深さは 1m 程である。柱穴の壁は、上方でやや広がるものと中程で段をもって狭くなるものがある。埋土には、第VII層と同様、多量の瓦と焼土が含まれているのが特徴的であり、雑につき込まれた感がある。ほとんどの柱穴には柱痕跡が確認され、径 15 cm前後の丸柱が用いられたことがわかる。柱は 60~80 cm程の間隔で立てられたものと思われるが、一直線上にならばず、やや蛇行する。

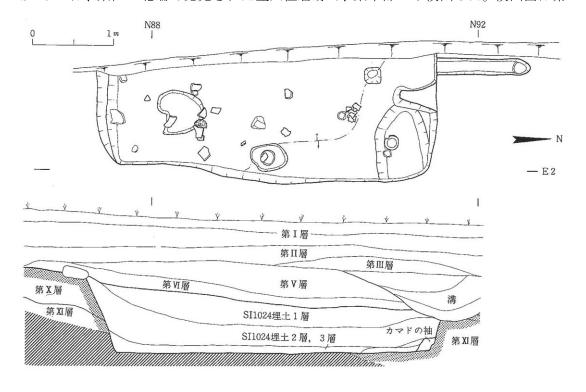


第 64 図 SA1028 の柱穴

SA1027 は、SA1028 の北約 1.3m の所にこれと一部重なるようにして検出された柱列跡である。10 ケの柱穴が発見され、東西約 7.3m に及ぶ。柱穴の形、埋土の状況などは SA1028と全く同じである。こうした共通性から、2 本の柱列は同時期で一連の構造物と考えられるが、その性格については判然としない。なお、その時期は、柱穴が切る第 $\overline{\mathbf{W}}$ 層中に第 $\overline{\mathbf{W}}$ 期の瓦が含まれていることから、第 $\overline{\mathbf{W}}$ 期以降であることが知られる。

(7) \$11024 住居跡(第65 図・図版13下)

SI1024 は、東区の北端で発見された竪穴住居跡で、東半部のみ検出した。検出面は第 X

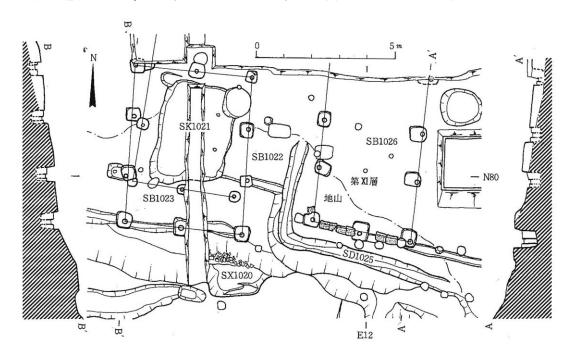


第 65 図 SI1024 住居跡

層の上面であり、第VI層により覆われていた。その規模は、東辺で 4m、東西 1.5m 以上、最も保存の良い南辺の深さが 0.9m である。壁は上方がやや開き気味に立ち上る。床面はほぼ平坦であるが、基盤の露出しない北東隅付近には、軟質の部分を硬い土で置きかえて床面とした形跡がみられる。柱穴および周溝は認められなかった。カマドは北壁の内側に粘土を用いて築かれており、巾 50 cm・奥行 55 cmほどの規模で U 字形のものである。煙道は底面部分がかろうじて残っており、現存長は 1.2m である。床面から須恵器杯・瓦などが若干出土している。

(8) SB1022 - SB1023 建物跡(第 66 図・図版 15 上)

SB1022 は、S11024 住居跡の南約 3m の位置で発見された掘立柱建物跡で、東西 2 間、南北 3 間の東西棟である。検出面は地山および第 XI 層・第VII層であり、第VII層・第IX層に覆われていた。柱穴は、1 辺 $40\sim60$ cmの方形で、若干底面が小さくなる傾向がある。埋土は粗い互層につき込まれている。いずれの柱穴にも柱痕跡が認められ、径 $14\sim18$ cmの丸柱が用いられたことが判る。柱痕跡の中心から柱間寸法を求めると、南妻で西から 2.02+2.16m、北妻で 2.14+2.00m、東側柱で南から 1.99+1.72+1.81m、西側柱で 1.64+2.10+1.84m となる。恐らく梁行で 7 尺等間、桁行で 6 尺等間に計画されたものであるう。西側柱列で建物の方向を求めると、4 度 19 分東に偏している。建物の時期を直接決定する遺物はない。なお、この建物の南に接して高さ 60 cmほどの地山の段がみられるが、



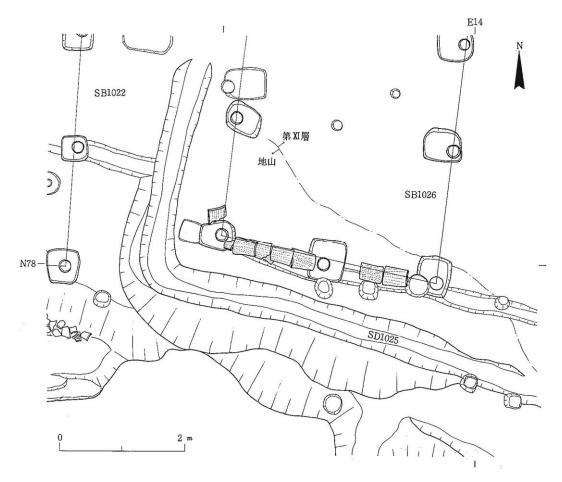
第 66 図 SB1022 · 1023 · 1026, SX1020

これは SB1022・1023 を建てるために、斜面を削平した結果の段であると思われる。

SB1023 は、南辺と西辺各 2間分の柱穴から推定される建物跡である。検出面は SB1022 と同じであるが、SB1022 の柱穴によって切られている。柱穴には、1辺 40 cmの方形と径 40 cmの円形がある。柱痕跡が確認出来たのは 3 ヶ所であるが、径 14 cm程の丸柱を用いたことが知られる。柱間寸法はおよそ $1.8m(6\ R)$ 等間の建物と思われ、方向は北で約 7° 東に偏している。直接に時期を決定する遺物はない。

(9) **SK1021 土壙**(第 66 図・図版 15 上)

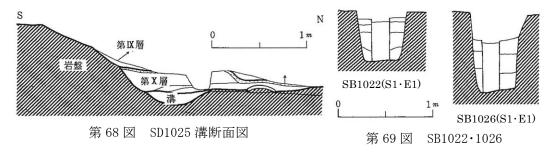
SK1021 土壙は、SB1022 建物跡の上に盛られた第IX層の上面で検出されたものである。 また、次の盛土作業の際の第VII層がこれを覆っている。規模は南北 3,6m・東西 2.6m の長 方形に近く、深さは 40 cm程である。土壙内の堆積状況から一手に埋められたものと思わ れるが、その性格は不明である。



第 67 図 SB1026 · SD1025

(10) SB1026 建物跡 - SD1025 溝(第 66~69 図・図版 14)

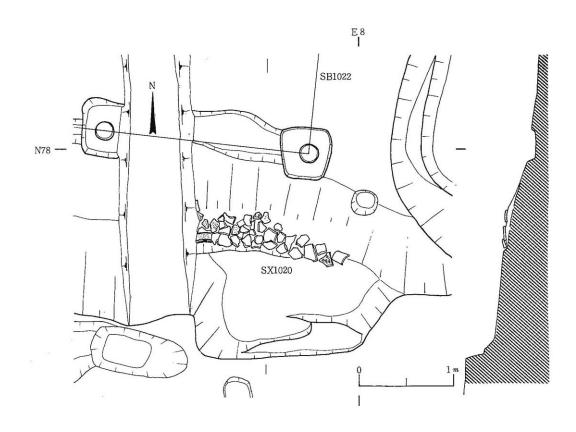
SB1026 は・SB1022 の東に並んで発見された掘立柱建物跡で、東西 2 間.南北 3 間以上 の南北棟である。南妻に壁持ち地覆かと思われる平瓦が敷き並べられている点が注目され るよの建物跡は第蠣あるいは第 X 層を除去した後、南半は地山面から、北半は第 X 層面か ら検出された。柱穴は、1 辺 $54\sim75$ cm の方形で、深さは、保存の良い所で 82 cmである。 柱穴の壁はほぼ垂直に立つが、若干上方が広がり気味である。埋土は、約 20 ㎝位ずつの 粗い互層となり、焼土を含んでいる。すべての柱穴に柱痕跡が確認され、径 18 cm前後の 丸柱が用いられたことが知られる。また、柱痕跡は値線上に並ばず、かなりバラツキのあ る建て方をしている。柱間寸法は、南妻で西から 1.69+1.83m、東側柱で南から 2.13+1168+2.03m、西側柱で 1.84+1.71m+……となり、6 尺あるいは 7 尺の柱間寸法の建 物跡と思われる。建物の方向は、建物自体平行四辺形を呈するため決め難いが、発掘基準 線に対し北で7°~13°に偏している(南妻で E-13°00′-S、東側柱で N-7°46'-E)。 瓦を用いた壁持ち地覆は、南妻で顕著に残っており、柱筋に平瓦を並べたものである。1 点ではあるが、西側柱列にも残存していた。平瓦は完形品を主として用い、凸面を上にし て並べられており、部分的には動り合うものもある。なお、地覆の遺存から、この建物の 南妻の柱穴は全く削平されて拠ず、良く当時の面をとどめていると見られる。柱穴の深さ を検討する際の好資料となろうよの建物の時期は、地覆の瓦から第Ⅲ期以降のものと考え られる。



SD1025 溝は、SB1026 の西辺と南辺に L 字形にめぐるもので、巾約 50cm、深さ 15 cm 程で・断面は浅い U 字形を呈する。埋土下音 5 には砂の堆積がみられ、水が流れた状況を示している。この溝の性格は、SB1026 構築の際に行った削平の結果、建物床面のレベルが南側の地山より低くなっていること、および、この溝が建物を完全に囲まずに東に抜けていることから考えて、単なる SB1026 の雨落ち溝ではなく、周囲からの流水に対する排水溝とみるのが妥当であろう。

(11) **SX1020 階段状遺構**(第 66・70 図・図版 15 下)

SX1020 は、東区の段の所に設けられた階段状の遺構である。この段の北に堆精した第



第70図 SX1020 階段状遺構

 \mathbf{WI} 層・ \mathbf{IX} 層を除去した後、地山面で検出された。段の中程に巾 $35~\mathrm{cm}$ 、東西 $1.7~\mathrm{m}$ の範囲に 瓦片を敷き並べたもので、これと対応するように南側の地山がコの字状に削平されている。 使用された瓦は、平瓦・丸瓦がほとんどであるが、軒平瓦 $2~\mathrm{L}$ 点が含まれでいた。また、平瓦・丸瓦とも一例を除き凸面を上向きに並べられていた。 $\mathbf{SX1020}$ を階段状遺構としたがその性格は明らかではない。時期は、敷き瓦に 721 均整唐草文軒平瓦が用いられていることから、第 \mathbf{III} 期以降と考えられる。

4 出土遺物

第31次発掘調査において出土した遺物には、多量の瓦・須恵器・土師器・須恵系土器・石製品・鉄滓などのほか、注目すべきものに第Ⅷ層出土の文書断簡がある。以下(A)で、主要遺構・層に関係する遺物について記載し、(B)では、(A)と重複する部分もあるが、遺物の種類ごとに全体の出土傾向を述べておきたい。

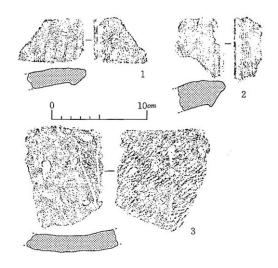
(A) 主要遺構・層の出土遺物

(1) SB1012 · SA1013 · SB1017 柱穴出土の遺物(第71図)

SA1013-A 柱列跡の柱穴埋土からは、瓦と須恵器・土師器が若干出土した。このうち最も新しい遺物としては第Ⅲ期の平瓦 2 点があげられる(第71図1・2)。1は、凸面の縄叩き目がつぶれ、凹面の布目がナデ消されている平瓦であり、表面に黒色の自然釉がかかる。また、側端の断面形に特徴をもつものである。2 も同種の瓦である。

SA1013·Bは、SA1012·Aを切る柱列であるが、 SA1012·A 埋土出土の遺物より新しいものは出土 していない。

SB1012-A 建物跡の柱穴埋土からは、第Ⅱ期の 焼けた平瓦が出土している。



第71図 柱穴出土の土器

SB1017 建物跡の柱穴埋土中からは、第Ⅰ期・第Ⅱ期の瓦のほか、第Ⅲ期と思われる平瓦2点が出土している(第71図3)。

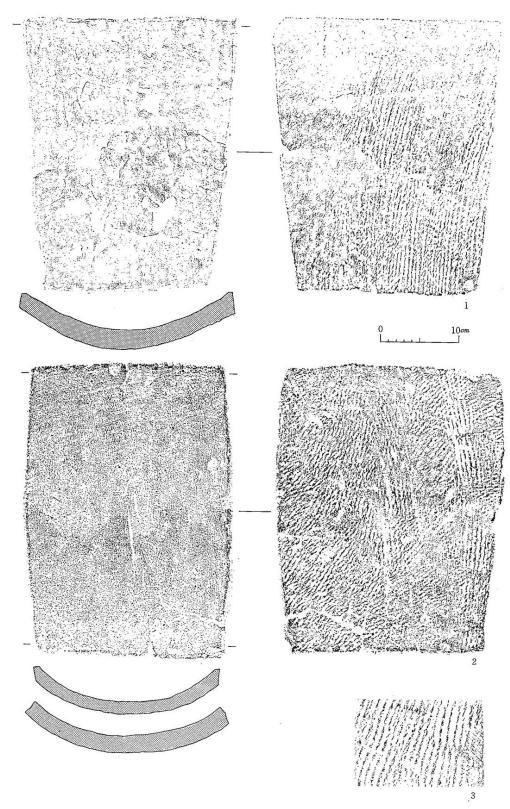
(2) SB1026 の敷設瓦(第 72 図)

SB1026 建物跡の壁持ち地覆に用いられた瓦は 9 点の平瓦であり、そのうち 7 点は完形品である。これらは製作技法から A タイプ(3 点)と B タイプ(6 点)に分けられる。

A タイプの平瓦は、凸面に縦走する縄叩目を残し、凹面の布目が木口によって、ナデ消されているものである。凹面には糸切痕がタテ方向に走り、凸面の叩きは巾5 cm前後の板に縄を巻きつけた原体で行なわれている。胎土は、砂粒を含まぬ徴密なもので、焼成も堅徴である。2 点はやや暗い灰色を呈するが、赤褐色のものもある。法量は、広端巾 $25\sim27$ cm、狭端巾20.5 cm、長さ35 cm、厚さ $2.0\sim2.4$ cm前後といった規格性がみられる。

Bタイプの平瓦は、凸面には縦走あるいは斜行する縄叩目が残り、凹面の布目もそのまま残るものである。凹面に横方向の糸切痕がみられる。凸面の叩きは、巾6cm前後の板に縄を巻いた原体を用いて行われているが、若干細目の縄を使用してやや乱雑な叩き方をしたもの(同図 2)と太い縄の原体で縄目がタテに並ぶように叩いたもの(同図 3)がある。このタイプの瓦は、側端の面取りの仕方にも特徴があり、側面が広端側半分では内側を向いているが、狭端に近い方では外に開いた形になっている。法量は、広端部 24 cm、狭端部 23.5 cm、長さ 37 cm、厚さ 1.5~2.3 cm程のものが多い。胎土は砂粒を少量含んでいる。黄白色で極めてもろいものが多く、2 次的な火を受けたもの=焼け瓦と考えられる。

このA・Bタイプの平瓦は出土例が少なく、その時期等については不明な点が多い。た



第72図 SB1026建物跡の壁持ち地覆瓦

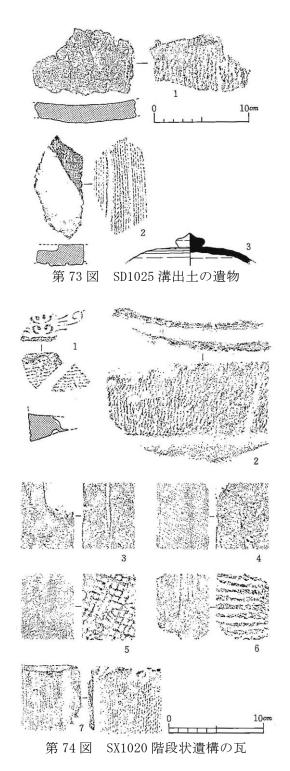
だし、このタイプの平瓦は、第 I 期軒平瓦に全くみられず、第 II 期以降の瓦であることは間違いない。また、技法・胎土の点で 640 単弧文軒平瓦に組む平瓦と比較的近似すること、B タイプが火災にあっていることから、第 II 期に含まれる平瓦とみなして良いかと思われる。

(3) **SD1025** 溝出土の遺物(第 73 図)

SB1026 建物跡の排水溝である SD1025 の埋まり土からは、須恵器(第73 図 3)・土師器の小片のほか瓦が平箱 2 ヶ分出土している。瓦は、第 I 期と第 II 期の平瓦・丸瓦が主体を占めるが、第 III 期のものがわずかに含まれている(第73 図 1)。図 1 の平瓦は、凹面の布目がナデ消されたもので、表面には黒色の自然釉・灰がかかる。2 は時期不明の平瓦である。このほかに第 I 期の 512 軒平瓦(第84 図)、第II 期の刻印瓦(第90 図)などがみられる。

(4) **SX1020** の敷瓦(第 74 図)

SX1020 階段状遺構に敷き並べられた瓦は 721-A 均整唐草文(第 74 図 1)・640 単弧文軒 平瓦(2)各 1 点、平瓦 13 点と丸瓦 3 点である。 平瓦には第 I 期から第 I 期までのものがみられる。第 I 期の平瓦は、両面をヘラケズリあるいはナデにより調整したもの 3 点(3)、凸面がヘラケズリされ凹面に布目の残るもの 1 点(4)、凸面に格子叩き目のあるもの 1 点(5)の計 5 点である。第 I 期の平瓦は 5 点あり、縄叩き目を残し、凹面がナデ調整されたものである(6)。第 I 期のものは 1 点で、凸面に縦走



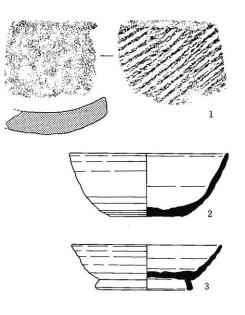
する縄叩き目がみられ、凹面は軽くナデ調整されている。また、側端部は鋭角になる特徴をもつ(7)。この施設は、第Ⅲ期の721-A軒平瓦と平瓦が使用されていることから、それ以

降の時期のものであることが知られる。

(5) \$11024 住居跡出土の遺物(第 75 図・図版25)

S11024 住居跡の出土遺物は、床面出土のものと埋土出土の遺物に分けられる。

a. 面出土遺物一床面からは若干の須恵器・土師器・瓦が出土している。須恵器には杯・高台杯・甕がみられるが、図示した2点以外は小破片でしかも量が極めて少ない。2は口径16.6cm、器高6.3cmと大形の杯で、体部下半と底部に回転ヘラケズリが加えられている(図版25·3)。3はヘラ切りの高台杯である。底部周縁を回転ヘラケズリした後に、やや外に開く形の高台を付



第75図 SI1024 住居跡の遺物

けたものである。内面は赤榿色、外面は灰色を呈する(図版 25-4)。土師器には杯と甕の破片がある。いずれも極く小さな破片であるため明確ではないが、杯はロクロ調整の内黒杯、甕は体部に刷毛目を残すもので、ロクロを使用していないものと思われる。瓦は、III-A重弁蓮花文軒丸瓦 1 点と平瓦・丸瓦である。平瓦には、第II 期の 640 あるいは 620 軒平瓦と組むタイプ 14 点(第 75 図 1)と第 I 期のもの 6 点がみられる。

b. 埋土 3 層出土遺物一土器では、須恵器杯・甕・瓶・土師器甕がわずかにある。須恵器杯 1 点はヘラ切りで無調整のものである。その他は小片のため不明である。瓦は平瓦と丸瓦である。平瓦を分類して各時期の出土数をみると、第 I 期が 15 点、第 I 期が 25 点、第 I 期 1 点、不明 3 点となる。文字瓦としては、第 I 期の丸瓦玉縁部にヘラ書きされた「下」 1 点と、第 I 期刻印「丸」 -A の平瓦 2 点がある。

c. 埋土2層出土の遺物一土器は少量であるが、ヘラ切りの須恵器杯がみられる。瓦は埋土3層と同様の傾向を示す。この中に621偏行唐草文軒平瓦1点が含まれている。

(6) **SK1019 土壙**出土の遺物(第 76 図)

SK1019 土壙からは、多量の須恵系土器と若干の土師器・須恵器・瓦が出土している。 **須恵系土器**には杯・高台杯・台付鉢(?)がみられ、各々の出土数は底部数で $122 \cdot 68 \cdot 2$ 点である。杯は、底径 $4 \sim 4.5$ cm・口径 11 cm前後のものがほとんどであり(第 76 図 $1 \sim 7$)、口径 13.5 cmのやや大形の杯(図 8)は極めて少ない。高台杯では、9 のような皿状のものとやや深い器形のものがある。 **土師器**には、内黒の杯・高台杯と甕があり、いずれもロクロ調整を受けたものである。杯は、糸切りが 3 点(第 76 図 10)、底部全体を回転へラケズリ

したもの1点、磨滅して不明のもの4点である。**須恵器**には杯・高台杯・盤(11)・甕・瓶がみられるが、全体に量も少なく、小破片が多い。杯は、ヘラ切り3点と糸切1点である。

以上の各種土器と杯類の底部数で比較すると、須恵系土器 190: 土師器 11: 須恵器 4 となり、須恵系土器が圧倒的に多いことがわかる。瓦は、平瓦と丸瓦が平箱 2 ヶ分出土しているが、土壙の時期・性格と特に関係するとは思われないので、省略する。

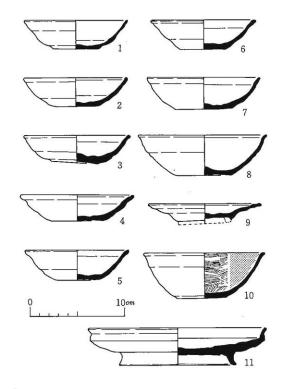
(7) **SK1018 土壙**出土の遺物(第77図)

SK1018 土壙からは、須恵器・土師器・瓦が出土しているが、須恵系土器は全く含まれない。須恵器では、杯・高台杯・双耳杯・蓋・甕がある。杯は 7 点ともヘラ切りである(第77図1~4)。蓋の中には硯に転用したため内面が磨滅しているものがみられる(第92図23)。そのほかは小破片で、詳細については不明である。

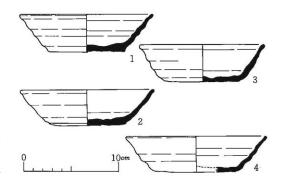
(8) **SK1014 土壙**跡出土の遺物

(第 78 図・図版 25)

SK1014 土壙からは平箱にして約 100 ヶ分の瓦のほか、若干の須恵系土器・須恵器・土師器が出土している。**須恵系土器**は底径 4.5cm前後のやや小形の杯 5 点と高台杯 2 点であ

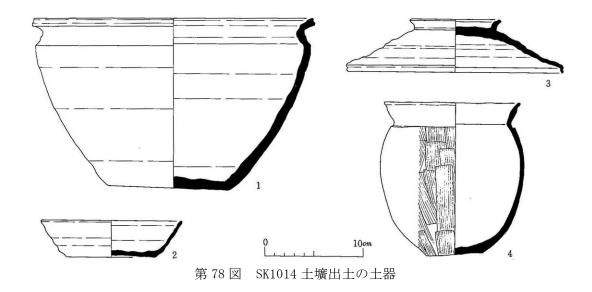


第76図 SK1019 土壙出土の土器



第77図 SK1018 土壙出土の須恵器

る。**須恵器**では杯・高台杯・蓋・甕・瓶があるが、多くは小片である。杯は、ヘラ切り 8 点(第 78 図 2)、糸切り 2 点と底部全面を回転ヘラケズリしたもの 3 点である。図 3 の蓋は口径 22 cmの大形品で、天井部を回転ヘラケズリした後径 9.4 cmのリング状つまみをつけたものである(図版 25-6)。図 1 の鉢は口径 28.7 cmで、くの字状の口縁部をもつ。底部は磨滅している(図版 25-7)。 土師器には内黒の杯・両面黒色の椀・甕などがあるが多くは小破片である。図 4 の甕はロクロを用いていないもので、底部に木葉痕かと思われる痕跡がある。外面は全体にタテ方向の刷毛目がみられ、口縁部はヨコナデされている。内面は器壁



が荒れているため調整は不明である(図版 25-5)。

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・鬼板・平瓦・丸瓦があり、この中に文字瓦がみられる。軒丸瓦は第 I 期の重弁蓮花文が 6 点(110-B・111-B 各 1 と 111 の小破片 4 点)と第 II 期の 220 重圏文 2 点の計 8 点である(第 83 図参照)。軒平瓦は、第 I 期の重弧文(510 または 511)が 10 点と第 II 期の 620 偏行唐草文 2 点・621 偏行唐草文 9 点・640 単弧文 3 点である。文字瓦は第 I 期と第 II 期のもの合わせて 44 点出土した。第 I 期のものとしては、丸瓦の玉縁にヘラ書きされた「下」が 3 点・「常」が 2 点・「木」が 1 点と、凸型による陰刻文字「下今」の平瓦 2 点、「上」の平瓦 1 点がみられる。第 II 期の刻印瓦は「物」 -A15 点・「丸」 -A9 点・「矢」 -A3 点・「矢」 -B1 点・「伊」 6 点・「田」 -A1 点の計 35 点である。平瓦・丸瓦については部分的にしか整理を行っていないが、後にのべる第 VII 層と同様の傾向と思われる。

(9) 第 X 層出土の遺物(第 79 図)

第 X 層からは、多量の瓦と須恵器・土師器がわずかに出土した。瓦には軒丸瓦・軒平瓦各3点、文字瓦10点と平瓦・丸瓦がみられる。軒瓦は210重弁蓮花文2点.220重圏文1点・511重弧文軒平瓦3点である(第83・84図参照)。文字瓦には、第 I 期のへラ書き丸瓦「下」1点・「上見冨」の平瓦1点(第89図参照)と第 II 期刻印瓦の「物」−A3点・「丸」−A1点・「伊」2点・「田」−A2点・「田」−D1点がある。総数296点の平瓦を時期で分類すると、第 I 期44%・第 II 期51%・第 III 期2%・その他不明となる。第79図1は第 III 期の平瓦である。表面に黒色の自然釉・灰が厚くかかり、側端の断面形に特徴のある平瓦である。図2の平瓦も同類と思われる。

須恵器杯では、ヘラ切り 6 点、底部を手持ちヘラケズリしたもの 1 点(第 79 図 3)、回転ヘラケズリしたもの 1 点(4)がみられる。土師器には、ロクロ調整の杯・甕があるが、詳細は不明である。

(10) 第区層出土の遺物(第80図)

第IX層からは、須恵器・土師器・瓦などが出土している。須恵器には、杯・高台杯・蓋・甕などがあるが、図示できるものは少ない。杯には、糸切り1点・ヘラ切り4点(第81図

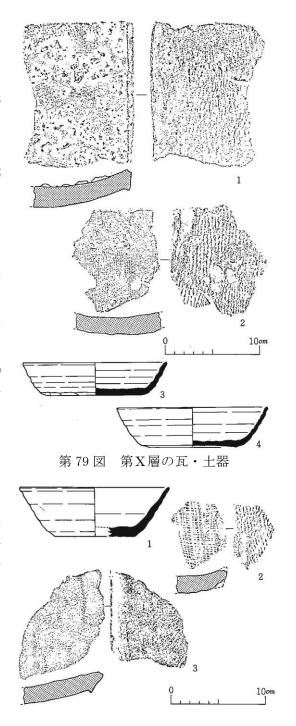
1)・静止糸切りの後手持ヘラケズリしたもの 2 点(第 92 図 26)がみられる。土師器は杯と高台 杯である。杯には、底部全面を回転ヘラケズリ したものと手持ヘラケズリしたもの各 1 点があ る。このほか、須恵系土器かと思われる杯 1 点 があるが、小片のため不明である。

瓦は、軒瓦 13 点と約 1,000 点の平瓦・丸瓦であり、この中に 9点の文字瓦が含まれている。軒丸瓦の内訳は、111 が 4点、210 が 4点、220 が 1点である。軒平瓦は 512 の 2点である。文字瓦は、第 I 期 − 丸瓦玉縁にヘラ書きされた「毛」(第 87 図 3)・平瓦に太いヘラで記された「上」(第 88 図 11)・型による陰刻文字「下今」・同「上」(第 88 図 1・3)が各 1点と、第 II 期刻印瓦一「丸」 − A2点・「伊」 2点・「田」 − C1点である(第 90 図)。平瓦 519点を時期ごとに分けると、第 I 期のものが 42%、第 2 期 52%、第 III 期 2%(第 80 図 3)、第 IV 期 0.4%(第 80 図 2)、その他不明となる。

(11) 第112 | 第12 |

第Ⅷ層からは、須恵器・土師器・硯・土錘・ 瓦のほか、文書断簡が出土している。

須恵器には、杯・蓋・甕・瓶などがあるがいずれも小破片である。杯は、ヘラ切り後、手持



第80図 第IX層出土遺物

ちヘラケズリされたもの 1 点(第 92 図 8)、底部全面を回転ヘラケズリしたもの 1 点、ヘラ切り 17 点(10)と糸切り 7 点である。蓋には、器面全体にヘラミガキを施したもの 1 点がみられる(5)。 **土師器**の杯は、底部数で 20 点出土した。いずれも磨滅が著しく詳細は不

明であるが、ロクロ調整による内黒杯と思われる。この中で、漆が内面に付着したものが 1 点確認された(図版 27-1)。後述する漆付着の文書断簡との関連が予想される。硯は、円面硯の小片 2 点であり、それぞれ円孔と短冊形の透し穴がみられる。土錘は、径 5 cm・長さ 8.3 cm で、指でおさえることにより成形されたものである(18)。

瓦では、軒丸瓦(210・220・410)、軒平瓦(511・640)のほか、第 1 期のヘラ書き文字瓦「下」・「毛」(第 87 図参照)と第Ⅲ期刻印瓦「伊」・「矢」・「田」・「物」・「占」(第 90 図)などがみられる。

文書断簡は、漆をはさんでニッ折にされた紙片で、漆の付着により遺存したものである (図版 2 軌現状は $A \cdot B$ の 2 片に分れている。B の大きさは、縦 21.5 cm・横 11 cm(左右に広げた場合 25 cm程)である。墨痕は極めて薄いが、次の文字が確認された。

- A コ事匚
- B □□仁□□

弘仁十四年七月十一日

・・・・・・・・・・・(ここからニッ折)

少目三口口 野口

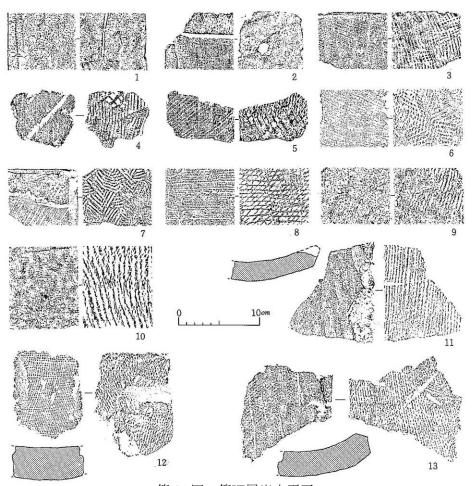
AとBは接合できないが、この間に入るべき大きな紙片はほかにないことから、文書の内容部分は極く短いものと思われる。また、最後の「野口」は、他の文字より一まわり大きく、自署であることが注目される。この文書は、内容的には不明であるが、明らかに公式文書の形式をとっているのである。さらに、自署があることから、多賀城で作成された案文などではないと考えられる。

(12) **第VI-b 層**出土の遺物(第 81 図)

第VII-b層からは多量の瓦(平箱にして約 100 ヶ分)のほか、若干の須恵器・須恵系土器・ 土師器が出土した。

須恵系土器は杯の底部 1 点と高台杯 2 点が出土している。須恵器には、杯・高台杯・蓋・甕がある。杯は、糸切り 2 点とヘラ切り 5 点である。土師器は若干出土したが、磨滅しているものが多く、詳細は不明である。

瓦は、軒丸瓦 25 点、軒平瓦 25 点、隅瓦 1 点のほか多量の平瓦・丸瓦がある。この中に 第 I 期の文字瓦 15 点と第 II 期の刻印瓦 33 点が含まれている。軒丸瓦は、111-A が 3 点、 111-C が 1 点、114 が 1 点、第 I 期重弁の小片 3 点、210 が 13 点、220 が 2 点、第 II 期重 弁の小片が 2 点である(第 83 図参照)。軒平瓦では、510 ないし 511 が 9 点、621 が 14 点、 640 が 1 点、650 が 1 点となる(第 84 図参照)。隅瓦は第 85 図 1 に示した第 I 期のもの 1 点である。平瓦のうち 3 分の 1 の 662 点を抽出し、叩き等の技法から観察を行ったところ、



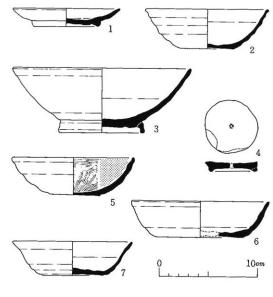
第81図 第Ⅶ層出土平瓦

次のような分類結果が得られた。第1期の平瓦では、両面にヘラケズリあるいはナデを加えたもの(第81 図 1)、凸面はヘラケズリを受けるが凹面の布目が残るもの(2)、平行線状の叩き目が残るもの(3)、格子叩き目の上に平行状叩き目が重なるもの(4)、縄叩き目の上に格子叩目が重なるもの(5)、縄叩き目の上に矢羽根状叩き目が重なるもの(6・7)、格子叩き目のもの(8)がみられる。第1期平瓦は 169 点であるが、その 8 割までが両面を調整した(1)のタイプである。第1期の平瓦は、凸面に縄叩き目を残し、凹面はナデ消されたもので、475 点にのぼる(9・10)。第11期の瓦は縄叩き目を残し、凹面の布目をやや雑にナデ消したものである。側端の断面形、および自然釉・灰のかかり方に特徴があり、6 点が確認されている(11)。第1V期の瓦は 2 点含まれている。凸面に粗雑な縄叩き目を、凹面に布目を残すもので、2 点とも厚い瓦である(12・13)。以上のように、この層の瓦は、第11期のものと第1期の瓦が主体であるが、わずかながらも第111期・第1V期のものが含まれている。

(13) 第Ⅱ~第Ⅵ層出土の遺物(第82図)

第Ⅱ層以下第Ⅳ層までの各層からは、須恵系土器の細片が多量に出土している。須恵系土

器・土師器・須恵器の占める割合を、杯類の底部数で比較すると、294:152:64 となる。須恵系土器は、杯(第82図2)、小型の台付皿(1)、大型の高台杯(3)がみられるが、底径4~5 cmの小型杯がその主体を占めている。なお、高台杯の中に底部中央が尖孔されたものがみられる(4)。この尖孔は焼成前かと思われるが、表面が磨滅しているため判然としない。土師器には、糸切りの内黒杯(5)があり、須恵器では、糸切り(7)とヘラ切り(6)などがみられる。



第82図 第Ⅱ~VI層出土土器

B 各種遺物の出土傾向

(1) 瓦類

今回の調査によって平箱で約1,500ヶ分という果多しい量の瓦が出土した。この中に軒 瓦のし435点・鬼板1点・甕斗瓦1点・隅瓦2点と文字瓦525点がみられる。

軒瓦は、表 4 に示したように軒丸瓦 203 点と軒平瓦 228 点である(第 83・84 図)。各時期の割合は、第 I 期が 45%・第 II 期 50%・第 III 期 3%・第 IV 期 2%となり、第 III・IV 期の瓦は極めて少ない。こうした傾向は、平瓦での比率および文字瓦にみられる傾向とも一致している。なお、軒丸瓦 250 と 440 は新種である。図 18 の 250 は、径 24 cmと推定される大きな重弁連花文軒丸瓦である。弁の形や胎土が 210 重弁連花文と極めて類似しており、第 II 期の瓦と思われる(註 2)。図 17 の 440 は、径 18~19 cmと推定される重弁連花文軒丸瓦である。弁の盛り上*)は全体に弱く、小弁も周囲に沈線状のものをめぐらすことで表現されている。中房と周縁は欠損しており不明である。胎土は小砂粒を多く含み、表面は灰褐色、断面は暗い灰色を呈する。これと良く似た瓦が、宮城県加美郡一の関遺跡から出土している(註 3)。

道具瓦には、鬼板・隅瓦・慶斗瓦がある。鬼板は、方形の重弁蓮花文鬼板 950 の小片で、第 I 期のものである(第 86 図 4)。隅瓦 2 点は、格子叩き目の残るもの(図 1)と縄叩き目の上に矢羽根叩き目が重なるもの(2)で、ともに第 I 期の瓦である。第 85 図 3 は、喫斗瓦かと思われる。巾 4.5 cm、厚さ 2.2 cmのもので、片側に深さ 1.5 cmの分割線が入れられている。片面には縄叩き目がわずかに残され、裏面には第 I 期刻印の「矢」 -A が押されている。

このほか、特異な瓦としては、第 86 図 5 と 6 がある。5 は、平瓦の凸面に太いヘラで 唐草文が描かれているものである。凹面に模 骨の枠板痕がみられること、および胎土・焼成の点から、第 I 期の平瓦と考えられる。6 は平瓦凸面に 4×3.5 cm程の突起部分がみられるものである。広端部近くにみられる圧痕と同時に縄叩き目をつぶしているもので、凹面をナデ調整する際に用いた凹型によったものと思われる。

文字瓦は 525 点出土した。その 8 割が第 II 期の刻印瓦、2 割が第 I 期の文字瓦であり、このほか時期不明のものが数点みられる。これらの文字瓦のほとんどは、すでに当研究所の年報と紀要によって紹介されているので(註 4)、ここでは拓影と出土点数表を示し、概要を簡単に述べるにとどめたい(第 85 図~91 図・表 $5\cdot 6$)。

第 I 期の文字瓦には、ヘラ書きによるもの、 箔あるいは平瓦製作時に用いた凸型に文字を 彫り込んだものによる文字瓦などがある(表 5)。ヘラ書き瓦では、丸瓦玉縁部に記された 「下」・「常」・「毛」・「木」・「富田」、丸瓦凸面の「富 田」・「下」、丸瓦凹面の「木」(以上第 87 図)、 平瓦凹面の「玉造」・「玉□」・「上見富」・「下」・ 「上」、平瓦凸面の「貳"(以上第 89 図)、軒丸 瓦の瓦当面に記された「木」、軒平瓦凹面の 「木」(第 85 図)などがみられる。凸型による 陰刻文字の平瓦では、「下今」・「下」・「上」・ 「常」・「今」などがある(第 88 図)。軒丸瓦の 箔によるものとしては、「相」がある。以下で はこのうちの主要なものについて説明したい。

	分類番号	点数	 拓影	備考	
	110-A	1	THAV	C, wn	
	110-B	4	第 83 図 1		
	111-A	5	第 85 図 1		
	111-B	3	第 83 図 2		
	111-C	3	// 3		
	111-E	10	<i>"</i> 4	第Ⅰ期	
	111-F	1	第 85 図 2	(81 点)	
	111-I	3			
	111-G	1	第 83 図 6		
	111-J	3	<i>"</i> 5		
	114	2	<i>"</i> 7		
	重弁小片	45			
軒	210	70	<i>"</i> 8		
丸瓦	220-B	1	<i>11</i> 9		
щ	220-C	1			
	220-D	1		第Ⅱ期	
	220-E	10	<i>"</i> 10	(108 点)	
	220-F	7	<i>"</i> 11		
	220 一小片	16			
	250(新種)	2	<i>"</i> 18		
	310	6	<i>"</i> 12	第皿期 (8 点)	
	311	1	<i>"</i> 13		
	320	1			
	410	2	<i>"</i> 15		
	431	2	<i>"</i> 14	第Ⅳ期	
	452	1	<i>"</i> 16	(6 点)	
	440(新種)	1	<i>"</i> 17		
	510•511	110	第 83 図 1	~ т ₩□	
	512	2	<i>"</i> 2	第 I 期 (114 点)	
	513	2	<i>"</i> 3		
	620	4	<i>"</i> 5		
	621	66	<i>"</i> 6		
軒	624	1	<i>11</i> 9	第Ⅱ期	
平瓦	640	37	" 4-8	(111 点)	
	641	2	<i>יי</i> 7		
	660	1	<i>"</i> 10		
	650	2	" 11		
	710	1	<i>"</i> 12	第Ⅲ期	
	721-A	2	<i>"</i> 13	(6 点)	
	721-B	1	<i>"</i> 14		
	821-B	1	<i>"</i> 15	第 IV 期	

表 4 軒瓦の出土数(総数 435)

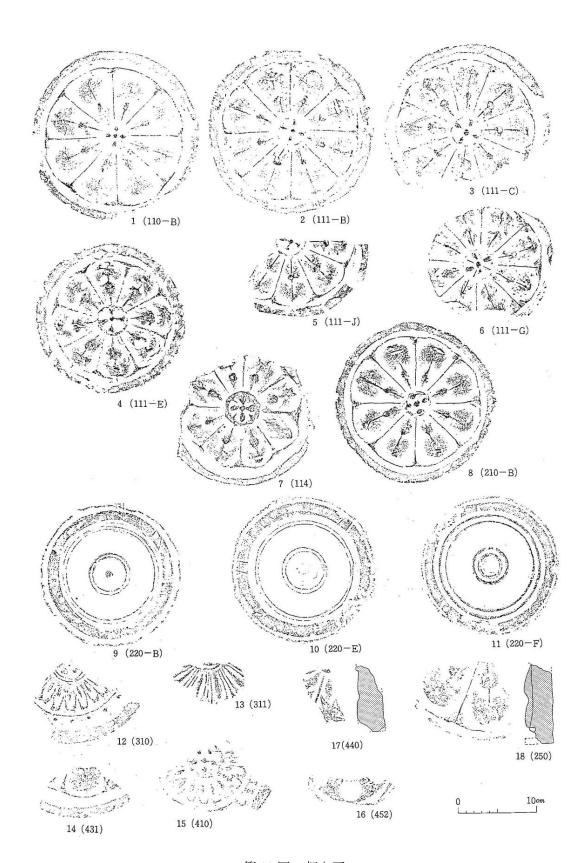
第89図1の「玉造」は、巾の広いへラで浅く記されたものである(図版 26-6)。この平瓦は、凹面に布目が残り、凸面はヘラケズリにより縄叩き目が消されている瓦である。同図4の「上見富」は、平瓦凹面に先の尖った太いヘラを用いて記されている(図版 26-7)。3番目の文字は下半が欠けているが、これまで知られている「上見」、「上富」銘の瓦と類似していることから「上見富」かと思われる(註4)。この平瓦は、凹面に巾約 $1.8\,\mathrm{cm}$ を単位とした模骨の枠板痕が残り、凸面には変形矢羽根叩き目がみられるものである。第88図8は、同図 $1\sim7$ と同様に文字(?)部分にも布目が残っているものであり、陽出文字を彫った凸型によったものと思われる(註5)。この文字(?)は少なくとも $3\sim4$ 回位置をずらして押さ

記銘 方法	記銘場所	銘	点数	拓影	
	丸瓦玉縁	下	28	第 87 図 1	
		常	15	<i>"</i> 2	
		毛	5	<i>"</i> 3	
		木	8	<i>''</i> 4	
		富田	1	<i>"</i> 5	
	丸瓦凸面	富田	1	<i>"</i> 6	
		下	1	<i>"</i> 7	
	丸瓦凹面	木力	1	<i>"</i> 8	
_	平瓦凹面	玉造	1	第89図1	
ヘラ書		玉口	1	" 2·3	
		上見富	!	<i>''</i> 4	
		玉	1	<i>''</i> 5	
		下	1	第 88 図 10	
		上	3	<i>"</i> 11	
		?	1	<i>"</i> 12	
	平瓦凸面	上	1	第 88 図 13	
		貮力	1	<i>"</i> 14	
	軒丸瓦	木	1	第 85 図 2	
	軒平瓦	木	1	<i>''</i> 4	
	平瓦凹面	下今	21	第 88 図 1	
型		下	2	" 2	
		上	3	<i>"</i> 3	
		常	4	<i>''</i> 4	
		今	9	"5~ 7	
		口(不明]	1	<i>"</i> 8	
		(下の左文字]	1	<i>11</i> 9	
	軒平瓦	上	1	第 85 図 3	
箔	軒丸瓦	相	5	第 85 図 1	

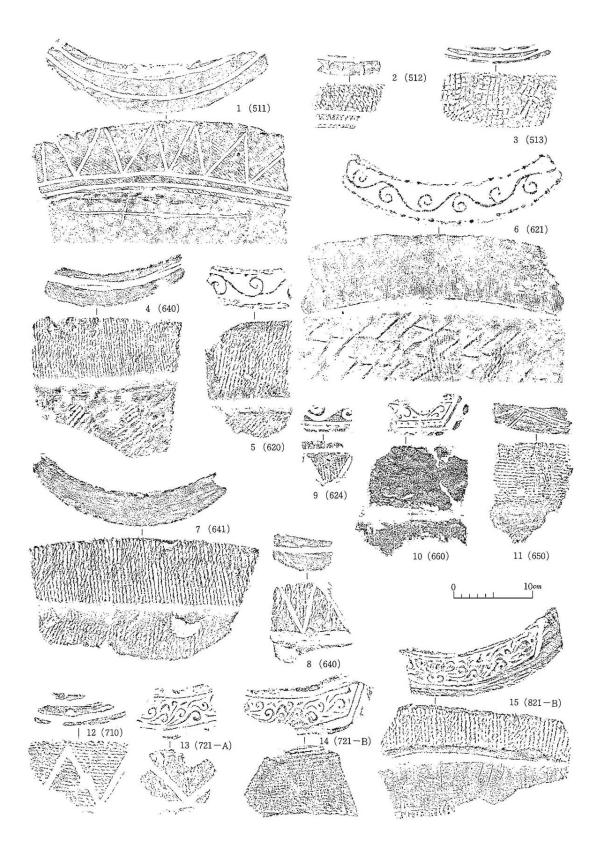
表 5 第 1 期文字瓦

. , _ 0	- , ,,=				
刻印銘	種類	出土点数	拓影		
物一A	平瓦	67	第 90	図 1	
	丸瓦	1	另 30	A I	
	軒平瓦	1	第 91	図 1	
物一B	平瓦	6	第 90	<u>に</u>	
	丸瓦	5	另 30	진 2	
丸-A	平瓦	116	"	3	
丸一B	平瓦	3	"	4	
矢-A	平瓦	64	"	5	
	軒平瓦	1	第 91	図 2	
	熨斗瓦	1	第 86	図 3	
矢-B	平瓦	7	第 90	図 6	
巾	丸瓦	11	"	7	
伊	丸瓦	82	"	8	
田一A	平瓦	17	"	9	
	丸瓦	7			
田一B	平瓦	5	"	10	
田一C	平瓦	4	"	11	
田一D	丸瓦	1	"	12	
総計 399					

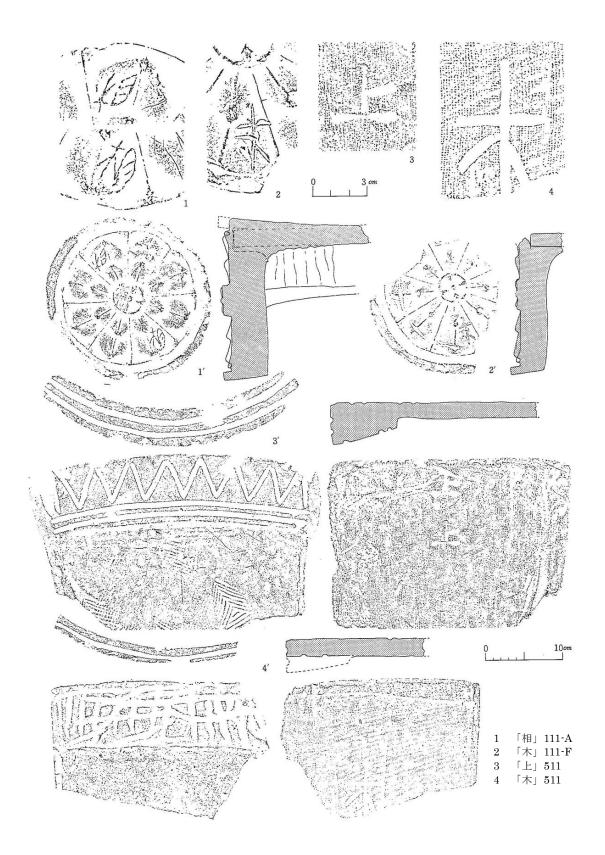
表 6 第Ⅱ期刻印瓦



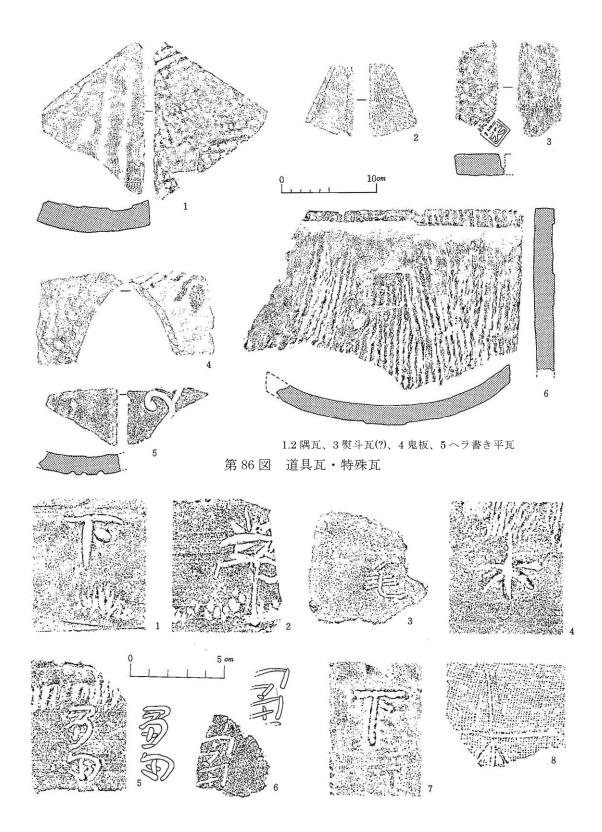
第83図 軒丸瓦



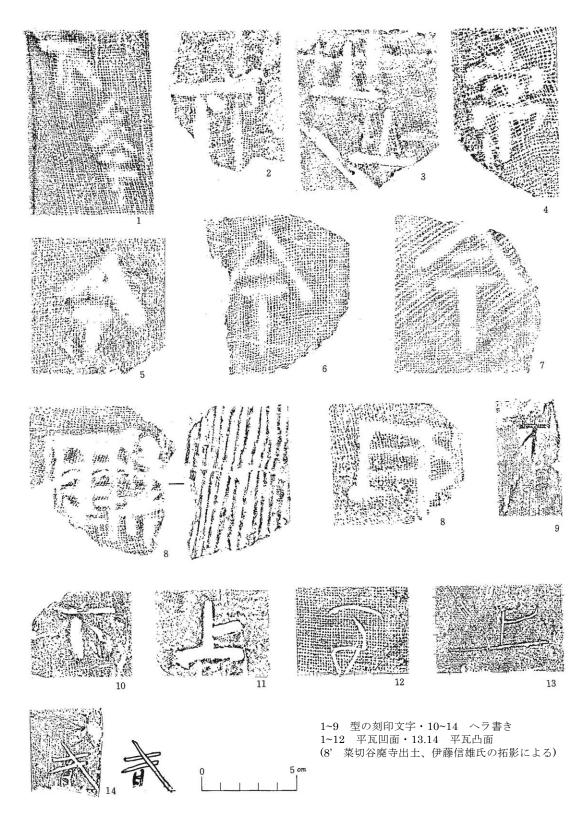
第84図 軒平瓦



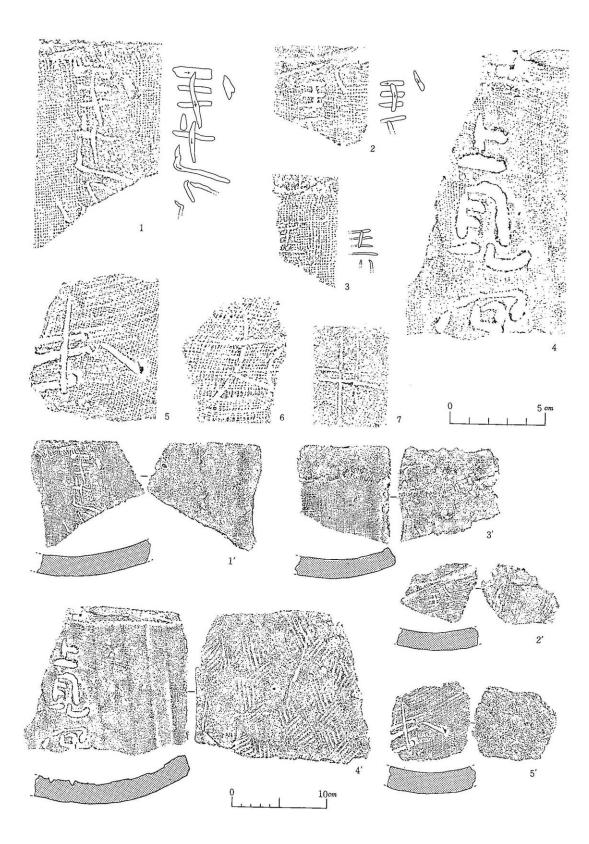
第85図 第Ⅰ期文字瓦(軒丸)



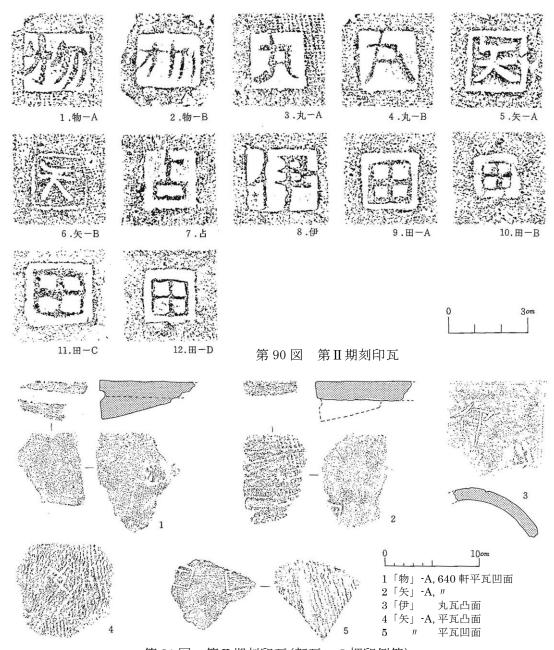
第87図 第1期へラ書き文字瓦



第88図 第Ⅰ期文字瓦



第89図 ヘラ書き瓦



第91図 第Ⅱ期刻印瓦(軒瓦への押印例等)

れている。なお、これと同型とみられる瓦が菜切谷廃寺から出土している(註 6)。第 85 図 2 の「木」は、111-F 軒丸瓦の弁の部分にヘラ書きされたものである(図版 26-3)。111-F は 范に「小田」が彫り込まれた軒丸瓦であるが、この「木」は、「小田」の位置と一致する。 さらに細かく観察すると、「木」の周辺には不自然な高まりが残っている。したがって、この「木」は「小田」を消して記されたものと考えられる。第 85 図 3 は 511 軒平瓦の凹面

に太いへラで「木」を記したものである。この瓦は、桶巻作りによる平瓦の凸面広端部に ヘラキズをつけて顎部を接合した軒瓦で、現在は顎部が剥離している。

第 Π 期の刻印瓦としては、「物」・「丸」・「矢」・「占」・「伊」・「田」の 6 文字・12 種がみられ、総数 399 点となる(第 90・91 図、表 6)。このうち「田」-D としたものは、「田」-A と良く似た印であるが、文字部分の巾および突出の角度に違いがみられたため別印と考えた。これらの刻印は平瓦・丸瓦に押されたものが大部分であるが、軒瓦等にもわずかながらみられる。640 単弧文軒平瓦に「物」-A と「矢」-A が押印され、奥斗瓦に記された例では「矢」-A がある(第 91 図)。なお、「伊」の刻印丸瓦の中にへラで「伊」を併記したものが確認されている(同図 3)。

そのほか、時期の不明なヘラ書き瓦「大」、「井」などが出土している(第89図6・7)。

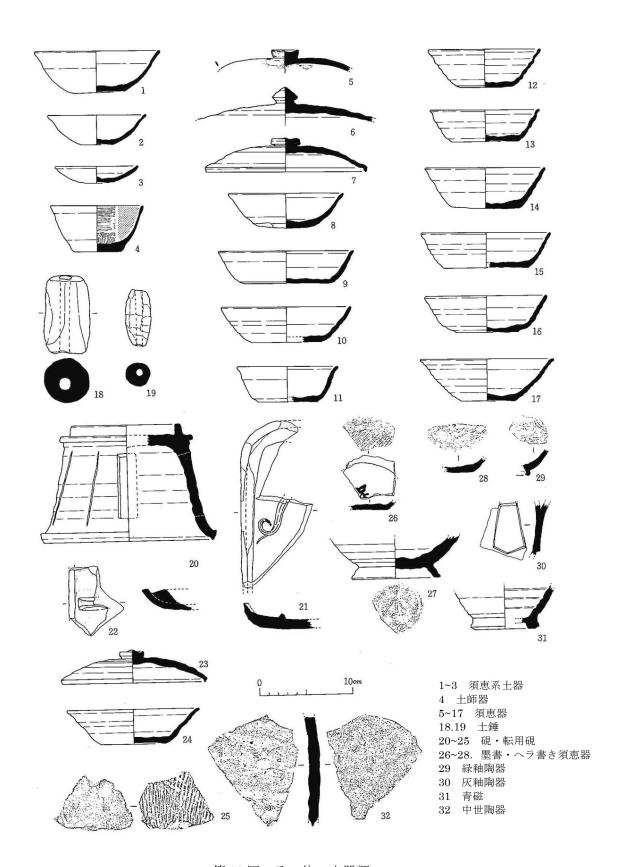
(2) 土器

土器類には須恵系土器・土師器・須恵器・土錘などがあるが、図示できない小片が多い。 ここでは、全体的な様相を概観し、主要な遺物を中心に説明を加えたい。

まず、**須恵系土器・土師器・須恵器**の量的な関係を杯類の底部数でみると、603(この内高台杯 197):265(同 23):290(37)点となり、須恵系土器が約5割を占めている。須恵系土器の杯には、第92図1~3に示したような器形がみられるが、口径11~12 cm・底径4 cm前後である2のタイプの杯が圧倒的に多い。土師器の杯は、国分寺下層式と思われる数点の破片以外ロクロ調整の内黒杯である。底部切り離し技法のわかるものとしては、糸切りが39点(第92図4)、ヘラ切りのもの1点がある。このほか全面を回転ヘラ削りしたもの9点と手持ちヘラ削り調整を加えたもの3点がみられる。須恵器杯では、ヘラ切り117点(第92図10~16)、糸切り78点(同図17)、静止糸切り後周縁を手持ちヘラ削りしたもの1点(26)のほか、全面を手持ヘラ削りしたもの13点(8)、回転ヘラ削りしたもの11点がみられる。須恵器蓋の中に器面全体をヘラミガキした例が1点発見されている(5)。これは第28次調査の際一括出土した"ミガキの須恵器"と同質のものである(註7)。

なお、須恵器の中に墨書・ヘラ書きされたものが 3 点発見されている。図 26 は、静止 糸切りの杯底部に「足」と墨書されたものである。27 の瓶・28 の杯は底部に「×」印な どのヘラ記号があるものである。

硯は、須恵質の円面硯 18 点、風字硯 3 点と土師質の 2 面硯 1 点が出土しているほか、転用硯が 7 点確認されている(第 92 図・図版 $25 \cdot 26$)。第 92 図 20 の円面硯は 5 分の 1 程の破片から復元したものである。脚部には短冊形の比較的大きな透しがみられ、2 ないし4 箇所にあけられたものと思われる。全体に黒色あるいは灰黒色を呈し焼成は堅繊である。なお、この硯は第 16 次政庁地区の調査で出土した破片と接合できたものである。図 21 の



第92図 その他の土器類

風字硯は現存長 18 cmの大形品で、陸と海の境に唐草文様の隆帯をめぐらす。内面に木目が観察されることから、型によって製作された風字硯であることが知られる。裏面は、全体にヘラケズリにより成形されており、側端近くに脚部の剥離した跡がみられる(図版25-9)。22 は、内面にヘラミガキ・黒色処理を施した土師質のもので、二面硯かと思われる。転用硯としては、須恵器の蓋(23)・杯(24)・甕(25)の内面を利用したものが確認されている。

灰釉陶器には、高台付皿・手付瓶などがみられるが、6点とも小片である。第92図30は黒笹90号窯式の手付瓶の破片である。

緑釉陶器は小片 3 点がみられる。第 92 図 29 は陰刻花文のある椀(?)である。内外両面に 淡い灰緑色の釉がかかり、断面は黄褐色を呈する硬質のものである。

青磁は 1 点のみ出土した(第 92 図 31)。瓶の破片かと思われるもので、内面に巾約 1.3 cmごとに沈線がめぐらされている。内外両面には淡い灰緑色の釉が比較的うすくかけられており、断面は明るい灰色を呈す。また、高台部はかなり研磨されている。南宋代のものと思われる。

中世陶器は第92図32に示した大甕の破片1点が出土しているだけである。大甕肩部付近の破片と思われ、格子の押型がみられる。内面は雑なナデによって調整されている。

(3) その他

そのほか、砥石12点・鉄釘1点・鉄滓238点などが出土している。

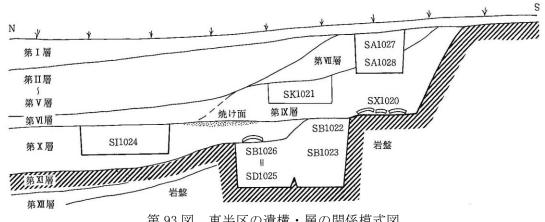
- 註2 仙台市枡江遺跡の瓦窯跡からこれと同箔かと思われる軒丸瓦が出土している。 仙台市教育委員会・古窯跡研究会 r 枡江遺跡一現地説明会資料一 | 1978
- 註3 『宮城県文化財発掘調査略報一昭和51年度分一』宮城県教育委員会1977
- 註4 高野芳宏ほか「多賀城の文字瓦(その 1)」(研究紀要 111)1976
- 註5 進藤秋輝ほか「多賀城創建瓦の製作技法」(研究紀要 11)1975
- 註6 宮城県教育委員会『菜切谷廃寺跡』1956 参考資料として掲載した図8'の拓影は、上記報告書中に「取」かとされている瓦であり、伊東信雄氏から提供して頂いた。
- 註 7 『多賀城跡一昭和 51 年度発掘調査概報一』宮城県多賀城跡調査研究所 1976

5 考 察

今回の調査で検出した主要遺構は、掘立柱建物跡 5 棟、柱列跡 3 条、竪穴住居跡 1 棟、 土壙 4 などである。調査地区が谷部に当ったため、これらの遺構の検出面は複雑な様相を 示している。そこで、まず(1)で遺構と堆積層との関係を整理し、(2)・(3)で遺構と遺物に ついて若干の考察を加えることとしたい。

遺構と堆積層

主要遺構と堆積層との関係を模式的に示すと、第93・94図のようになる。西区は調査 を中断したため、東区の堆積層と正確な対比はできない。



第 93 図 東半区の遺構・層の関係模式図

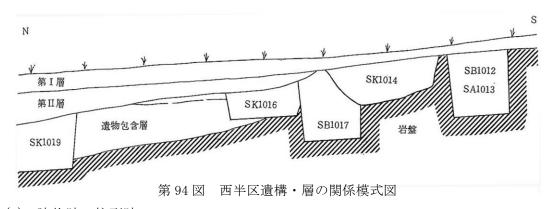
東区における最下層の遺構は、SD1025 溝を伴う SB1026・SB1022・SB1023 掘立柱建 物跡と、SX1020 階段状遺構である。これらは、南側の岩盤を削平した後に構築されたも ので、北側部分では、遺物を含まない第XI層から掘り込まれている。その時期について みると、SX1020 は、721-A 軒平瓦が使用されていることから、第Ⅲ期以降の施設と言え る。SB1026 は、壁持ち地覆の平瓦が第Ⅱ期のものと思われ、しかも、この中に火災にあ っている平瓦があることから、第Ⅲ期以降の時期が与えられよう。さらに、SX1020 が、 削平した所に建てられた建物へおりるための階段と理解することが許されるならば、 SB1022・1023 建物跡の年代も第Ⅲ期以降と考えることができる。

これらの建物跡が廃絶した後、盛土作業が行われている(第 X 層)。この上面から検出さ れた遺構は、S11024 住居跡とその南側の焼け面である。S11024 の時期を示す遺物として は、床面発見のヘラ切り後回転ヘラケズリを加えた須恵器杯がある。なお、第X層には第 Ⅲ期までの瓦は含まれるが、第Ⅳ期の瓦や須恵系土器はみられない。

次の段階で、南側の段の所を中心としてさらに土盛作業が行われている。この土盛りは SK1021 土壙をはさみ第Ⅵ層と第Ⅸ層の 2 回にわたって行われている。第Ⅵ層は、須恵系 土器を含んでおり、それ以降の地業と考えられる。第IX層については、第IV層の瓦を含む こと、この層に直接のる第皿層中に全く須恵系土器がみられないことから、その時期を第 Ⅳ期とみることができよう。

この地区で最も新しい遺構は、 $SA1027 \cdot 1028$ 柱列跡であり、須恵系土器を含む第VII層を切って構築されたものである。その後、須恵系土器の細片を多く含む第 $VI \sim VII$ 層が自然 堆積している。

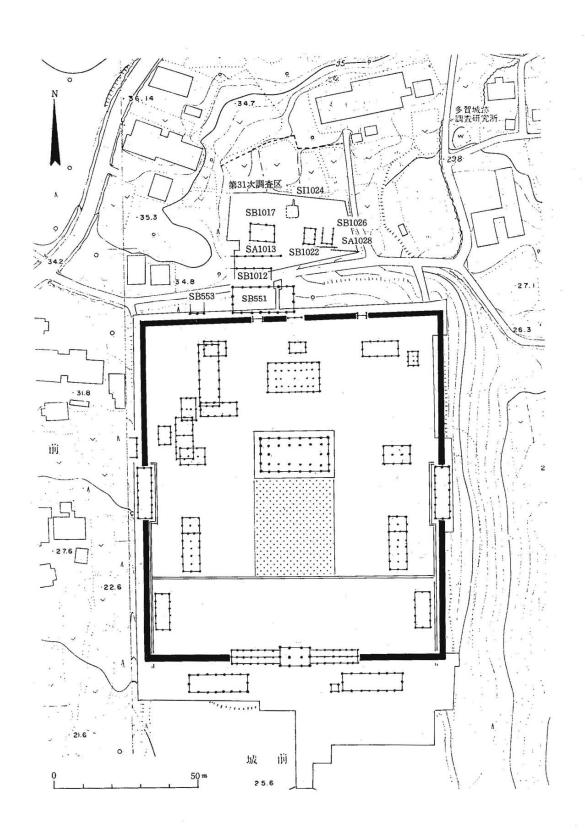
西区における各遺構の前後関係は、遺物包含層 \rightarrow SK1016 土壙 \rightarrow SBl017 建物跡 \rightarrow SK1014 土壙、遺物包含層 \rightarrow SK1019 土壙となる。SB1012 建物跡と SA1013 柱列跡はそれ自体に $A\rightarrow B$ の建て替えがみられるが、他の遺構との重複関係はない。各遺構の時期は次のように考えられる。遺物包含層に第 Π 期 210 軒丸瓦が入っていることから、これを切る SK1014 土壙は第 Π 期以降のものである。SB1017 建物跡と SA1013 柱列跡は、ともに柱穴埋め土出土の平瓦から第 Π 期以降のものであることが知られる。SB1012 建物跡は柱穴の配列、柱穴の掘り方、建て替えなどの状況から SA1012 柱列跡と共存したものと考えられるので、やはり第 Π 期以降と解釈できよう。焼土と瓦が充満する SK1014 土壙と北端の SK1019 土壙は、中から出土した須恵系土器によって、第 Π 以期末あるいは第 Π 期のものと考えられる。



(2) 建物跡・柱列跡

今回の調査結果に第 19 次調査の成果を加え、政庁北方地区における建物群のあり方をまとめてみたい(第 95 図)。まず、その時期についてみると、今回検出した建物跡は、さきに述べたようにいずれも第Ⅲ期以降の造営と考えられる。また、第 19 次調査で発見された SB551・SB553 も同様の結果がでている(註 8)。したがって、政庁北に隣接するこの地域が使用されるのは、平安期になってからであることが確認される。

つぎに、これらの建物群の配置・方向・造営技法などの点からみると、2 つのグループに大別される。その 1 つは、政庁の北に接する比較的に高い箇所に検出された SB551・SB553・SB1012 建物跡と SA1013 柱列跡である。これらの方向はいずれも政庁の軸線と一致しており、その規模は 7×3 間・東西 5 間以上といったように大きい傾向がある。また、柱穴も 1 辺 1m 前後の方形のものである。一方、その北の低い場所に検出された、



第95図 政庁と北方地区の概略図

SB1017・SB1022・SB1023・SB1026 建物跡は、 2×3 間といった小規模のもので、柱穴も小さい傾向がみられる。また、その方向は、基準線に対し $5\sim10$ 度程南に偏し、妻と側柱列の方向が直交せず平行四辺形となる特徴がみられる。

以上のことから、この地域が、政庁の遺構配置と強い関連が考えられる建物が設けられた南半部と、それとは異質な小規模建物のある北半部とに使い分けられたと考えられる。 そうすると、両グループの境に SB1012 の目隠し塀と思われる SA1013 柱列跡が検出されたこと、および北半部に竪穴住居跡がみられるという現象も、その反映と考えることができよう。

(3) 遺物

今回の調査により厖大な量の瓦と若干の土器類が出土したが、直接遺構に関係するものは、SB1026 の壁持ち地覆の平瓦、SX1020 階段状遺構に敷かれた瓦などがあげられるにすぎない。その他の遺物は、ほとんど堆積層から出土したものである。堆積層出土の多量の瓦については、この地域で検出された建物遺構のあり方からみて、その多くは他の地域=南に隣接する政庁地区から運び込まれたものと考えられる。このことは、硯の中で、政庁地区出土の破片と接合できたものがあることからもうらづけられる。

また、極めて多量の第II期瓦と焼土を含む第VII層は、第II 期終末の火災で生じた政庁地区の焼土層と様相が類似し(註 9)、これとの関連が考えられる。しかしながら、第VII層には第IV期の瓦と須恵系土器がわずかに含まれており、第IV期後半以降に形成されたことが知られる。また、この層を基礎地業としたような主要遺構が検出されなかったことから、この第VII層は、政庁地区で生じた何らかの理由によって形成されたものと思われる。したがって、政庁地区では、第IV期後半以降のある時期に、多量の焼土・瓦を搬出する必要性を伴うかなり規模の大きな造営事業が行われたものと推測される。

- 註8 『多賀城跡一昭和48年度発掘調査概報一』宮城県多賀城跡調査研究所1974
- 註 9 『同上一昭和 44 年度発掘調査概報一』1970

IV 付 章

1 調査成果の普及と関連研究活動

(1)現地説明会の開催

当研究所は、発掘調査を進めるとともに、その成果を一般の人々に理解してもらうため 現地説明会を開催している。本年度は昭和52年6月25日に「第30次発掘調査について」 という内容で鎌田俊昭が行なった。

(2)伊治城跡推定地の発掘調査

多賀城に関連する古代遺跡の発掘調査について、当研究所では、多賀城関連遺跡第1次5ヵ年計画を立てて、昭和49年度から調査に着手している。本年度はその第4年次として、宮城県栗原郡築館町城生野に所在する伊治城跡推定地について、昭和52年7月1日から7月31日まで発掘調査を行なった。

- (3)他機関の発掘調査への協力
- 1 城生遺跡

所 在 地 宮城県加美郡中新田町

期 間 昭和52年4、5月

協力所員 桑原滋郎、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏

2 払田棚跡遺跡

所 在 地 秋田県仙北郡仙北町

期 間 昭和52年6月

協力所員 氏家和典

3 兜塚古墳

所 在 地 仙台市根岸町

期 間 昭和52年8月

協力所員 氏家和典

4 雷神山古墳

所 在 地 名取市

期 間 昭和52年9、10月

協力所員 氏家和典

5 弓張平公園遺跡

所 在 地 山形県西村山郡西川町

期 間 昭和 52 年 10 月

協力職員 鎌田俊昭

6 関和久遺跡

所 在 地 福島県西白河郡泉崎村

期 間 昭和 52 年 11 月

協力所員 桑原滋郎、進藤秋輝、白鳥良一、鎌田俊昭、高野芳宏、古川雅清

7 払田棚跡遺跡

所 在 地 秋田県仙北郡仙北町

期 間 昭和 52 年 11 月

協力所員 氏家和典

8 城輪棚跡遺跡

所 在 地 山形県酒田市

期 間 昭和 52 年 12 月

協力所員 桑原滋郎

- (4)他機関の環境整備への協力
- 1 山前遺跡

所 在 地 宮城県遠田郡小牛田町

期 間 昭和52年4月、昭和53年1月

協力職員 古川雅清

2 梁瀬浦遺跡

所 在 地 宮城県角田市岡

期 間 昭和52年6月

協力職員 古川雅清

3 長根貝塚

所 在 地 宮城県遠田郡涌谷町

期 間 昭和52年12月

協力職員 古川雅清

- (5)その他
- 1 多賀城市昭和52年度第1回成人大学講座

期 日 昭和52年6月17日

講 師 桑原滋郎

2 多賀城市昭和 52 年度第 2 回成人大学講座

期 日 昭和52年6月24日

講 師 氏家和典

3 昭和 52 年度高等学校図書館職員・司書研修会

期 日 昭和52年8月3日

講 師 氏家和典

4 色麻村誌編纂協力

期 日 昭和52年8月30日

協力職員 白鳥良一

5 昭和 52 年度新任看護職員研修

期 日 昭和 52 年 9 月 30 日

講 師 氏家和典

6 多賀城市昭和 52 年度第 4 回成人大学講座

期 日 昭和 52 年 10 月 14 日

講 師 平川南

7 第 3 回木簡集会(於奈良国立文化財研究所)

期 間 昭和 52 年 12 月 13 日~14 日

参加者 平川南

8名取市市民大学講座

期 日 昭和53年2月18日

講 師 氏家和典

(6)第4回古代城棚、官衙遺跡検討会への参加

昭和53年1月28·29日(於東北歷史資料館)、

東北地方の各地で古代の城棚または官衙の調査が活発に行われ、新たな資料が数多く発見されている。今回は古代城柵、官衙遺跡検討会の第4回目として「発掘調査を通してみた東北城柵遺跡の特質と性格」が主なテーマとなった。その結果、各遺跡の担当者以外にも100名以上の参加者があり、活発な討議が行われた。なお、奈良国立文化財研究所報告のあった遺跡と報告者は、つぎの通りである。

遺	跡	,	名		報		告	î	者	
多	賀	城	跡	多賀均	成跡詞	調査研	究所	鎌田	俊昭	
胆	沢	城	跡	水沢	市教	育委員	員会	伊藤	博幸	
徳	丹	城	跡	岩	手	大	学	佐々木	で博康	
秋	田	城	跡	秋田均	成跡詞	調査事	務所	日野	久	

城	輪	柵	遺	跡	酒田市教育委員会 小野 忍
八	森	追	ŧ	跡	酒 田 中 央 高 校 佐藤 禎宏
払	田	柵	遺	跡	払田柵跡調査事務所 船木 善勝
太	田方	八丁	_ 遺	跡	盛岡市教育委員会 吉田義昭・八木光則
城	生	野	遺	跡	多賀城跡調査研究所 白鳥 良一
関	和	久	遺	跡	福島県教育委員会 木本 元治
亀	岡	追	<u></u>	跡	東北学院大学考古学クラブ

(7)第3回史跡環境整備担当者連絡会議開催

昭和 53 年 3 月 10 日·11 日(於東北歷史資料館)

全国の大規模遺跡遺構の環境整備に関する技術の相互の研究交流及び指導助言を得ることによってより効果的な事業推進に資する目的で開催した。なお、福井県朝倉氏遺跡調査研究所次長、藤原武二氏によって「中世館跡の整備について」と題する研究発表が行われた。本会の出席者はつぎの通りである。

安原啓示 奈良国立文化財研究所計測修景調査室長

光谷拓美 奈良国立文化財研究所技官

藤原武二 福井県朝倉氏遺跡調査研究所次長

芳沢要 福岡県文化課技術主査

千葉与一 郎宮城県教育庁文化財保護課長

扇正人 宮城県教育庁文化財保護課主幹

佐々木光雄 東北歴史資料館学芸部長

村山斌夫東北歷史資料館技師

氏家和典 宮城県多賀城跡調査研究所所長

鎌田哲男 宮城県多賀城跡調査研究所副所長

桑原滋郎 宮城県多賀城跡調査研究所研究員

進藤秋輝 宮城県多賀城跡調査研究所研究員

平川南 宮城県多賀城跡調査研究所技師

白鳥良一 宮城県多賀城跡調査研究所技師

鎌田俊昭 宮城県多賀城跡調査研究所技師

高野芳宏 宫城県多賀城跡調査研究所技師

古川雅清 宮城県多賀城跡調査研究所技師

2 研究成果刊行物

- 1 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976
- 2 研究紀要Ⅳ 1977年3月

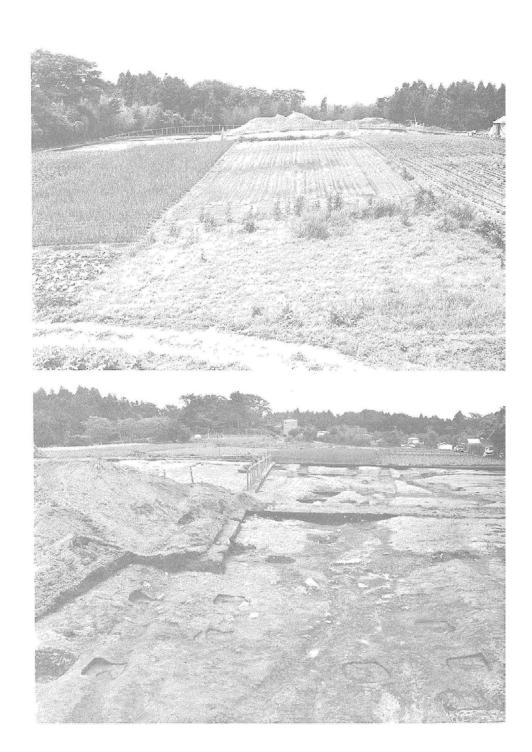
氏家和典「仙台平野における横穴式石室古墳について」

鎌田俊昭「多賀城跡外郭線の変遷と時期について」

平川南「出羽国府論」

平川南・熊谷公男・岡田利文「東北古代史関係文献目録その1(1945-76)」

- 3 桑原滋郎「長根窯跡群 111」涌谷町教育委員会 1976 年 3 月(共同執筆)
- 4 桑原滋郎「研究ノート津軽で作られた須恵器」考古風土記第2号1977年4月
- 5 桑原滋郎「多賀城祉と東北城棚の発掘」歴史手帖5名著出版 1977 年5月
- 6 桑原滋郎「東北の城棚」日本古代文化の探究城 1977 年 6 月
- 7 桑原滋郎「多賀城祉(解説 3)」探訪日本の城1奥羽道1977年12月
- 8 桑原滋郎「東北の城棚」同上月報第5号
- 9 進藤秋輝「郡山台 L 福島県二本松市教育委員会(共同執筆)
- 10 平川南「六、東北大戦争時代一東北の動乱一」古代の地方史6 奥羽編 1978年1月
- 11 平川南「払田棚跡出土の木簡について」日本歴史 357 号 1978 年 2 月
- 12 平川南「多賀城・棚」地方文化の日本史2古代文化と地方1978年2月
- 13 平川南「古代の城棚に関する試論」原始古代社会研究 41978 年 2 月
- 14 古川雅清「日本庭園の基本様式」宮城の文化財第35号1977年12月



図版 1 第 30 次調査地区全景 上 東から 下 SB1000 西門跡から







図版 2 SB1000 西門跡

上 西から

中 東から

下 南から

図版 3 第 30 次調査

- 上 A区全景(北から)
- 中 SB962 建物跡(南から)
- 下 SB962 建物跡柱穴



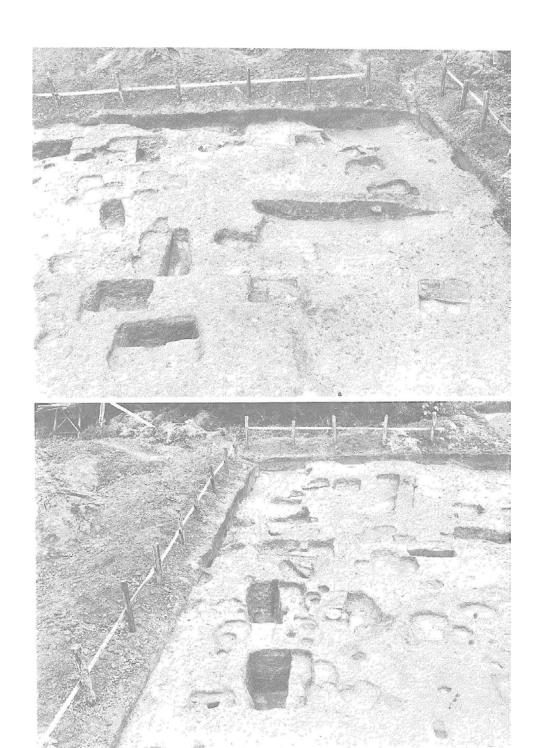






図版 4 第 30 次調査

- 上 SB962·963·969 建物跡、SX965 盛土整地層(南から)
- 下 SX965 盛土整地層、SD968 盛土整地層(北から)

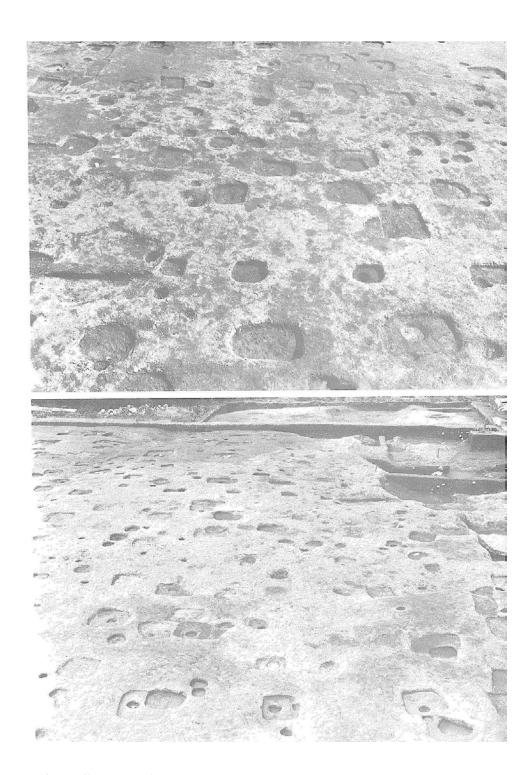


図版 5 第 30 次調査 上 SB963 建物跡(東から) 下 SB969 建物跡(南から)



図版 6 第 30 次調査

- 上 SB970 建物跡、SA971 柱列跡(北から)
- 下 SB970 建物跡(東から)



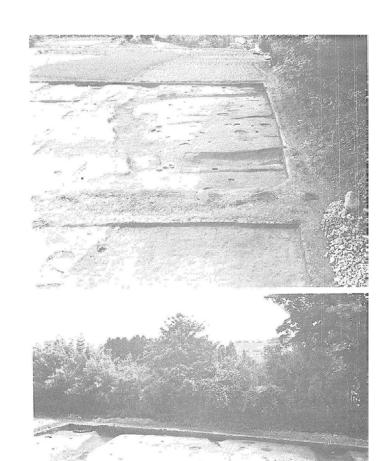
図版 7 第 30 次調査

- 上 SB972・973・1040 建物跡(北から)
- 下 SB972・973・1040 建物跡(南から)



図版 8 第 30 次調査

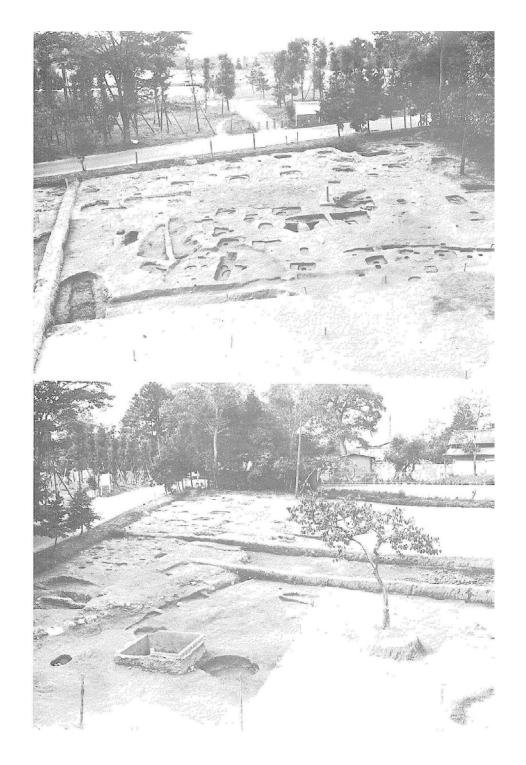
- 上 SB974 建物跡、SD975 溝跡(西から)
- 下 SK978~981、SK983~988 土壙、SE982 井戸跡(南から)



図版 9 第 30 次調査

- 上 SK989・990 土壙、SD993 方形周溝墓(西から)
- 中 SD993 方形周溝墓(北から)
- 下 SK989・990 土壙(北から)



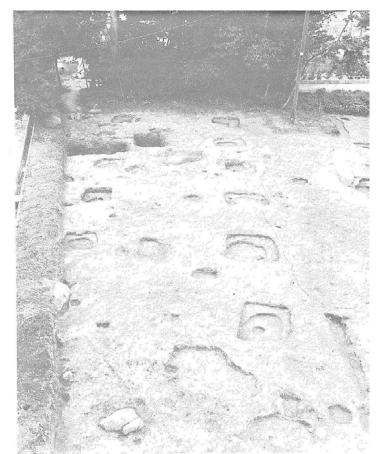


図版 10 第 31 次調査

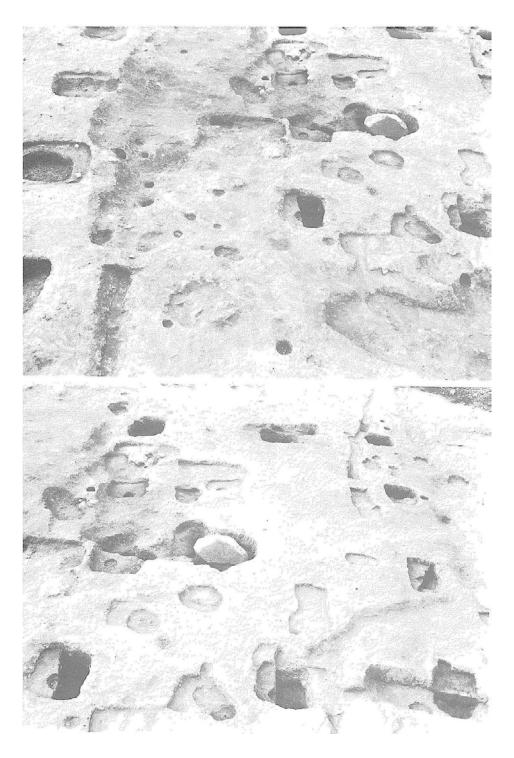
- 上 東区全景(北より)
- 下 発掘区全景(東より)

図版 11 第 31 次調査

- 上 SB1012 建物跡と SA1013 柱列跡 (東より)
- 下 SB1012 建物跡の 柱穴 (A・B の重複状況)





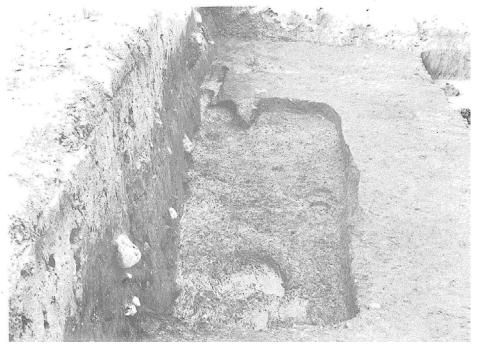


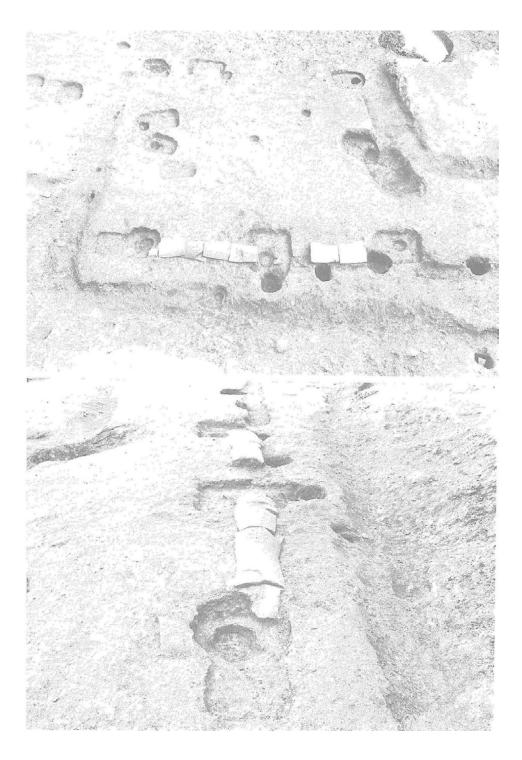
図版 12 第 31 次調査 上 SK1014 土壙跡(東より) 下 SB1017 建物跡(東より)

図版 13 第 31 次調査

上 SA1027·1028 柱列跡(西より) 下 SI1024 住居跡(南より)



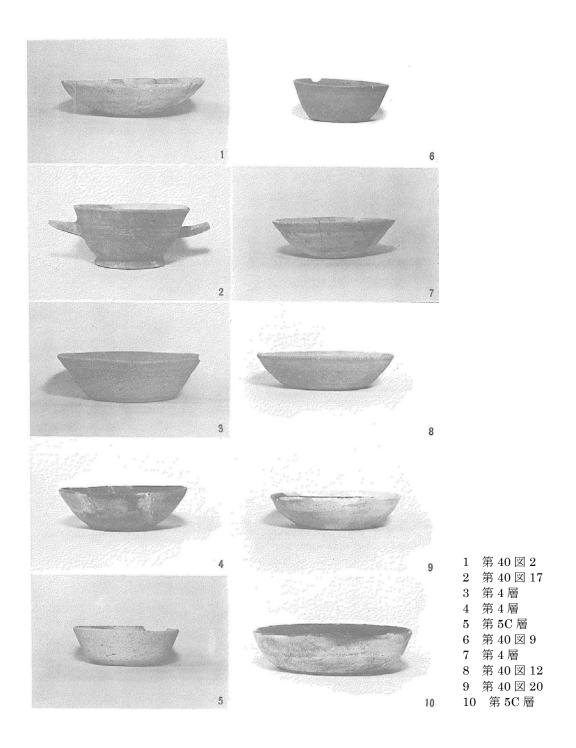




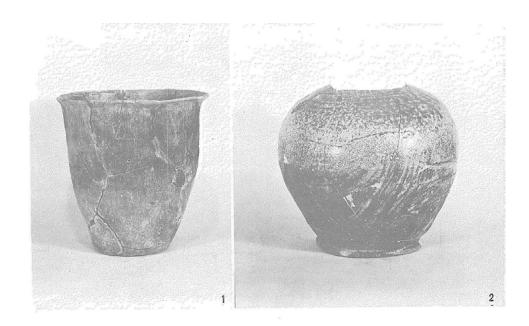
図版 14 第 31 次調査 上 SB1026 建物跡(南より) 下 同壁持ち地覆い地覆いの瓦



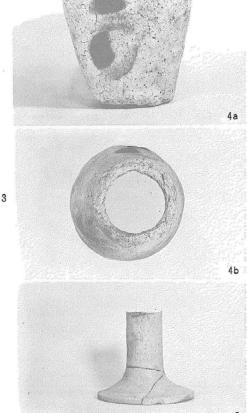
図版 15 第 31 次調査 上 SX1002・1023 建物跡(南より) 下 SX1020 階段状遺構(南より)



図版 16 第 30 次調査 SK981 土壙出土土器 1 須恵系土器杯 2.3.6~8 須恵器杯 4.9.10 土師器杯

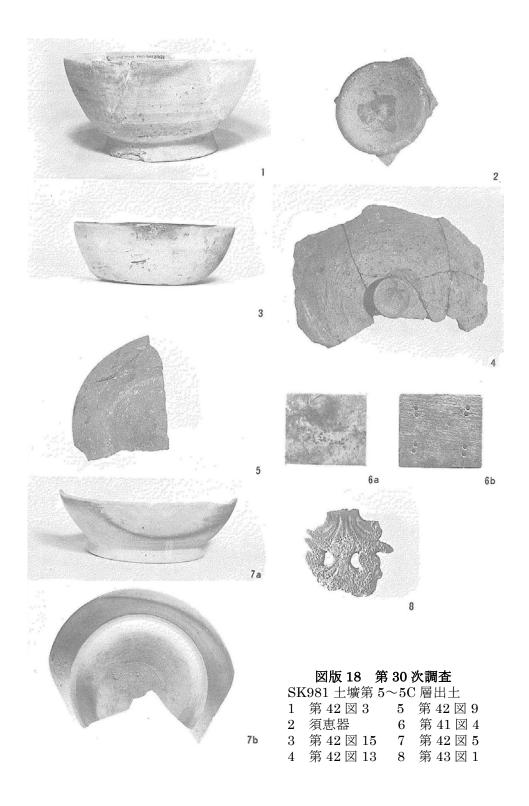


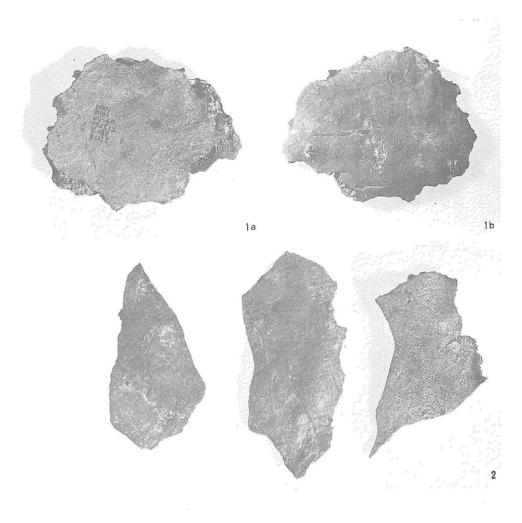




図版 17 第 30 次 SK981 土壙出土土器

- 1 第 42 図 11
- 2 第44図1
- 3 第 42 図 4
- 4 第 42 図 14
- 5 第4層



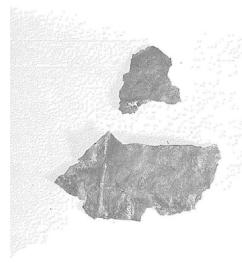


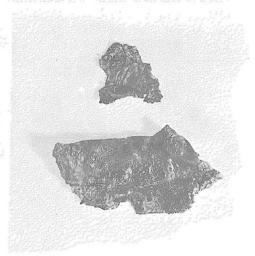
図版 19 第 30 次調査

SK981 土壙出土 漆付着の紙片

- 1 第4層
- 2 第4層
- 3 第 42 図 6







1a

16



2b





3

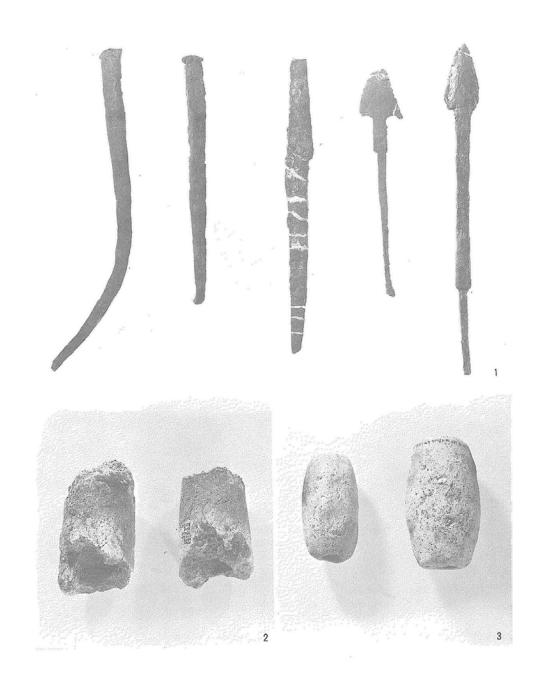


図版 20 第 30 次調査 SK981 土壙第 5C 層出土 1 漆付着紙片

- b付着部分
- 漆付着紙片 2 具注暦断簡
- 須恵器杯底部漆付着 3
- 土師器杯底部漆付着





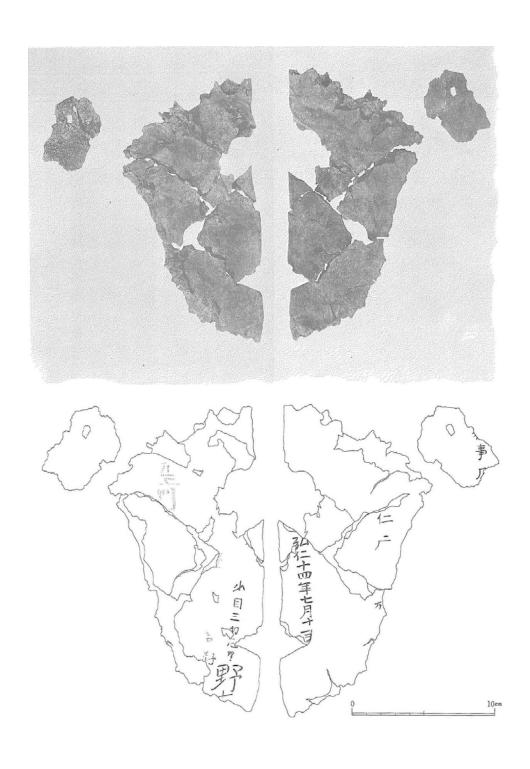


図版 23 第 30 次調査

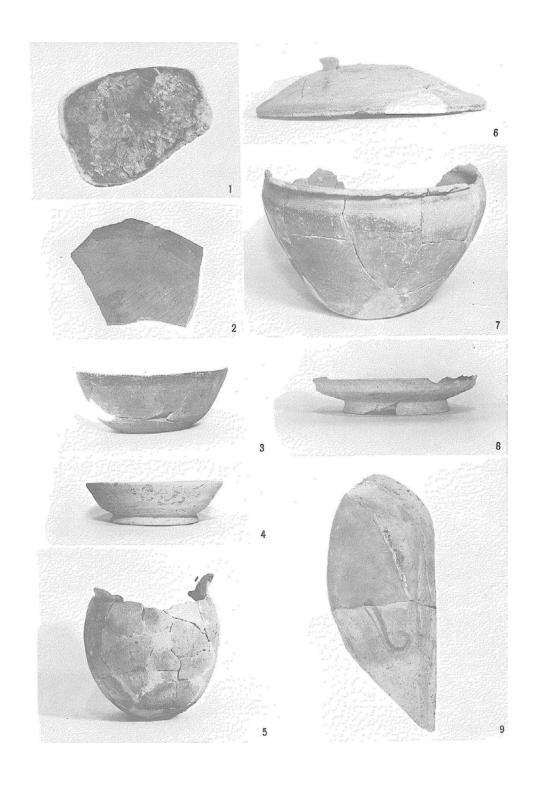
- 1 鉄製品

 - e.第 38 図 5
- 2 フイゴ a.SK967の第1層 b.SK984の第2層
- 3 土錘 a.SD975の第1層 b.第41図1
- 4 第 56 図 4





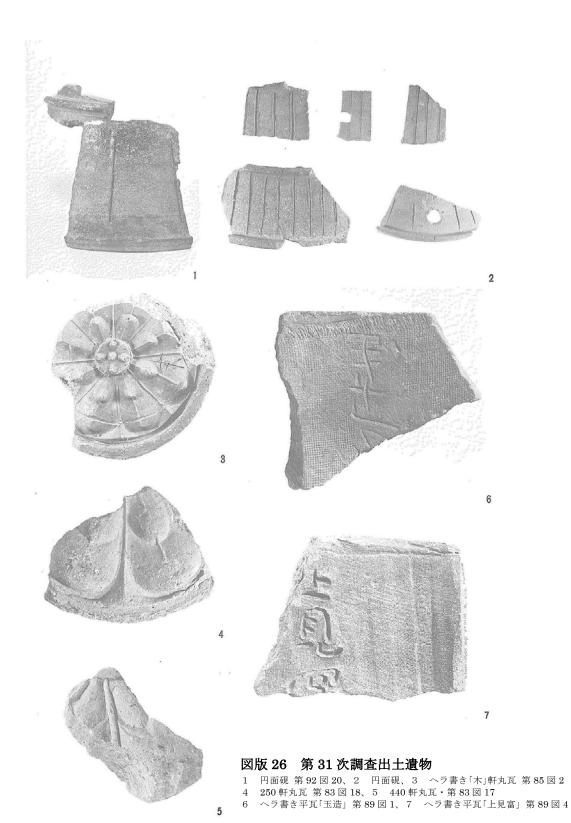
図版 24 第 31 次出土 文書断面 (第Ⅷ層)



図版 25 第 31 次出土遺物

1.5 土師器、2~4・6~8 須恵器、9 風字硯

- 1 漆付着杯 (第VII層)、2 第 92 図 26、3 第 75 図 2、4 第 75 図 3
- 5 第78図4、6 第78図1、8 第76図11、9 第92図21



宮城県多賀城跡調査研究所年報1977

多 賀 城 跡

- 昭和52年度発掘調査概報 -

昭和53年3月25日 印刷 昭和53年3月31日 発行

> 発行者 宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城市浮島字宮前133 TEL (02236) 5 - 0101 印刷所 小泉印刷株式会社